

REVIEW OF ARCHITECTURAL DESIGN COURSE,  
KANAGAWA UNIVERSITY

RAK  
vol.15



【特集】 廃材標本 学生によるセルフリノベーションの軌跡

## 目次

|                               |                          |
|-------------------------------|--------------------------|
| ・特集 廃材標本 学生によるセルフリノベーションの軌跡…… | 1                        |
| 概要                            | プロジェクトの始まり …………… 2       |
| 比較                            | リノベ空間研究 …………… 4          |
| エスキス                          | 模型による検討と提案 …………… 6       |
| 解体                            | 作業からコンセプト誕生へ …………… 8     |
| リスト化                          | 廃材を標本に …………… 10          |
| アクソメ                          | 空間をつくる部材とデザイン …………… 12   |
| 図鑑                            | 代表的な廃材4種 …………… 14        |
| システム                          | 独自開発の展示フレーム …………… 18     |
| 考察                            | 教授対談／石田敏明×曾我部昌史 …………… 22 |
| 編集後記                          | …………… 24                 |
| ・建築探訪                         | …………… 25                 |
| ・2018年度学生優秀作品紹介               | …………… 31                 |
| 修士論文                          | …………… 32                 |
| 修士論文・博士論文全作品リスト               | …………… 40                 |
| 卒業設計・論文                       | …………… 41                 |
| 総評                            | …………… 56                 |
| 卒業研究全作品リスト                    | …………… 59                 |
| 学部設計課題優秀作品                    | …………… 61                 |
| ・NEWS                         | …………… 81                 |
| 課外活動ほか・学外コンペ受賞作品              | …………… 82                 |
| 留学生レポート                       | …………… 86                 |



## 【特集】廃材標本 学生によるセルフリノベーションの軌跡

廃材標本とは、神奈川大学建築学科建築デザインコースの学生がつくったリノベーション空間である。“壊す・つくる・デザインする”を前提に、60年余の歳月を経たビル建築の一室内部を解体。その後の利用計画立案とデザイン、さらに施工までの作業を遂行し、新たな活動拠点を生み出した。

一連のミッションでは、室内を構成していた全ての部材に触れて実測・記録を行った。そこで得た発見と愛着はやがて、

再評価した廃材を展示しつつ多目的に利用する場という空間コンセプトへと昇華する。

自ら手を動かし、頭を使い、心を震わせながら創造していった学生たちの“リアルな建築”廃材標本。RAKU Vol.15では、その軌跡を彼らの後輩である現役学生が追体験し特集としてまとめた。受け渡される神大建築のDNA、その一端を感じていただければ幸いである。

# 1

## 概要

### リノベーションプロジェクトの始まり

RAKU Vol.15 特集では、建築学科学生によるセルフリノベーションプロジェクト『廃材標本』を取り上げる。

本計画は関内に残る防火帯建築『新井ビル』の空室を本学建築学科建築デザインコースが借り受けたことから始まった。2017年度の大学院建築学専攻博士前期課程1年の学生たちが主体となり、約1年半をかけて計画立案から施工までを行った。

『防火帯建築』とは戦後に起こった大火災をうけ、延焼を防止する防火帯を建築によって形成することで都市全体の不燃化を目指し計画された『防火建築帯』をなす建物をいう。国・自治体・市民が共同で実践したこと、沿道・街区型の建築形式など、日本の戦後復興期に生まれた知られざるユニークな都市建築モデルといえるだろう。

なかでも横浜中心地区の防火建築帯は、他都市の多くが通り沿いの“線的”な計画であったのに対し、大規模な街区型の“面的”なまちづくりが特徴とされた。約400棟の防火帯建築が建てられ、いまま半程度が現存するといわれるが、老朽化や土地活用などで解体撤去が続く。

『廃材標本』は、この貴重な建物に新たに挿入された学生手作りの空間である。



横浜市防火建築帯造成状況図(1958年)



新井ビル(防火帯建築)

#### 建築概要

設計: 創和建築設計事務所  
敷地面積: 460.165 m<sup>2</sup>  
建築面積: 354.142 m<sup>2</sup>  
延床面積: 1,430.299 m<sup>2</sup>

階数: 4階  
構造: 鉄筋コンクリート造  
用途: 1・2階 貸店舗  
3・4階 住居

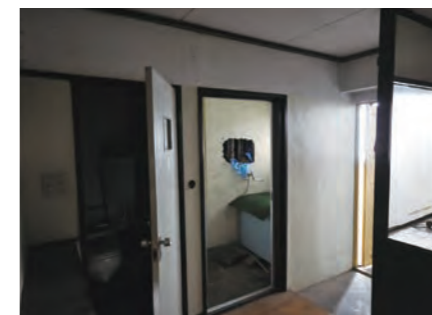
工期: 昭和36年1月~7月



新井ビル周辺図。緑色は現存する防火帯建築(2018年時のデータを元に編集部作成)



① 玄関とキッチン



② 風呂・トイレなどの水まわり



③ 特徴のある電話台とその下の開口部



④ 壁の際まで広がる窓と地窓



⑤ 改修前の壁面

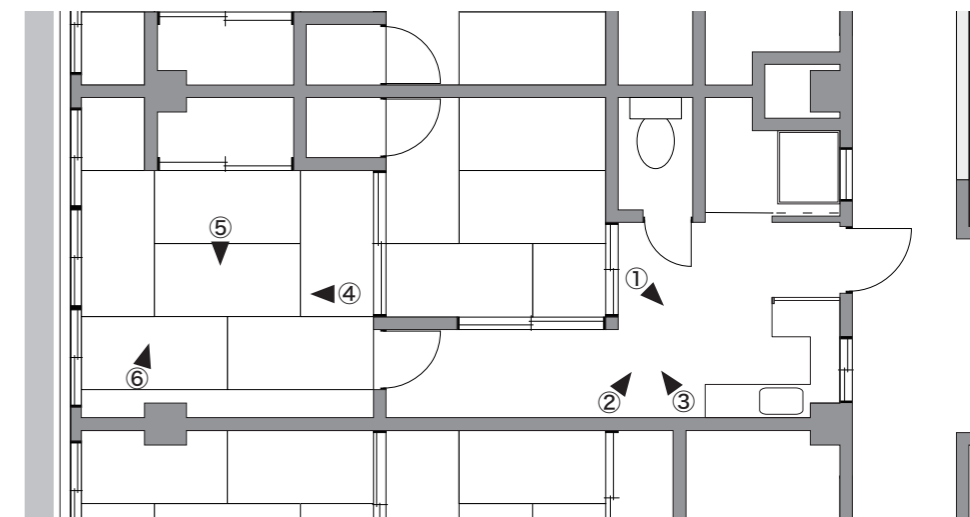


⑥ 押入れとアルコーブ

リノベーション開始に先立ち、既存建物の見学を行った。

改修する部屋は3階にある42.6 m<sup>2</sup>の部屋である。最近まで人が住んでいたため壁や柱、建具の損傷が激しくない状態だった。当時の公団住宅で一般的だった6畳と4.5畳に台所という間取りである。しかし、地窓や電話台下の開口部などこの建物独自のデザインが施されていた。

既存の状態を確認しながら、この空間をどう使っていかイメージを膨らませていった。



既存平面図

# 2

## 比較

### 新井ビル内・他のリノベーション空間

新井ビルでは複数の設計事務所がセルフリノベーションを行っている。  
比較・参考として入居者に話を聞いた。

#### 合同会社 ミタリ設計

期間：5ヶ月  
作業人数：4人（解体は業者）  
費用：100万円程度



改修前に見た他の部屋に比べて広く、明るい印象だったことから“外っぽい場所”をコンセプトとしている。  
大まかなレイアウトは決めていたが、床や塗装など解体後に状態がわかる部分は改修を行いながらデザインの検討をした。水平連続窓から入る外の光を強調するために、もとの仕切られた部屋

から全体が見渡すことができるワンルームにしている。また“外っぽい場所”を意識し、床を外構で使われる素材・インターロッキングで仕上げている。  
床の水平を取るために砂利を敷き、その上に置いていく納まりとなっている。目地のパターンも改修中に検討した。



周りの物件が“解体し、つくる”という手法を用いていたこと、既存の劣化が少なく凝った作りが様々な箇所に見られたことから、できるだけ解体・廃



材排出をせずに空間を転用改修しようと考えた。  
白を基調としながら既存の柱の質感を残すことで垂直方向に意識を向けさせ、空間の広がりを演出している。窓も同様に木枠のみ残して、防火帯建築の特徴である水平連続窓を強調させている。

#### ike atelier

期間：2ヶ月  
(掃除1ヶ月、改修1ヶ月)  
作業人数：1人  
費用：15万円程度

障子や襖には不織布を太鼓張りにし、自然な光を奥まで取り込んで、明るく開放的になるようにした。  
また、床は新たに張り直さず本畳を裏返してグレーに塗装することで荒々しい藁の素材感を残しつつ軽快さを得ている。

#### 有限会社 設計室

期間：2.5ヶ月  
作業人数：2人（解体・配線工事は業者）  
費用：150万円程度

事務所では2羽の鳥を飼っており、室内で飛ばせてあげたいという思いから、中は広く仕切りのない空間となっている。  
壁や床など全体的なカラーは白でまとめられ、徐々にモノが増えるごとに色が加わっていくことを想定している。



床は剥いだ当初かなり波打っていたため、在来工法を避け“プラ束”を採用し、水平を出している。  
鳥かごが配置されているカウンターテーブルでは、立ったままスムーズな打ち合わせが可能である。

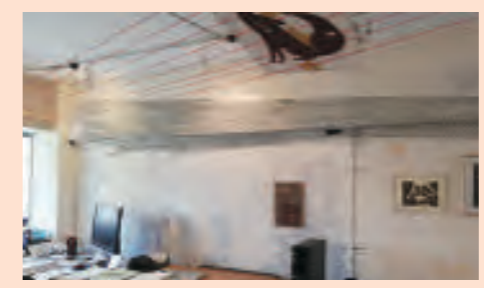


#### atelier dwell

期間：4ヶ月  
作業人数：3人（解体は業者）  
費用：150万円程度

社会に対して開くことをコンセプトに、1 スパンを普段の設計活動のスペース、もう1 スパンを社会に開く場所—ギャラリーとして活用。全てをきれいに作り変えてしまうのではなく、建物の記憶と共存することを前向きに捉え設計した。

建物が持っている力強さをリノベーション後も感じ取れるように間仕切り壁の痕跡を残し、壁をパテ材の仕上げとしている。床はモルタルで仕上げ、共用廊下と同じレベルとなっている。共用廊下から開け放たれた扉を通じて、室内との一体感を感じさせる。



# 3

## エスキス

既存を生かしつつ新たにつくるには

見学での現場体験を経て、  
模型をつくりながらのデザイン検討と提案が行われた。

エスキスは部屋の使い方を含めたデザインから始まった。改修した空間は神奈川大学建築学科建築デザインコースがレクチャーや展示空間として活用することが決まり、ある程度の人数が滞在できるキャパシティを持つ空間が求められた。その中で徐々に既存を生かす提案に収束する。

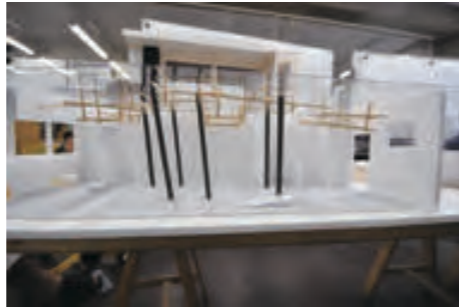
2017年6月上旬には①垂壁より上にあるものと1本の柱のみ残す②既存の柱を残し、照明と角材を組み合わせて空間をつくる③柱・壁を全て取り

除き、新しい木材で格子状に組んだアーチをつくる④柱・壁を全て取り除き、廃材を再利用し壁面に廃材をパッチワークしていく、の4つの提案ができあがった。

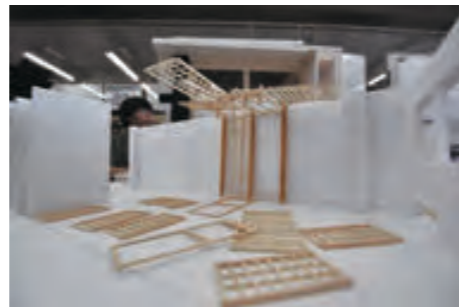
考察した結果、①②案は柱が展示空間の妨げとなる懸念があったため、柱を全て取り除く③④案に絞られ、エスキスが進められていった。どのくらい既存を残すのか、既存と解体のバランスをどう取るのか、そこに多くの時間がかけられた。



①案：垂壁より上にあるものと1本の柱を残す



②案：照明と角材を組み合わせて空間をつくる



③案：新しい木材で格子状に組んだアーチをつくる



④案：廃材を再利用し壁面に廃材をパッチワークする



# 4 解体

～コンセプト誕生

住居だった空間を壊しながら全ての廃材を手にし、次に何を生み出すか考える。

コンセプトが決定しないまま解体作業が始まった。壊しながら、どの段階でも手を止められるように、元の状態に戻せるように、生じた廃材を家具として置き換えられるように、と全ての可能性を考慮しながら解体する。

廃材として出てきた部材ひとつひとつを実測し記録することに始まり、模型上の改修案を実際のスケールでも検討するなど、丁寧に壊しつつ様々なことを思考しながら、手探りの作業が続いた。



話し合いながら丁寧に壊す



壊しながら廃材を分類していく



防腐処理を行い、日干し、乾燥を繰り返した



改修前の室内



図面作成のため各部の寸法を記録



模型で検討したことを実物で再現

解体を終え、住居だった空間がスケルトンになり、空間をつくっていた部材が廃材として手元に残った。解体を通じての発見や廃材ひとつひとつへの愛着が“部材そのものを見せよう”との考えに昇華し『廃材を標本化する』というコンセプトが生まれる。



解体によって出てきた全ての部材



解体が終了しスケルトンが残る



# 5 リスト化

全ての廃材を実測・撮影・リスト化して記録に残す。

解体によって生まれた廃材は手のひらサイズのものから身長を超えるものまで様々な形状のものがあり、リスト化が行われた。

角材・根太・根太下地材・板材・野地板・フローリング下地材・建具・その他の8種類に分類し、ひとつひとつをナンバリングした。その後3方向の寸法を測定、全方位から撮影し、変形や割れ、切りかきの状態を記録して全ての情報を関連づけた。

リスト化された廃材は200を超える。



A-4  
根太  
40×28×300



う-4  
板材  
8×115×405  
下側欠損あり



B-6  
根太  
38×30×1017



B-11  
根太  
37×30×730



M-1  
その他  
30×(800-900)×(1600-1700)  
畳

い-9  
野地板  
10×145×2665  
割れ大あり



L-11  
建具  
18×860×1170  
襖



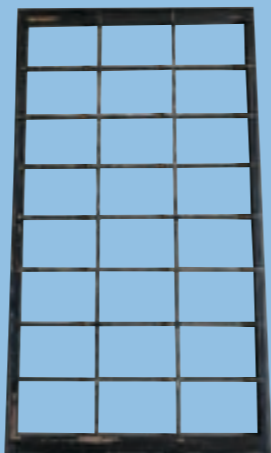
C-1  
根太  
38×29×1950  
曲がりあり



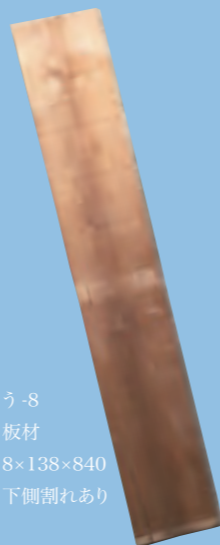
H-4  
角材  
28×34×814  
下側折れあり



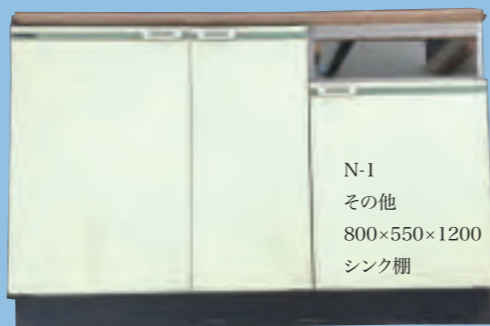
H-5  
角材  
30×41×981  
切りかきあり



L-6  
建具  
30×630×1125  
障子



う-8  
板材  
8×138×840  
下側割れあり



N-1  
その他  
800×550×1200  
シンク棚



L-4  
建具  
30×543×765  
玄関前障子



か-8  
板材  
10×130×785



か-13  
板材  
70×140×1392  
上側切りかきあり



う-12  
板材  
7×60×836  
変形あり



か-10  
板材  
33×85×174



う-16  
板材  
17×20×642  
欠損大あり



M-11  
その他  
30×(800-900)×(1600-1700)  
半畳



う-22  
板材  
8×122×808  
上側割れあり



き-9  
板材  
40×91×832



く-1  
根太下地材  
27×95×1720  
切りかきあり



う-26  
板材  
10×150×504



え-1  
フローリング下地材  
15×112×1189



さ-1  
板材  
15×125×1220  
欠損大



B-12  
根太  
40×32×960  
上側割れあり 下側折れあり



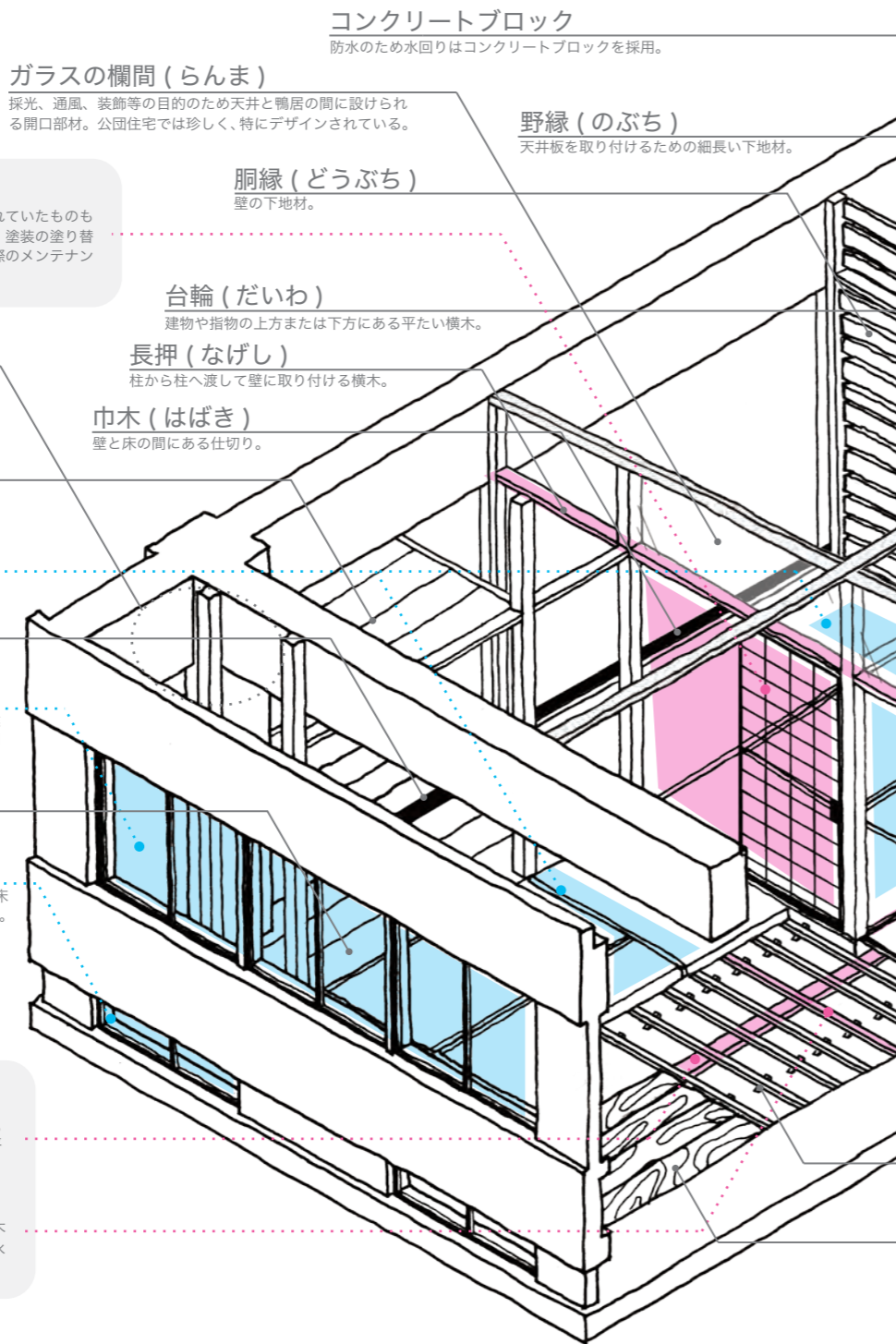
か-2  
板材(収納板材)  
70×140×933



か-4  
板材  
13×78×850

え-7  
フローリング下地材  
15×112×2025

解体作業と廃材リストで明らかになった要素をアクセソメトリックで示す。



**コンクリートブロック**  
防水のため水回りはコンクリートブロックを採用。

**ガラスの欄間 (らんま)**  
採光、通風、装飾等の目的のため天井と欄居の間に設けられる開口部材。公団住宅では珍しく、特にデザインされている。

**野縁 (のぶち)**  
天井板を取り付けるための細長い下地材。

**建具**

**襖**

可動式の仕切り。開き戸として使われていたものもある。色は部屋ごとに異なっており、塗装の塗り替えや防腐剤など、住人が入れ替わる際のメンテナンスが施されていたと考えられる。

**胴縁 (どうぶち)**  
壁の下地材。

**台輪 (だいわ)**  
建物や指物の上方または下方にある平たい横木。

**長押 (ながし)**  
柱から柱へ渡して壁に取り付ける横木。

**巾木 (はばき)**  
壁と床の間にある仕切り。

**窓辺の空白**

押し入れは窓から少し後退した所に留め、ファサードが水平連続窓に見えるような工夫がされている。

**棚板**

押し入れの棚になる板材。

**公団住宅で一般的だった畳間 (六畳、四畳半)**

**前框 (まえかまち)**

床の間や床などの端に渡す化粧横木。ここでは押し入れの横木。

**横連装窓**

日本国内でモダニズムが普及し始めた時期にあたり、近代建築5原則のひとつ水平連続窓を模した最新のデザインが採用されている。

**縁甲板 (畳間)**

木質の薄い床仕上げ材。

**地窓 (じまど)**

電話台の下の障子と連動して室内の空気循環を意識した、床に接する窓。防火帯建築の中ではユニークなデザインである。

**床を支える部材**

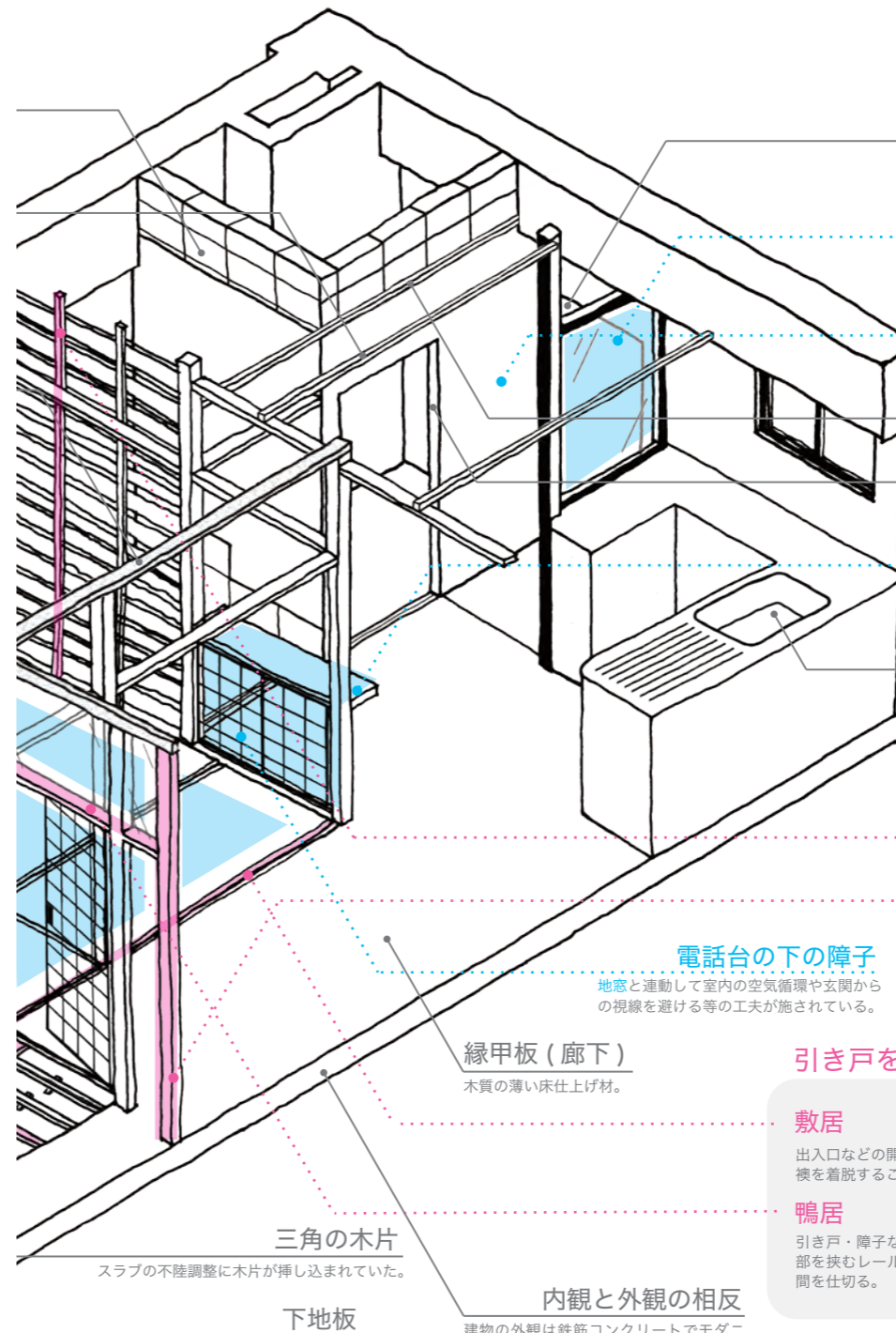
**大引 (おおびき)**

床板および根太を支える横材。根太の下に渡す横木。解体当時は床の歪みがひどく、長い間住空間を水平に保っていたことがうかがえる。

**根太 (ねだ)**

大引の上に渡す横木。コンクリートと根太の間で不陸調整をする。その間に三角の木片を挿し込み、水平を出すよう調整された。

ピンク…設えを構成する主要な部材  
水色…竣工時の時代背景を示す特徴的なデザイン



**入り口高さ 1770mm**  
現代の住宅より小さく設計されている。

**ガラス戸**

ここをガラスで区切ることによって玄関に採光している。

**天井高を抑えられた玄関まわりとキッチン**

天井の間には配管が通されていた。

**廻縁 (まわりぶち)**

天井と壁の接する部分に取付けられる材。

**縦枿**

ドア枠の縦の部分。化粧材。

**電話台**

固定電話を設置するための台。防火帯建築で電話台が配置されている例は珍しい。

**ステンレスキッチン**

ステンレスキッチンは、当時の住宅で最新のデザインで憧れのものだった。

**柱と間柱**

**間柱 (まばしら)**

胴縁の支持材又は外壁の下地材。

**柱**

上部の荷重を支える垂直材。黒く塗装されているものは襖同様、メンテナンスが施されていると考えられる。

**電話台の下の障子**

地窓と連動して室内の空気循環や玄関からの視線を避ける等の工夫が施されている。

**縁甲板 (廊下)**

木質の薄い床仕上げ材。

**引き戸を走らせる部材**

**敷居**

出入口などの開口部や部屋と部屋の間には置いた横木。襖を乗せるレール。襖を着脱することで様々な場面に沿って空間を仕切ることができる。

**鴨居**

引き戸・障子などを立てる、出入口などの上の溝のある横木。襖の上部を挟むレール。敷居同様、襖を着脱することで様々な場面に沿って空間を仕切る。

**三角の木片**

スラブの不陸調整に木片が挿し込まれていた。

**下地板**

**内観と外観の相反**

建物の外観は鉄筋コンクリートでモダニズムの影響を受け洋風な印象を受けるが、内部の設えは木質な日本の従来の形式を用いている。



# 7

## 図鑑

前ページで紹介された無数の廃材の中から、住空間の記憶を残す象徴的な4部材を抽出・紹介する。

### 建具

襖 / 854mm×1,740mm×18mm

和紙を剥がすと格子状に組まれた木材が現れる。襖と聞くと引き戸のイメージが浮かぶが、この襖には取っ手がついている。このことからこの住戸では開き戸として使われていたことがわかる。また、他の部材は釘を用いて固定されているものがほとんどだが、襖には釘を使わず継手が用いられている。



### 床を支える



大引 / 8mm×2,480mm×27mm

根太を支えている部材。切りかかれた箇所には根太があった。根太からの荷重を支えているため根太より大きな部材となっている。損傷の激しいものが多い。



根太 / 40mm×2,880mm×30mm

床板を支える下地材。残っていた廃材の中で最も長く、大引との取り合いにより切りかかっている。日常的に踏まれるため変形が残っているが、縁の下の力持ちのような存在といえる。



### 引き戸を走らせる



鴨居 / 95mm×1,676mm×35mm

建具の上部でレールの役割をしていた。中央付近に塗装が見られない。刷毛の跡から塗装時の筆使いが想像できる。



敷居 / 95mm×1,624mm×24mm

鴨居とは異なり金属レールが埋め込まれているため、木部面が建具と直接触れ合わず塗装が多く残っている。しかし、両端には少し剥がれたような跡が見られ、人が行き来する際に踏まれ生じたものと考えられる。

### 柱と間柱

柱 / 95mm×2,497mm×100mm

身近な建築部材のひとつ。敷居・鴨居と接合するためのほぞ穴や、大引・台輪と固定されていた釘跡が見られる。様々な部材と接合する、特に重要な部材ともいえる。



間柱 / 35mm×2,450mm×26mm

壁を構成する部材で、壁の中で胴縁を支える垂直材。表面には多くの釘跡が見られ、たくさんの胴縁が取り付けられていたことがわかる。

机上のエスキスと平行して進められた解体は、再利用の可能性も考慮し丁寧に行われ、全廃材の記録・リスト化がなされた。

一連の作業を通じて廃材が持つ様々な表情に気づくとともに、かつてアパートの部屋を構成していた部材ひとつひとつを見つめ直し、その価値を再発見したことで“廃材を標本にする”というコンセプトへと辿り着く。

廃材を展示する場であり、かつ多目的な使い方ができる拠点空間『廃材標本』は、このような過程を経て生まれた。



# 8

## システム

廃材展示にあたり、  
自由度が高い  
独自のフレームシステムを開発した。

### フレームシステムのスタディ

既存の躯体を傷つけずに廃材を展示する必要があるため、自立するフレームのスタディを行った。初めは家型、次に門型、最終的には門型の柱を二重にしたものを採用した。

比較的安価で入手しやすいツーバイ材を使用し、2本の柱で梁を挟む。柱の間には2×4材を等間隔で取り付け、廃材

を引っ掛けたり載せたりするための腕木や棚受けをワンタッチで交換できるようにした。

廃材を展示するにあたって室内には5本のフレームを作成し、柱のスパンや木材を差し込む間隔は廃材の寸法データから割り出した。



紐で縛る



フックに引っ掛ける



柱の間に腕木をかませる



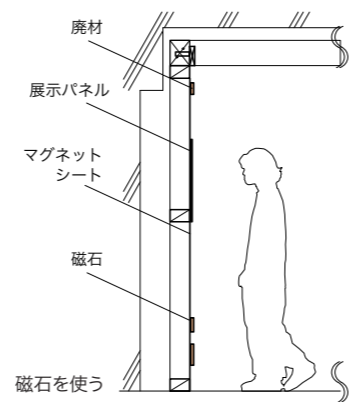
家型



門型



ノーマル



### 廃材・棚受けのシステム

部屋の使い方に合わせて展示や棚受けを変更できるように、廃材や棚受けの脱着システムもスタディを行った。

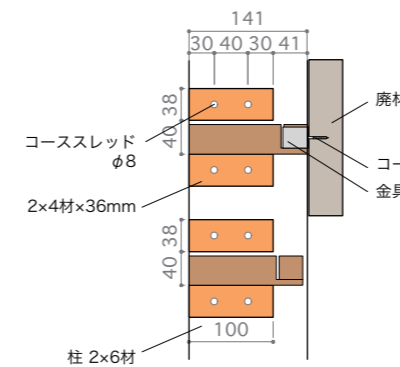
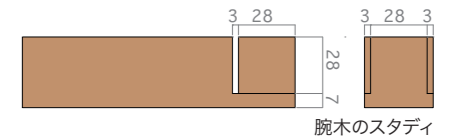
紐で縛る・フックに引っ掛ける・マジックテープ・磁石・腕木をかませる、の5案を考察しスタディを重ねた結果、最終的に自重をしっかり支えることができる“腕木をかませる”案となった。



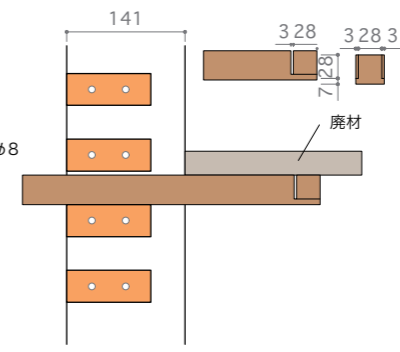
フレームの最終形

### ワンタッチでの脱着システム

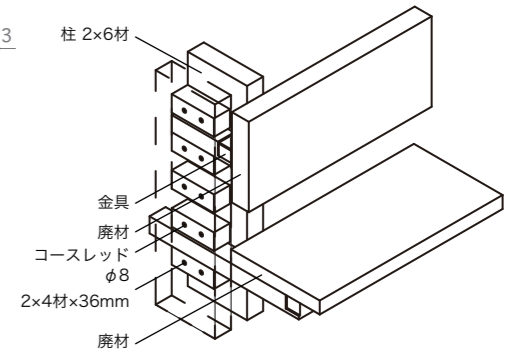
棚柱には自作した腕木と市販の金物を使用して廃材を引っ掛けて吊るす方法をとった。さらに完全に固定してしまうのではなく、フレームを棚柱化しワンタッチで取り付け可能にすることで、標本としての機能に加え、用途に合わせて机や棚、ラックとして使える機能を持たせた。



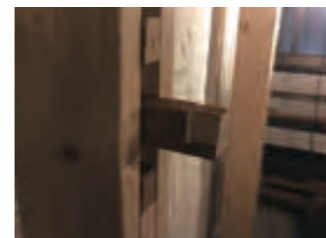
標本展示の詳細図



棚受け使用時の詳細図



フレームの詳細アクソメ



ワンタッチで脱着可能



フレームを引っ掛ける2×4材



廃材の表面に金具を取付ける



腕木に金具を挿入



解体後の無機質な空間に、床・壁・天井・建具の4項目に分類された廃材が持ち込まれた。標本化された廃材によって、住宅であった頃の記憶を感じつつ異空間を体験できる場になっている。

フレームにシステムを持たせることで、インスタレーション的な展示ではなく部屋の使い方に対応して展示方法を変更できる“可変的な空間”とした。



#### KUアーキラボ『廃材標本』

所在地  
〒231-0013  
神奈川県横浜市中区住吉町3丁目28 新井ビル302

Webサイト  
<https://www.facebook.com/KUarchi/>

スケジュール  
基本設計 2017.4-2017.7  
実施設計 2017.10-2018.5  
解体 2017.5-2017.10  
施工 2017.10-2018.6

セルフリノベーションを行った学生  
丹羽貴行(チーフ) 印東尚朗 枝川和樹 木村捷希 櫻井浩平 東田萌 森島駿平  
以下は解体作業まで  
市川貴一 伊藤将吾 加藤正佳 下山智加 城間リカルド 須山高志 田村駿介  
藤原陽平 松川英莉奈

アドバイザー  
建築デザインコース教員陣

# 考察



解体・デザイン・施工・運営計画までを網羅した学生によるセルフリノベーションを  
神奈川大学建築学科で教鞭を執る石田敏明・曾我部昌史両教授はこう読み解いた。

――どのような経緯で新井ビルに神奈川大学が関わるようになったのでしょうか。

**曾我部** 私は関内地区の歴史的な建物の保全に関心があり、防火帯建築の活用による芸術不動産活動の推進に携わっています。新井ビルはその中のひとつで、新たに資金を投じて回収できる見込みがないほど傷んでいました。

そこで、家賃をきわめて低廉にする代わりに入居者自身でリノベーションをするということになりました。そのため、入居者はただ改修するだけでなく、建築家やアーティストといった、より良い状態より魅力的な空間にすることが得意な人を選んでいきます。

加えて、リノベーションのやり方にバリエーションがあると魅力が増すのではないかと思い、デザインコースの先生方に相談して今回の話につながりました。

――学生にとって、リノベーションを行うことにはどのような意義があったのでしょうか。

**石田** リノベーションでは、解体時にいろんな仕組みがわかります。新井ビルの躯体はRC造だけれど内部の間仕切りとかは全部木造。だから解体すると、どんな材料が使われていて、どういう下地があり、表面に何が張られているかといった“部材同士の構成”がわかる。実際に体験すれば建築の実務的な仕組みもわかっていいんじゃないか、ということで、今回のリノベーションも解体作業から入っていったのです。

解体を進めていくうちに『空間を構成していた廃材が以前の空間の記憶である』との考えが学生に生まれました。そこから、通常であれば捨てられてしまう廃材をいかに次の空間に活かすか、に着目した提案という方向性が出てきた。

**曾我部** 解体された空間はほぼスケルトンになりました。そのプロセスで得られた廃材を標本として扱うことで、かつての空間の成り立ち方を残しています。

残したものの量としてはぎりぎりだけれど、空間の成り立ちをあらわすという面では十分。廃材が持つ特有の意味に着目できたのは、自分たちで手を動かし、その場



で広く可能性を考えることのできるリノベーションならではのですね。

**石田** リノベーションではライブ感が重要です。予め考えた通りにはいかないことが多く、その場その場で使い方を検討したり、並び方を考えたり。

廃材標本では”魅せる”ことが重要なので、間引き方や並べ方にはアートとは違ったデザイン的なセンスが要求されます。最初に出てきた案は、最近見られるようなアートの要素が強く、非常に操作的でした。しかし我々はアーティストではなく建築家なので、建築空間の持つ力を活かさなければなりません。

『建築的にどのように魅せていくか』に重きをおき、さらに基本的には借りているものなので躯体に負担をかけないことを条件に皆でスタディを続け、最終的なデザインへとつなげていきました。

試行錯誤を重ねたことで、廃材標本はバランスのいいものになりましたね。

**曾我部** リノベーションでは、行えることが限定されると考えられがちです。でも自分の手で作業していると、現場の写真をみたり図面を描いていたとしても気づけないようなものや空間の性能に気がつくことがある。

それは建具の開き方で変わる空間や部材の光沢といった特性。セルフリノベーションでは、普段は気がついていないけれど空間体験するうえで重要な側面に反応できます。

**石田** 施工のプロには、垂直を出したり部材同士を45度にカットしてピタッと合わせたりといった技術力があります。しかしセルフリノベーションは技術のない素人がやるものだから、それを求めても仕方がない。もっと違う価値観、いい意味での施



曾我部昌史教授

工のルーズさが居心地の良さにつながる可能性があるんです。

新井ビルは躯体の精度がそれほどよくないので、そこに合わせるような形で少しルーズな空間、素人の技術が醸し出した空間というあり方もひとつの価値になります。プロと素人の違いを理解したうえで何ができるかを、デザインで考えていくのが重要でした。

――実際に現場で解体作業を進めると同時にコンセプトが提案されていきましたが、先生方が廃材標本に可能性を感じられた決め手はなんだったのでしょうか？

**曾我部** 明確に記憶しているのは、A3の紙にすべての部材をリスト化して記録していたことです。

最初にリストにしていた時には、空間の組み立て方は決まっていませんでした。活用の仕方が見えていなかったからこそ、すべての部材をリスト化したのだらうと思います。そのむやみな感じが、ものの本質に迫ろうとしているようでよかったです。

**石田** キレイだったよね。種類ごとに分けられ、まとめ方もそろっていて“標本”になっていました。ここで教員も含め全員で価値観・デザインの共有ができ、これを使ってリノベーションをすれぽうまくいくんじゃないか、という状況になった。そして次のステップである“廃材の魅せ方”へと進むことができたのです。

――企画・設計・施工・運営まで全てが学生の課題となったことへのお考えは。

**石田** 我々教員は新井ビルの家賃を負担しており、クライアントという立場でもありました。神奈川大学の授業の一環という点も踏まえ、市街地の中心でアンテナ的な側面を持ちつつ、デザインや施工のほか「どのように空間が使われ、運営されるのか」まで含めた提案を期待しました。

現在は各研究室持ち回りで、2週間ぐらいの期間で展示や講演を行う開かれた場として利用しています。

最初のうちは柱を多く建てたり、梁を隠すために梁の下に廃材を所狭しと並べた

りという提案が出てきました。そのような案では空間の持っているおらかさがなくなってしまうし、現在のような使い方は難しくなります。このあたりで不足していた学生の想像力を教員が喚起しつつ、利活用や運営方法を検討して、いまの姿にたどり着きました。

新井ビル内の他のリノベーションとは異なる提案をしつつも、実際の利活用や運営を考え、そして空間というものの本質に迫り表現していくことは、学生にとっても、我々教員にとっても大きな挑戦でした。

――学生にとって『廃材標本』は、今後の建築界に身を置いていくことを考えるとどのような意味があるのでしょうか。

**石田** 十年も二十年も前から建築業界では「新築物件が減り、今後はストック活用の時代に入る」と言われていて、まさにそういう時代になってきている。その活動がリノベーションでありコンバージョンです。

**曾我部** 空き家が増えると、新築を扱っている業界に影響します。すでに建築のストックがあるから新築する必要がないと。建築をデザインする人たちの軸が、新築のデザインからリノベーションやコンバージョンへと移るわけです。

それらにクリエイティビティを感じられるようになると、建築のデザインをより深く楽しむことができます。時代の要請に合った新しい価値観をみつめて、それを空間に翻訳することがこれからの建築家には求められますが、リノベーションやコンバージョンは、そうしたやり方にも合っていると思います。

2019年6月13日 神奈川大学横浜キャンパス／曾我部昌史研究室にて  
聞き手：田野耕平・横山優莉菜



石田敏明教授





RAKU Vol.15 特集ページ編集班／右から田野耕平・向 咲重・横山優莉菜・岡本晴美・早川史洋

## 編集後記

今回の特集は昨年完成した『廃材標本』の過程をドキュメンタリー的な内容で記事にするというものだった。私たちは直接リノベーションに携わっていないので当時のリアルな状況をありのままに記事にはできていないかもしれない。しかし、リノベーションに関わった学生が持っていた熱意や完成までの迫力は“廃材リスト”や大判の写真によって伝えることができたと思う。(早川史洋)

先輩方が残したボイスレコーダーや写真、議事録などを頼りに記事をまとめていった。そこには膨大な時間と熱量が詰め込まれていた。誰もがより良いものをつくらんとトライアンドエラーを繰り返し、紆余曲折を経て達成したプロジェクトだった。現在在生が使用できているのは指導された先生方をはじめ、実際に手を動かして空間をつくりあげた先輩方のおかげに他ならない。関係者皆様に感謝と敬意を表したい。(岡本晴美)

今回の編集作業では当時の“熱量”というものをを感じる場面しばしば体験した。解体することによって生まれた廃材を標本化することで廃材を建物の記憶として位置づけるとは、実際に自らが手を動かさなければ、たどり着けなかった結果ということを感じた。“建物の記憶”という点において大変意義のある空間ということを学ぶことができた。(横山優莉菜)

解体作業の中で廃材の魅力に気づき、解体後の無機質なハコにシステム化されたフレームを持ち込むことで、多目的な空間へと発展させていった。その過程を今回の特集を通して読み取っていくなかで、当時関わっていた学生の作業量と熱量を十分に感じることができた。また、空間として形になるまで様々な葛藤に触れることができた良い経験になったように思う。(向 咲重)

今回の特集タイトルにもなっているように、このプロジェクトではセルフリノベーションであることが、大きな意味を持つことになった。始動当初は机上でのスタディを重ねていたが、空間を構成している物質の持つ特性に対する理解や感度が低く、実現性やリノベーション空間であることに疑問が残る提案がほとんどであった。通常では価値を見出されない部材まで丁寧に解体する過程で得られた学生自身の身体的経験が、素材に対する気付きへと繋がりと、現在の姿へと加速度的に収斂していくことになった。『廃材標本 KUアーキラボ』はプロジェクトに参加した学生の身体的経験を共有できる場でもあり、その空間を体験した後輩たちへ経験と気付きが受け継がれていくことを願っている。また、この特集がその一助となれば幸いである。(田野耕平／助手)

## 建築探訪

神奈川県にゆかりのある建物に学生が訪問し、  
学生独自の目線で紹介する。  
今回は30号館(宮陵会館)を取り上げる。



## 神奈川県 30号館 (宮陵会館)

設計 合同会社 ミタリ設計  
施工 岡山建設株式会社

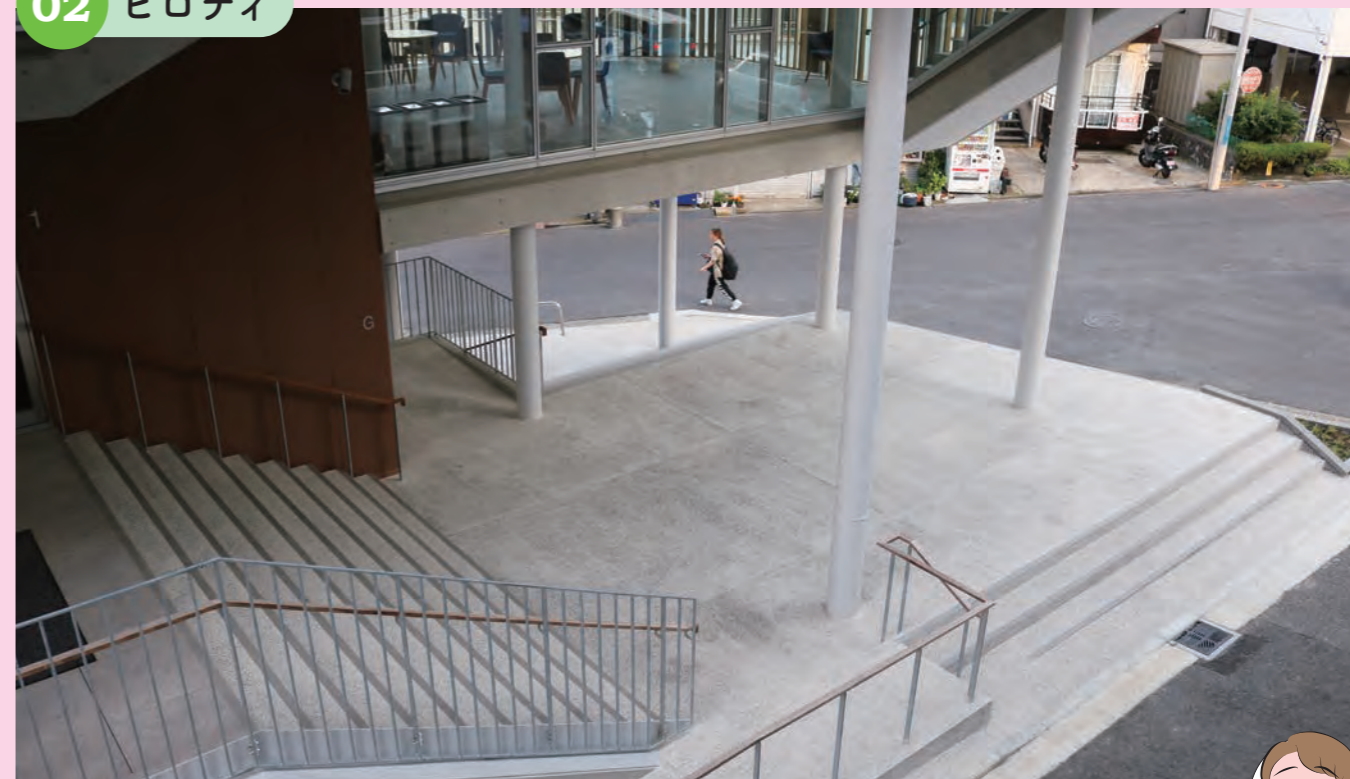
## 01 傾斜地にたつ、大学の玄関



内部の動線を外側に配置し、人や風などの様々な流れが建築の形態として現れている。高低差の違う3つの通りをピロティによりつなぎ、そのピロティは周辺にある様々な流れを内部に連続させるための気積になっていると思う。(齊藤)



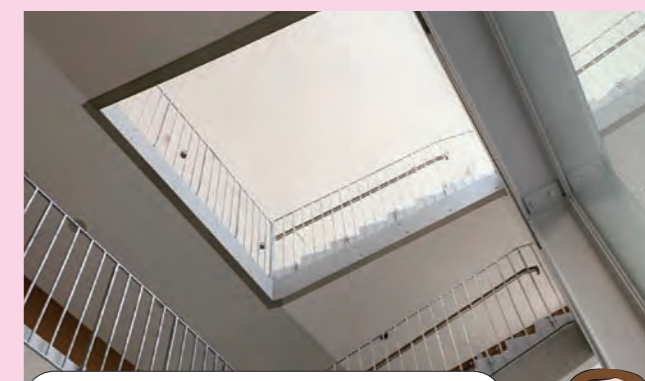
## 02 ピロティ



大学へ繋がる道に開かれたピロティ空間。ここに椅子やテーブルがあれば、ランチなどを楽しむ空間になりそうだ。(下山)



ピロティが前面道路に開かれ、ひとつの大きなエリアになっている。30号館の花壇の緑化が進めばこの場所は公園のような空間になるだろう。(塚本)



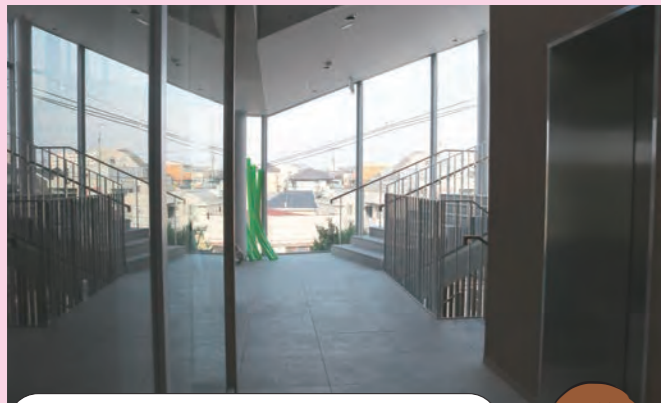
地下から見上げた吹き抜け。外部空間のような開放感がある。居室に一体感が生まれている。(長谷川)



### 03 ラウンジ



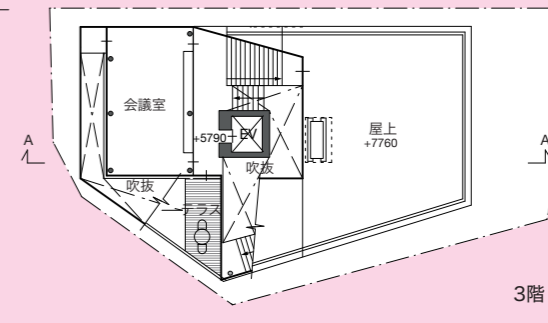
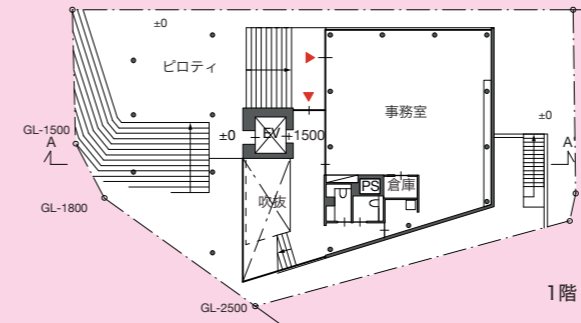
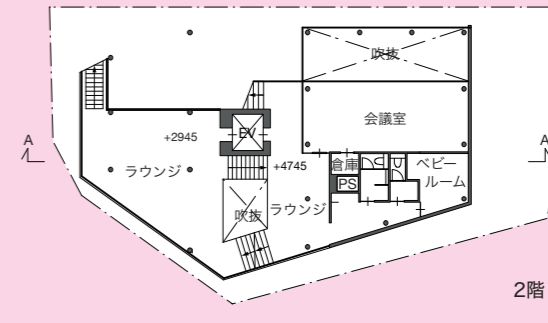
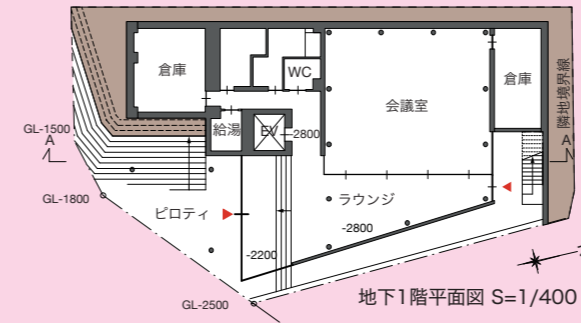
上部ボリュームのずれによりできた抜けのある居場所と住宅スケールの居場所があり、外部的な仕上げで設えられている。置かれた家具が内部的で合っていないと思える。設計者はここに置く家具も提案していたが実現されていないようだ。(長谷川)



階段と壁面を利用して、ゼミやサークルなど学生の活動が展示されるような場所になれば「学習の場」として使われるのではないかと。(塚本)



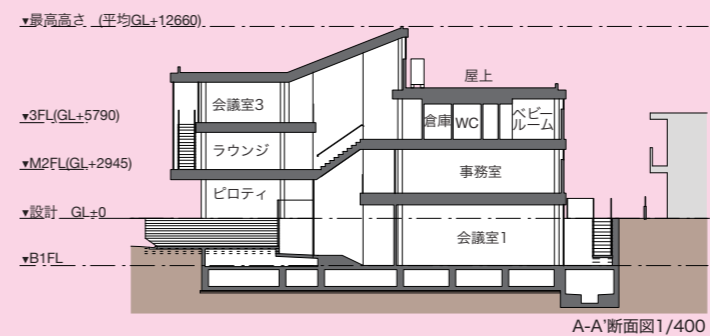
会議室と廊下空間を一体としてギャラリーにでき、卒業設計の展示にも使える。通常時、ここに家具があってもいいのではないかと。(齊藤)



**data**  
 規模：地下1階、地上3階  
 構造：鉄鋼造  
 (一部鉄筋コンクリート)  
 敷地面積：432.45㎡  
 建築面積：290.10㎡  
 延床面積：660.5㎡  
 用途：  
 1. 宮陵会事務室  
 2. 展示や談話など多目的に利用するラウンジ  
 3. 中・大規模の会議室

#### 探訪後記 齋藤 / 長谷川 / 塚本 / 下山

この建物は使い方に応じてフレキシブルに変化する。地域に解放されたラウンジはギャラリー空間としても利用でき、学生が軽く食事をしながら会話を楽しめる居場所にもなるだろう。OB 会館としての機能を持つ建物であるが、このように普段は学生や地域住民が自由に使える空間が多くある。外部のピロティや2階の空間、広い階段などは居場所の選択性が高く、好きな場所で好きな時間を過ごせるようにデザインされている。現在は使い方に制限があるが、積極的に30号館の利用方法を学生が大学へ提案していくことで、より学生や地域住民にとってより利用しやすく、心地の良い居場所として変化していくことだろう。



#### 設計者 profile



#### ミタリ設計

**井口 恵之**  
 Shigeyuki IGUCHI  
 1982年 静岡県生まれ  
 2005年 神奈川大学卒業  
 2007年 神奈川大学大学院 修士課程修了  
 2007年 株式会社 ISSHO ARCHITECTS 勤務  
 2014年 合同会社 Mitari Architects 共同設立

**松林 大輔**  
 Daisuke MATSUBAYASHI  
 1982年 静岡県生まれ  
 2005年 神奈川大学卒業  
 2007年 神奈川大学大学院 修士課程修了  
 2007年 塚田真樹子建築設計 勤務  
 2013年 株式会社 三栄建築設計 勤務  
 2014年 合同会社 Mitari Architects 共同設立

**濱口 光**  
 Hikaru HAMAGUCHI  
 1983年 兵庫県生まれ  
 2005年 神奈川大学卒業  
 2007年 神奈川大学大学院 修士課程修了  
 2007年 神奈川大学建築学科スタッフ  
 2008年 株式会社 studio ARTEC 勤務  
 2014年 合同会社 Mitari Architects 共同設立



修士論文

下山智加  
田村駿介



●優秀賞



下山 智加  
Chika SHIMOYAMA

中井研究室  
NAKAI lab.

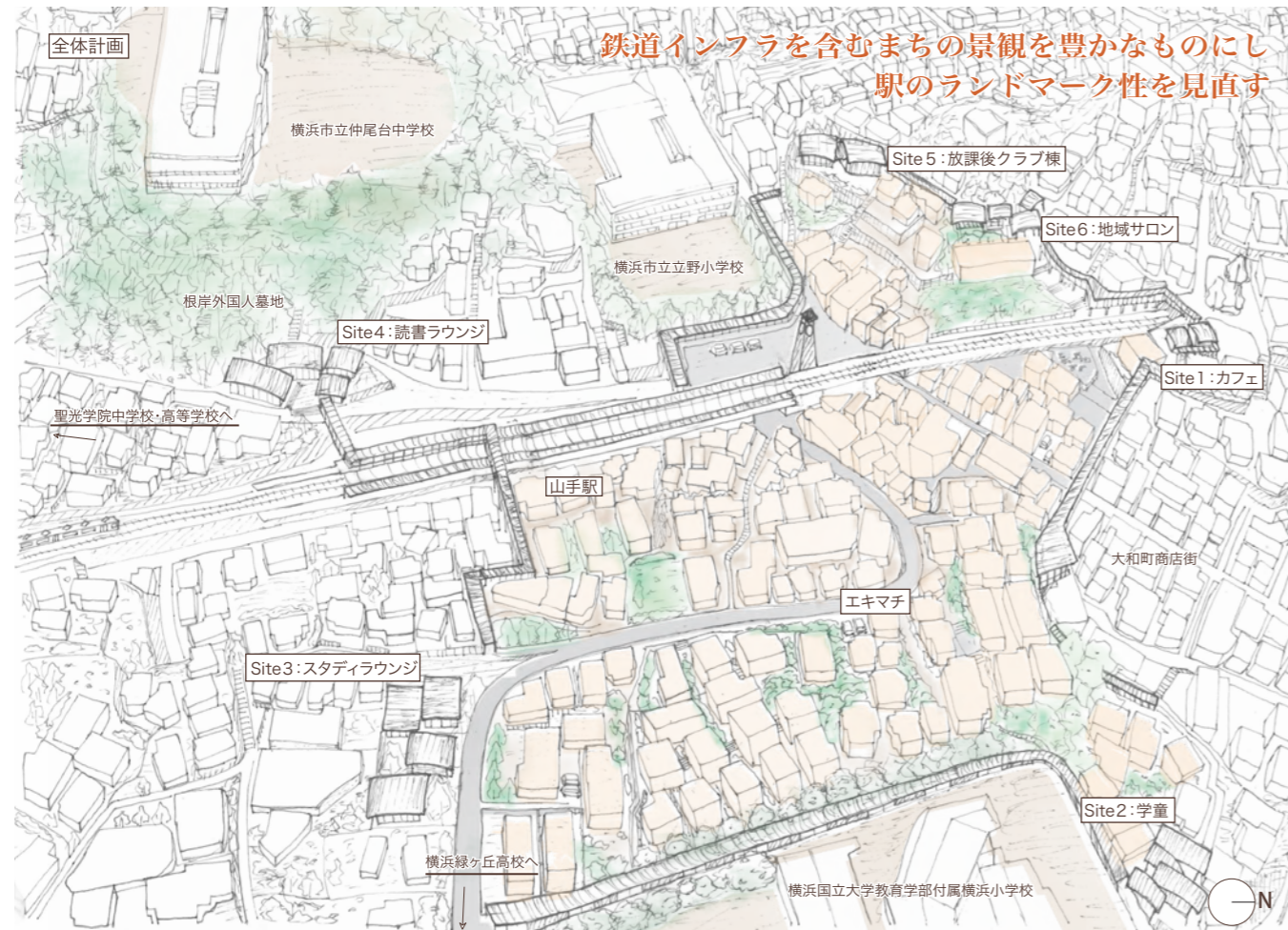
鉄道インフラを含むまちの景観  
山手地区における子どもたちの交流拠点の提案  
Study on the scenery of the town with railway infrastructure  
Communication base for children at Yamate

**山家** 鉄道インフラと電車からの見え方の話をしていたが、模型が白模型でスケッチは色が付いていたため、実際の構造や素材や納まりが知りたいです。

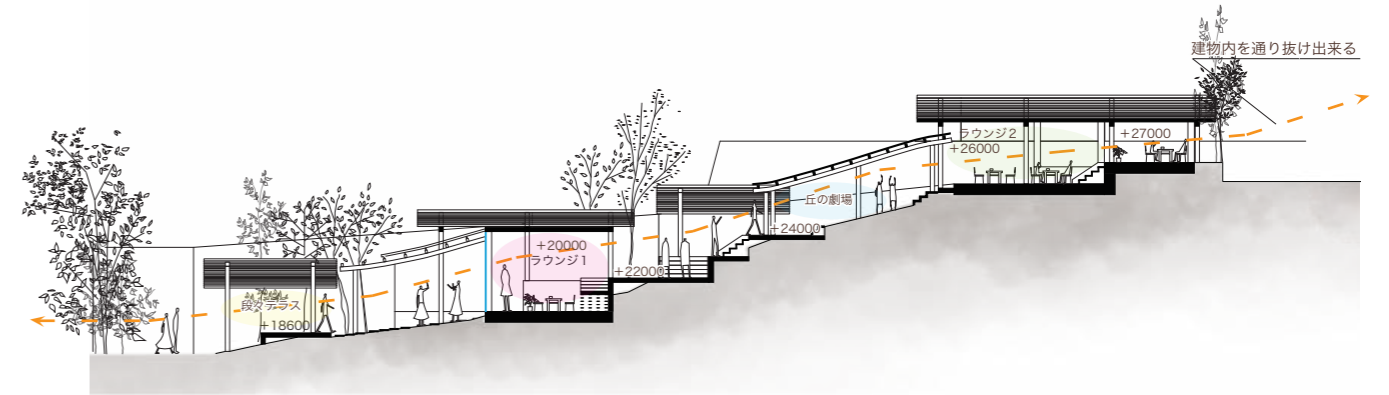
**下山** 景観を活かしたデザインとしては、全体の計画として駅が見える点を繋ぐことで、子供たちの活動などがわかるようにしました。またこの建物は、通路の確保と駅がどこからでも見えるように、ガラスなどをファサードに用いました。構造は鉄骨フレームを中心としてはおり、Site4だけは周辺に木が多いことから木構造としました。

**曾我部** 街を歩いている時の景観と建築の中から見る街は位置付けが違う。意味が違うことに対して、部屋ごとに分けているのですか。

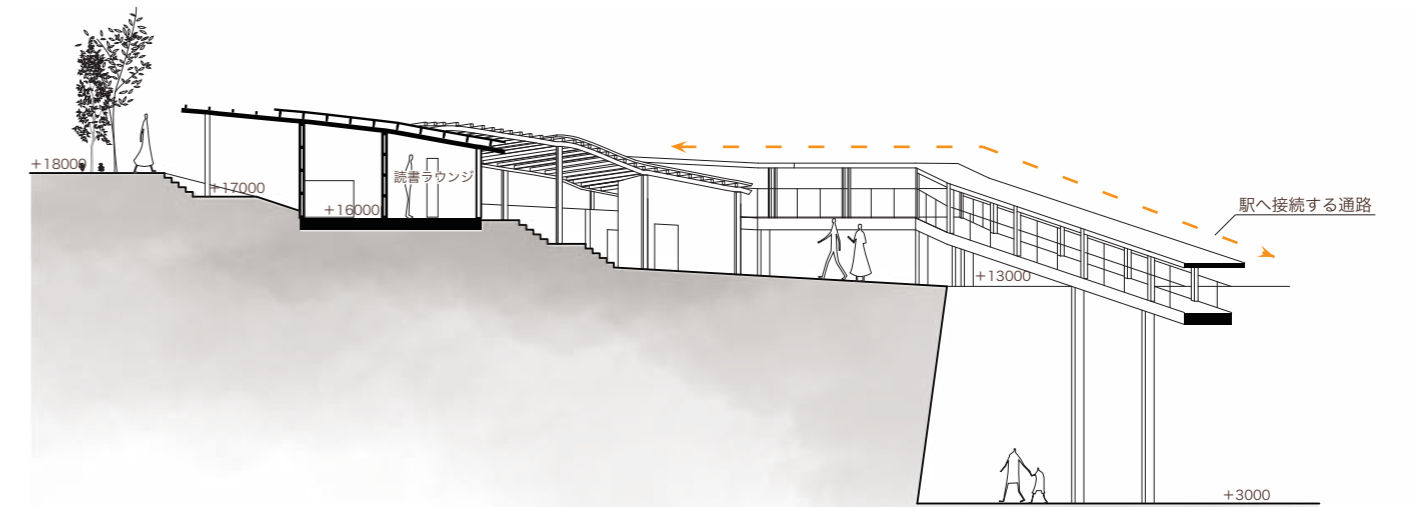
**下山** そこまでは考えていません。この計画は全体を大切にしたいので、全体のことを考えて設計しました。高架にはもともと興味があり、高架によって都市が分断されてしまうのが嫌で、それを解決することを目指していました。



鉄道インフラを含むまちの景観を豊かなものにし  
駅のランドマーク性を見直す



Site3 スタディラウンジ



Site4 読書ラウンジ



Site3 スタディラウンジ  
横浜緑ヶ丘高校の生徒と横浜国立大学教育学部付属横浜小学校の児童の通学路に隣接する斜面地に計画し、交流を図る。



Site4 読書ラウンジ  
地元の人と学生により年1回幕前祭も行われる根岸外国人墓地内に読書ラウンジを兼ねた管理棟を計画する。

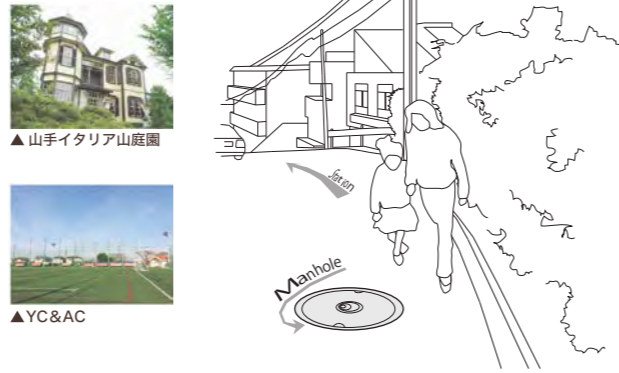
エキマチ内プログラム

a まちにあるものの豆知識看板



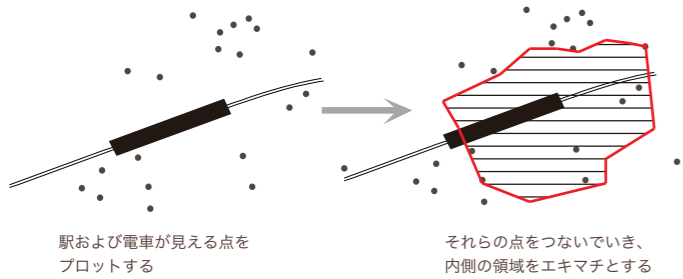
普段よく目にするまちにあるもの。何気なく目にしてはいるだけで、実は「何であるのか」やそれに関する知識は大人でさえも分からないものばかり・・・  
交流拠点をつなぐ通路に普段何気なく目にするものの知識が得られる。知識看板を設置する。

b まちにあるものを英語表記した道路ペイント



山手駅のある大和町周辺は元々外国人居留地として栄えた場所であった。そのため、現在でも山手イタリア山庭園など歴史ある洋館が多く残り、YC&AC など外国人専用のスポーツクラブも存在するが、昔より外国とは違いまちになってしまった。そこで、英語表記の道路ペイントを設置することで、子どもたちの学習や身近な場所から外国語に触れるきっかけをつくる。

エキマチについて



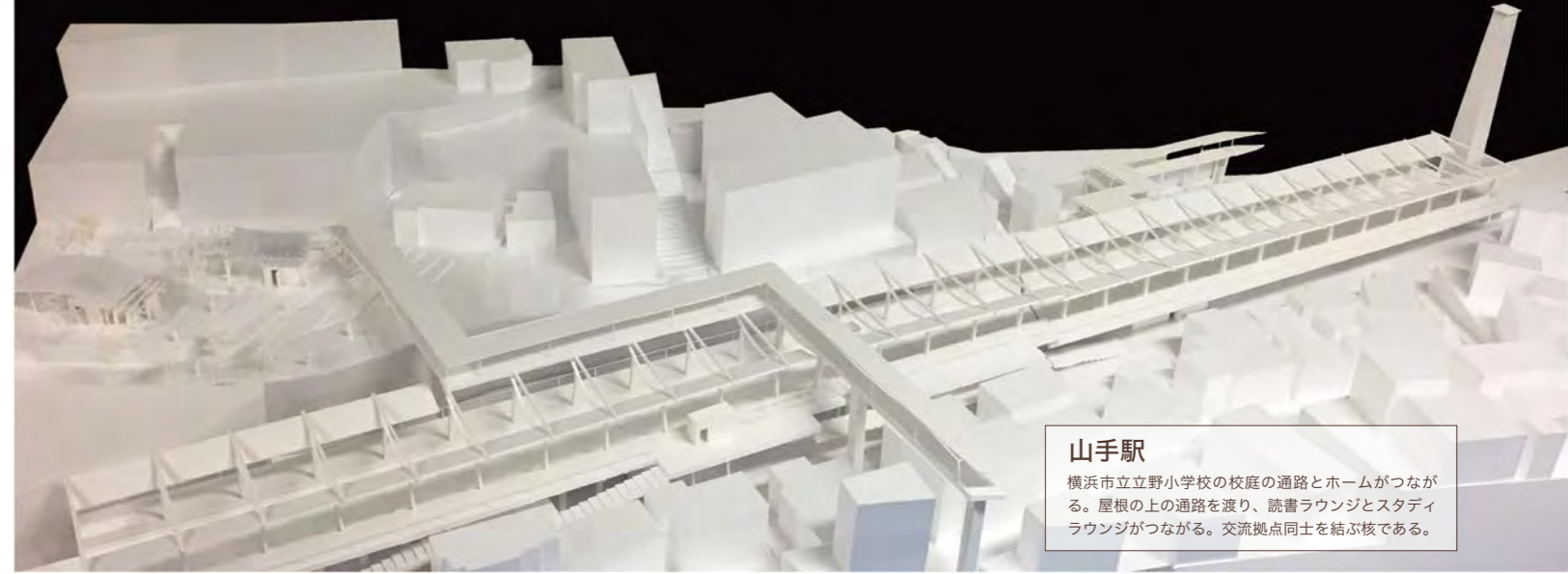
学校内の授業とは違った学習方法



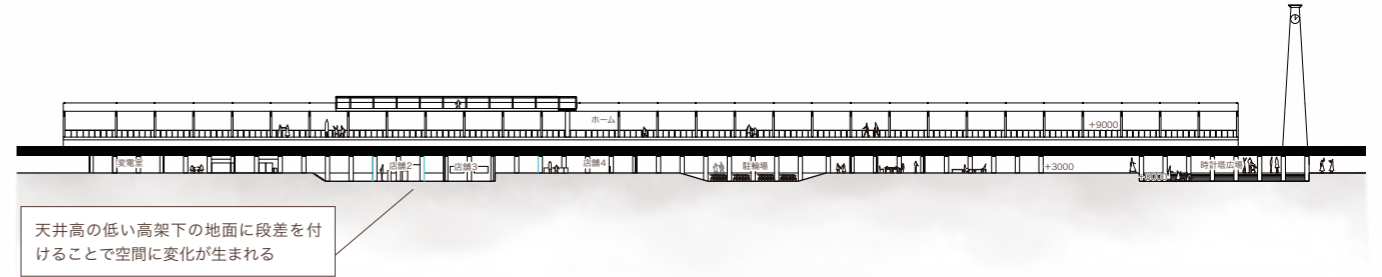
駅のランドマーク性



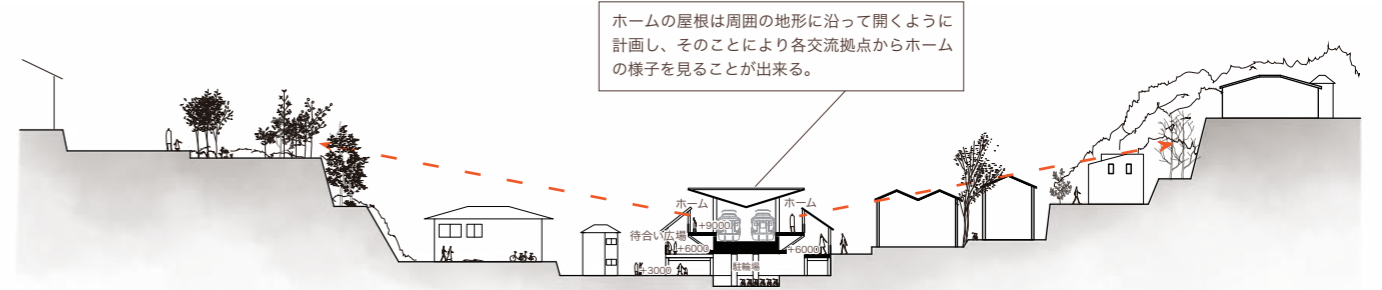
山手駅の周辺の道は駅を中心に網状に広がっており、地形はすり鉢状の地形で駅が一番低いレベルに位置しているため、駅や電車が見える点が周辺に多く存在し、またまっすぐの軸を成して駅が見える景観が多く見られた。そのため、まちの中心的存在である駅としてのランドマーク性は高いと考える。



**山手駅**  
横浜市立立野小学校の校庭の通路とホームがつながる。屋根の上の通路を渡り、読書ラウンジとスタディラウンジがつながる。交流拠点同士を結ぶ核である。

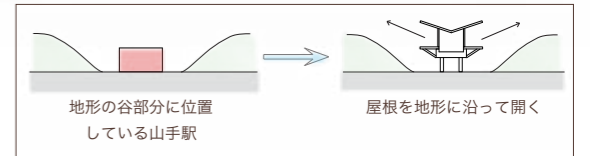


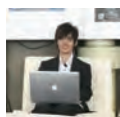
山手駅南北断面図



山手駅東西断面

屋根ダイアグラム





**田村 駿介**  
Shunsuke TAMURA

曾我部研究室  
SOGABE lab.

**みんなの家の利活用**  
Utilization of "Home for all"

熊本震災復興地域における  
仮設住宅団地の集会所建物再活用の提案  
Proposal for reuse of meeting place of temporary housing  
complex in earthquake disaster area of Kumamoto

**中井** 大きい空間をどう設計したのか。

**田村** 大きい空間を構成するために、みんなの家では登り梁が多く使われている。なので、登り梁を使って大きな空間を作った。

**中井** やってることの社会的意義は感じるが、役所が頼んだからやりました、みたいな感じがする。君自身の考えやテーマはないのか。業者っぽい。君の修士のテーマは何だ。

**田村** 個人的な興味は架構をいじることで、空間を豊かに変えられないということです。熊本のみんなの家は曳家等で活用する案が多い。何か新しい空間を作ることで、より良い案が生まれたいと考えて行った。

**石田** 結局あなたにとって何が一番得られたのか。

**田村** 既存で存在する建物の構造を理解しながら、新しい空間を作ることで、木造の増改築を通じて利活用するかを考えられた。

**石田** そこからあなたは新しい何かを考えだせたのか。

**田村** 熊本地震の仮設住宅などは、基本的にはまたバラすことを前提に作られている。部材全てを有効活用するものを新しく考えた。またどこかで震災起きた時に、早急に活用できると思う。



**熊本地震被災者を救った  
木造建物の新たな形での活用の可能性**

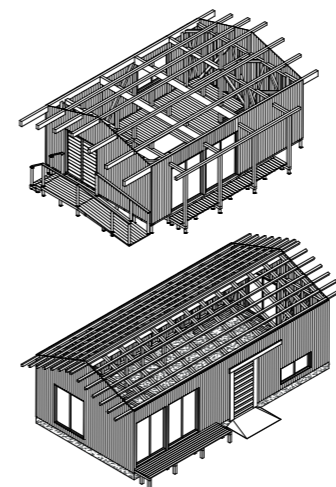
モデルケース(2)・宇土市浦田仮設団地 みんなの家 [曳家・合築計画]

平成 28 年、熊本県熊本地方を震源とする「平成 28 年熊本地震」が発生  
県は災害救助法を適用し応急仮設住宅及び、「みんなの家」とよばれる木造の集会所施設を整備

震災から約 2 年が経過し、「みんなの家」の使用期限が終えつつある  
その新たな形での活用の可能性について検討を行う

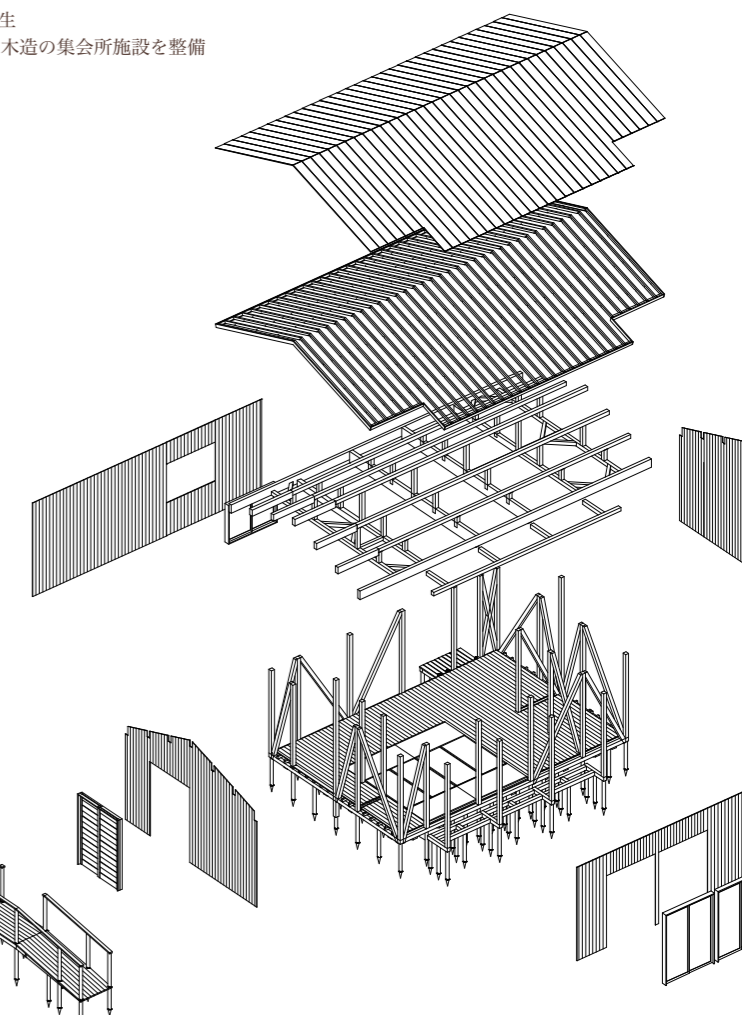
| 市町村  | 仮設住宅    |         | みんなの家      |            | 本格型  |
|------|---------|---------|------------|------------|------|
|      | プレハブ    | 木造      | 規格型<br>集会場 | 規格型<br>談話室 |      |
| 熊本市  | 541 戸   |         | 5 棟        | 5 棟        |      |
| 宇土市  | 117 戸   | 26 戸    |            | 3 棟        |      |
| 宇城市  |         | 176 戸   | 1 棟        | 2 棟        |      |
| 美里町  |         | 41 戸    |            |            |      |
| 大津町  | 91 戸    |         |            | 1 棟        |      |
| 菊陽町  | 20 戸    |         |            | 1 棟        |      |
| 阿蘇市  |         | 101 戸   |            | 3 棟        |      |
| 産山村  |         | 9 戸     |            |            |      |
| 南阿蘇村 | 333 戸   | 68 戸    | 4 棟        | 2 棟        | 1 棟  |
| 西原村  | 262 戸   | 50 戸    | 1 棟        | 3 棟        | 3 棟  |
| 御船町  | 264 戸   | 161 戸   | 1 棟        | 10 棟       |      |
| 嘉島町  | 208 戸   |         |            | 3 棟        |      |
| 益城町  | 1,556 戸 | 6 戸     | 16 棟       | 11 棟       | 3 棟  |
| 甲佐町  | 228 戸   |         |            | 4 棟        | 1 棟  |
| 山都町  |         | 6 戸     |            |            |      |
| 氷川町  |         | 39 戸    |            |            |      |
| 計    | 3,620 戸 | 683 戸   | 28 棟       | 48 棟       | 8 棟  |
|      |         | 4,303 戸 |            |            | 84 棟 |

熊本地震 応急仮設住宅 市町村別 整備一覧

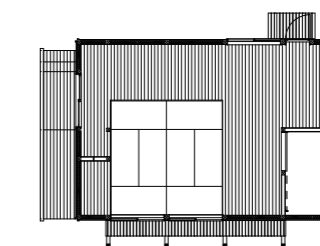


みんなの家 規格型標準タイプ  
< 建築概要 >

|                 | 規格型 40 m <sup>2</sup> | 規格型 60 m <sup>2</sup> |
|-----------------|-----------------------|-----------------------|
| 主要用途            | 談話室                   | 集会所                   |
| 主要構造            | 木造                    | 木造                    |
|                 | 地上 1 階                | 地上 1 階                |
| 杭・基礎            | 木杭                    | RC ベタ基礎               |
| 最高高さ (設計 GL より) | 4020m                 | 4540m                 |
| 延床面積            | 42.97 m <sup>2</sup>  | 59.62 m <sup>2</sup>  |



規格型 40 m<sup>2</sup>集会所タイプ  
部材バース図



規格型 40 m<sup>2</sup>談話室標準タイプ 平面図

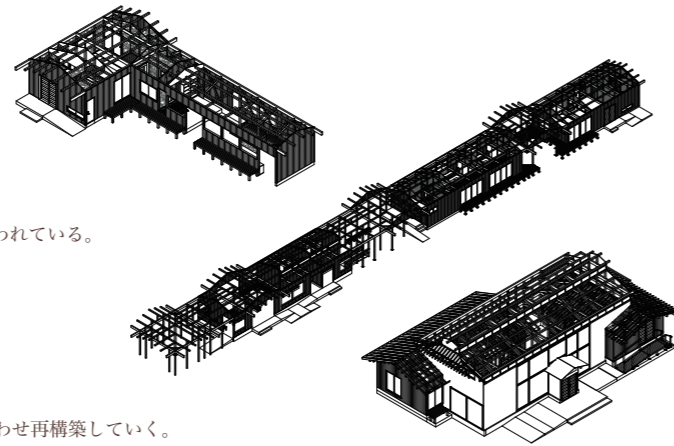


規格型 60 m<sup>2</sup>集会所標準タイプ 平面図

<検討案>

- (1) 継続利用 (木杭の場合は RC 基礎に改修)、
- (2) そのままの形で移築、
- (3) 減築や合築を含めて増改築した上での再構築

県ではこれらを実現するため、技術・コスト面での方針を固め、補助金などの財源確保の整理、運営する市区町村・自治会との情報交換が行われている。



みんなの家規格型で活用されている基本部材のみを再利用し、各ケースに合わせて再構築していく。

モデルケース (1) - 甲佐町乙女第三仮設団地 みんなの家 [移築・合築計画]



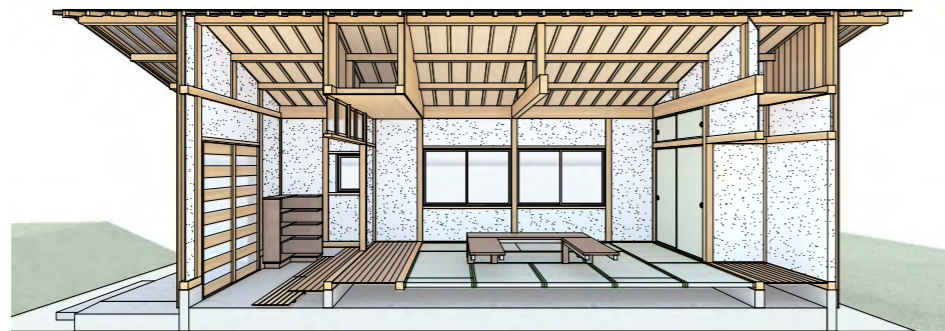
俯瞰パース



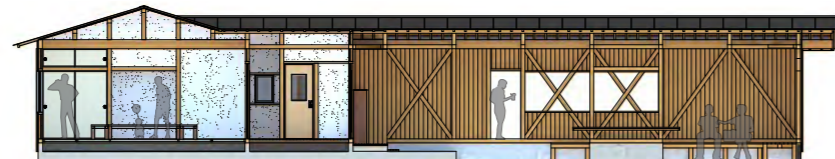
入口から内部を望む



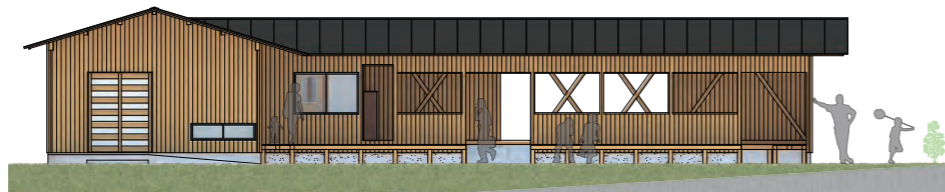
和室



短手断面パース

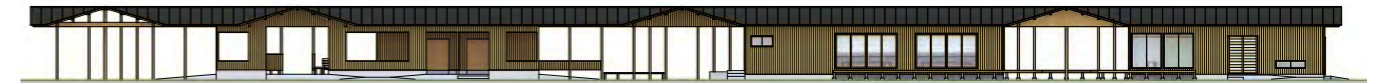


長手断面図



長手立面図

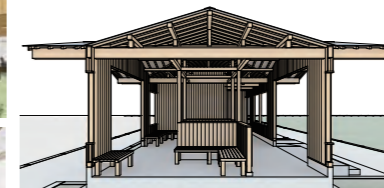
モデルケース (2) - 宇土市浦田仮設団地 みんなの家 [曳家・合築計画]



長手立面図



公園休憩所



公衆トイレ



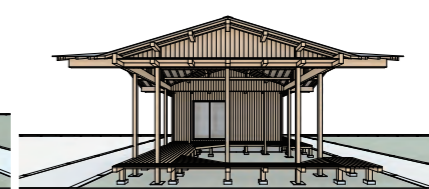
自治会受付入口



自治会大集会所

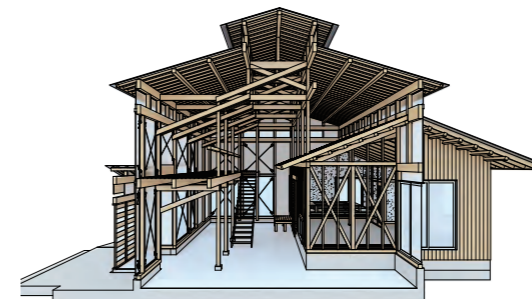


憩いのデッキ広場



小集会所兼倉庫

モデルケース (3) - 熊本震災復興記念館 みんなの家 [合築計画]



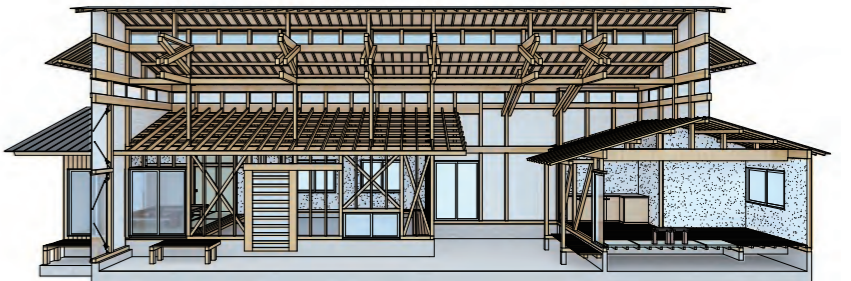
短手断面パース



長手立面図



長手断面パース



修士論文

|   |         |
|---|---------|
| 土木構造物に区画された土地を活かした公共空間の提案<br>横浜駅南側エリアを対象として                   | 原山 雅也   |
| 近代韓国(1910-1945)における「改良オンドル」の動向に関する研究<br>日本人と韓国人の改良意識の違いについて   | 李 勇太    |
| オモテとウラの空間をつなぐ都市の在り方<br>地方都市前橋における人間のための街路空間の再編集               | 田中 啓介   |
| 同潤会分譲住宅事業の成立の設立とその後の展開について<br>平面形式の変遷を中心に                     | 松川 英莉奈  |
| お寺ツーリズム<br>栃窪 日蓮寺を中心とした農業観光拠点の提案                              | 森島 駿平   |
| CDF解析による大規模講義室内の温熱環境評価  | 金田 圭祐   |
| 公園から紐解く都市<br>江東区新木場における第一貯木場を対象とした海上公園の提案                     | 木村 捷希   |
| トランスナショナル・コミュニティの形成<br>日本で暮らす移民者と地域の共生                        | 城間 リカルド |
| 在留外国人居住区における地域コミュニティのあり方<br>東京都大久保地区における多文化交流の場の提案            | 市川 貴一   |
| 火星における風土的建築<br>火星で自立した生活を送るための探査基地の提案                         | 加藤 正佳   |
| ◎ 鉄道インフラを含むまちの景観<br>山手地区における子どもたちの交流拠点の提案                     | 下山 智加   |
| 緑道地域の居住のあり方<br>烏山川緑道を中心とした集合住宅の提案                             | 印東 尚朗   |
| リアクティブ型消音装置によるトンネル発破超低周波音の制御                                  | 川澄 卓也   |
| 農園を有する公開された生産施設のアプローチにおけるランドスケープの構成<br>コーヒー農園に建つ公開性のある生産施設の提案 | 枝川 和樹   |
| 蒲田駅東口地区における建物外形タイプと開発過程との関係<br>都市の変化に呼応する建築の提案                | 須山 高志   |
| 厚みのある障壁・盛土を回折する道路交通騒音の伝搬計算<br>3次元波動数値解析によるASJ RTN-Modelの検証    | 阿部 菜摘   |
| ◎ みんなの家の利活用<br>熊本震災復興地域における仮設住宅団地の集会所建物再活用の提案                 | 田村 駿介   |
| BEMによる室内音場解析における反復解法の収束判定<br>形状・吸音・拡散性と解析結果の関係                | 齋藤 昴太   |
| 都市を横断するということ<br>移動体験に基づく都市空間の記述に関する研究                         | 櫻井 浩平   |
| Empirical Reliability Indices based on Methods of Moment      | 姚 ヨウセン  |
| Seismic Resilience Assessment on Steel Braced-frame           | 葛 方ブン   |
| 博士論文  |         |
| 震災記念堂を中心に計画された横綱町公園の建造物に関する研究<br>「日本趣味」の建築の成立過程について           | 姜 明采    |

◎優秀賞



卒業研究

佐塚将太

前田沙希

長谷川舞

斎藤健太

永盛栞

掛川真乃子

長谷川政平

卒業設計 ゲスト審査員



萩原 剛  
Takeshi HAGIWARA

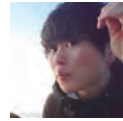
早稲田大学芸術学校教授



宮崎 晃吉  
Mitsuyoshi MIYAZAKI

株式会社 HAGI STUDIO 代表取締役

●ディプロマ賞



佐塚 将太  
Shota SAZUKA

曾我部研究室  
SOGABE lab.

日常をつなぐ架け橋

The bridge between daily and disaster

東南海地震を想定する事前復興計画

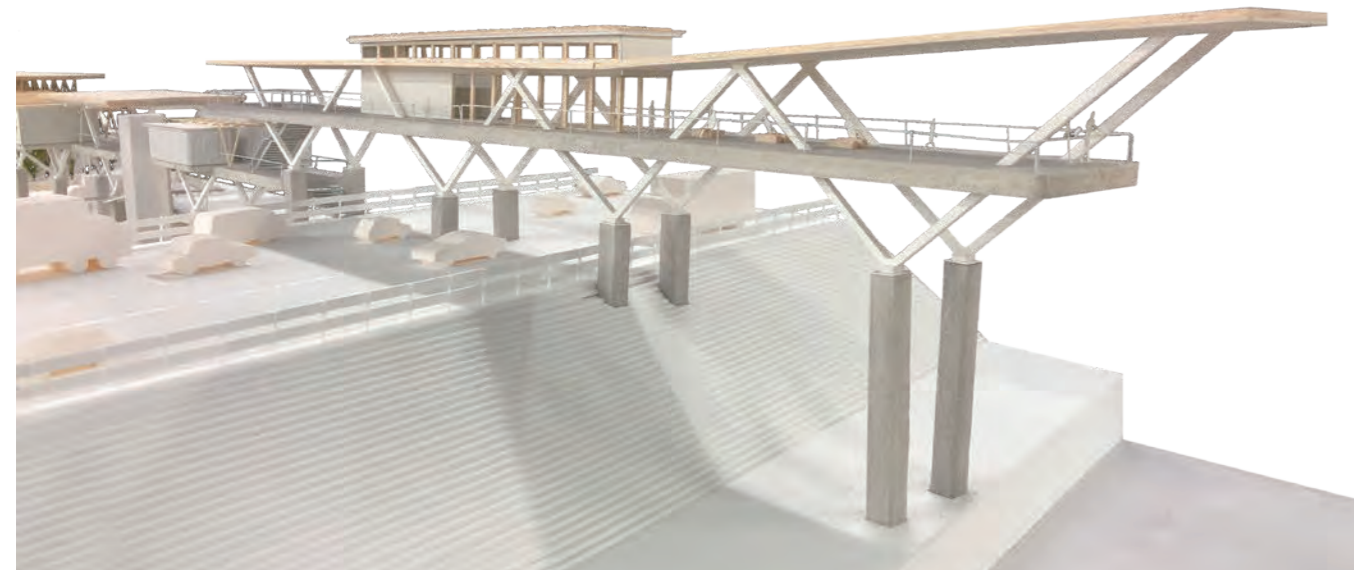
Pre Disaster Reconstruction Planning  
for the Tonankai Earthquake

**秋原** 僅か300mで時間軸が変わるこんな珍しい所はない。鉄道、街道、自然があつたりなどのキャラクターが建築に現れていたらより卓越したアイデアになっていた。

**佐塚** 建築自体が山から海岸まで繋ぐような佇まいに対し、レイヤー上に重なる地域のコンテクストを機能として建築に反映させています。

**宮崎** 一直線にやるのではなく、ずれながらの繋がっていくような形もありうるのではないかと。

**秋原** 卒業設計の3分の1は場所の発見があると思う。場所をどれだけ読めていたか、そういう意味ではよく読めていた。



海岸まで伸びるこの架け橋は街の文脈を繋ぐ

Concept

震災が起こると事を危惧されている街に対して震災発生前から被災後の復興までを視野に入れた事前復興計画を行う。地域の場が防災としての役割を果たせることを前提とし震災時の避難、復興、防災の拠点として機能する。

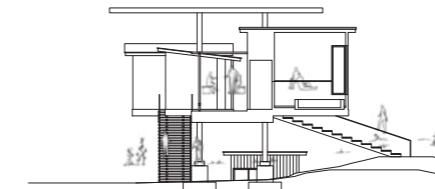
同時に街の文脈をつなぎ、人々の日常生活の支えとなり日頃の防災意識を高める。津波により街の資源が流失することを想定し、土地の記憶を継承していく役割も担う。地域の人々が日常的に使いながら、時間と記憶を蓄積する器として次世代へ繋ぐ。



高速をまたぎ立体交差する



賑わう東海道との交わり



児童館・バス待合断面



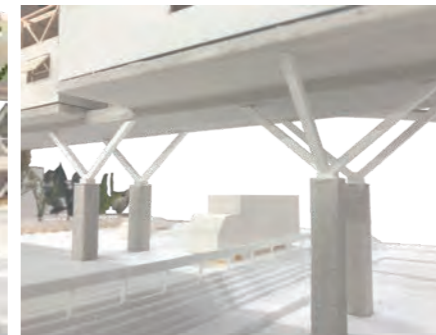
銭湯・緑道断面



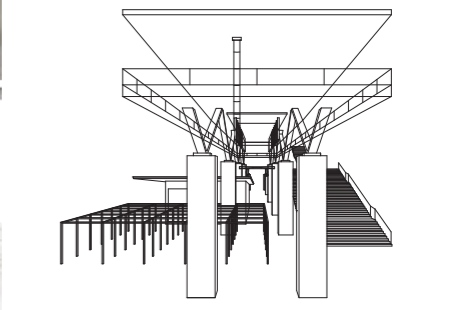
銭湯の煙に人々が集まる



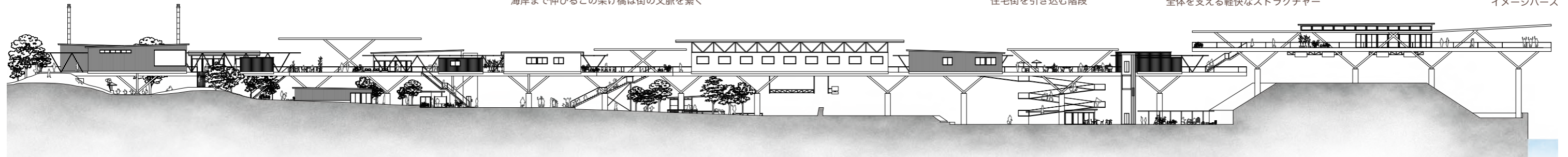
住宅街を引き込む階段



全体を支える軽快なストラクチャー



イメージパス



まちの母屋断面図

●優秀賞



前田 沙希

Saki MAEDA

曾我部・吉岡研究室  
SOGABE・YOSHIOKA lab.

空隙の秋葉原  
Void in Akihabara

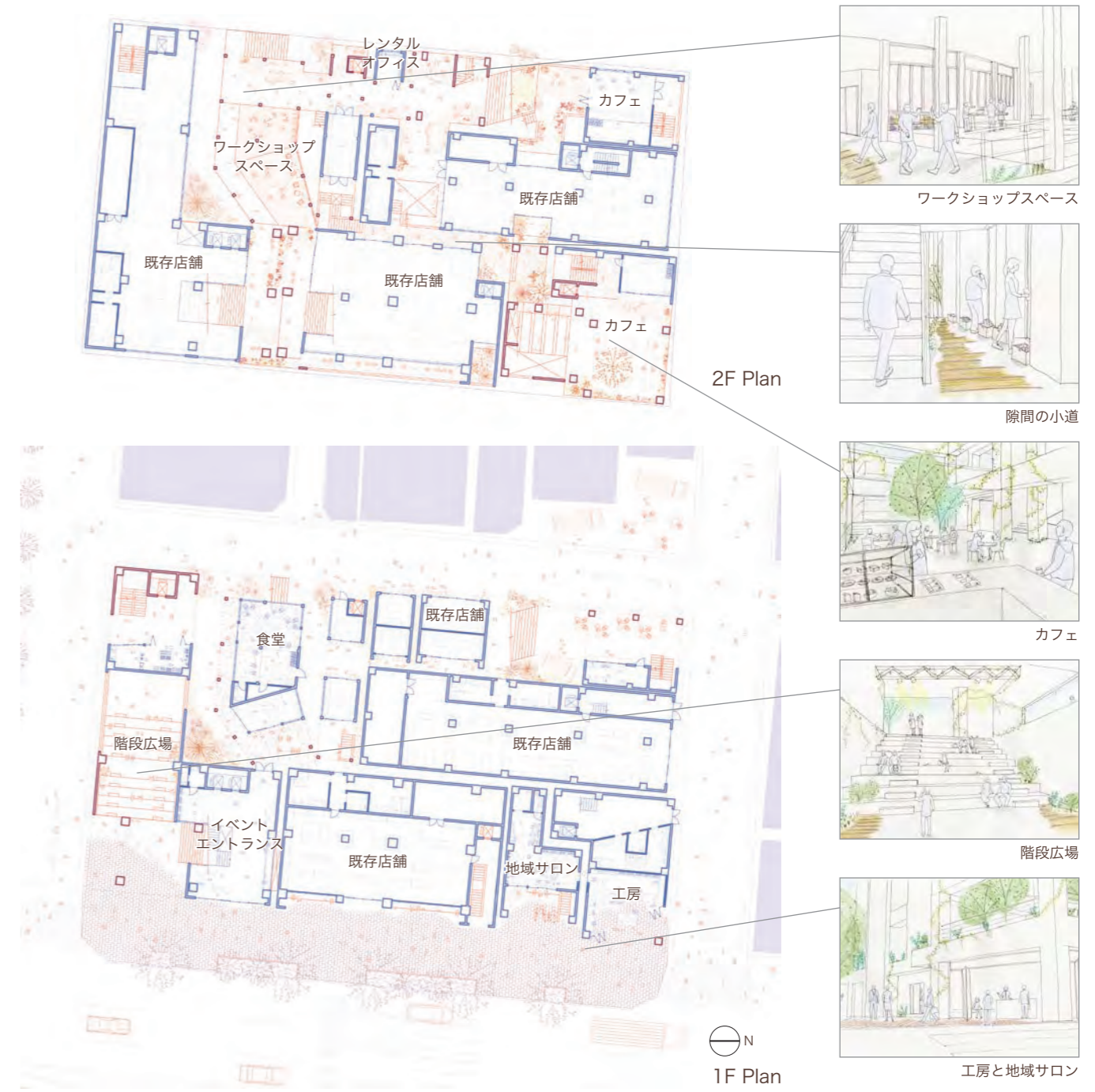
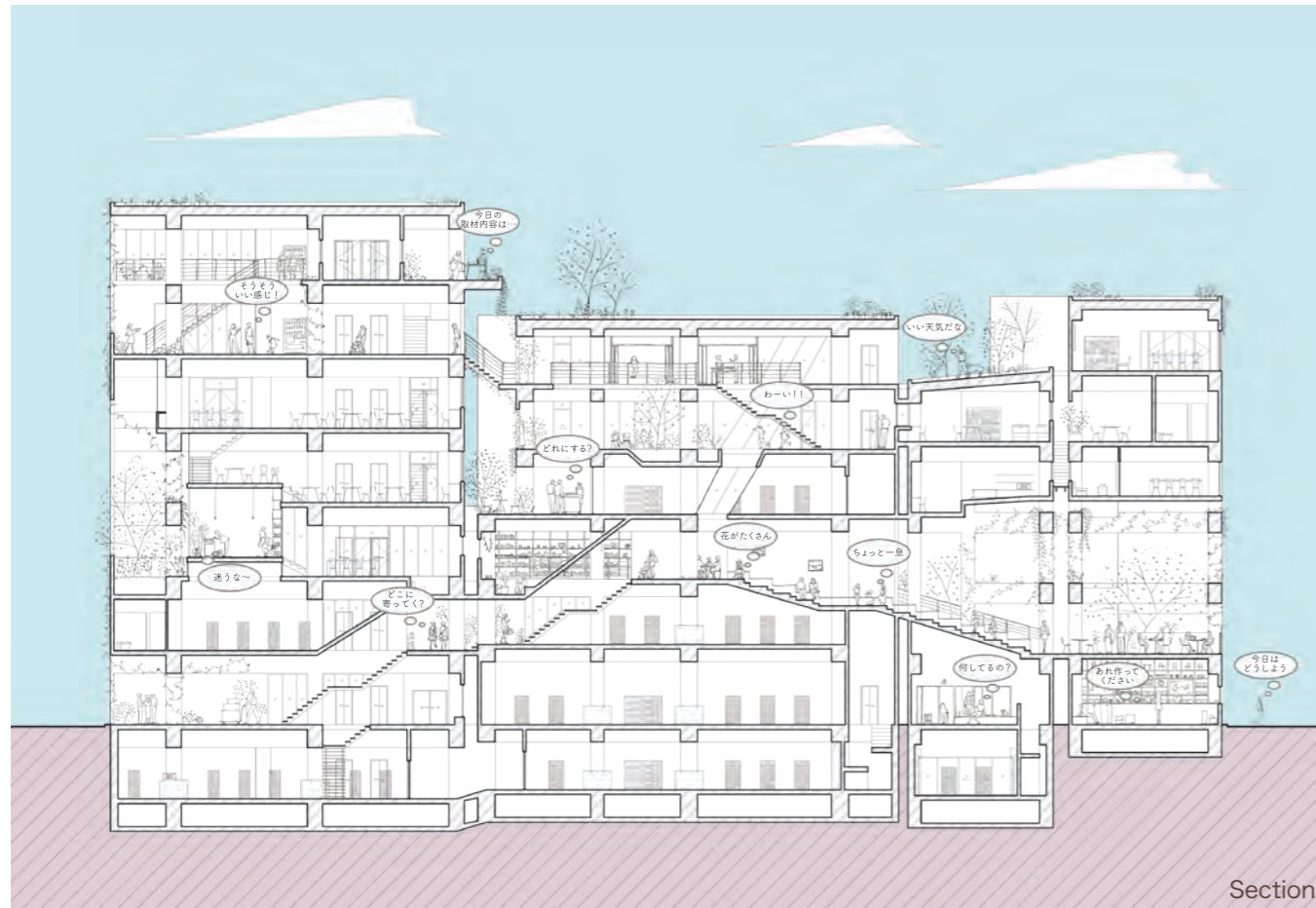
都市部における建築の更新のあり方  
Proposal for regeneration in urban area

**宮崎** 今までは都市の奥行き感が1階から上の階に行くほど深くなっていますが、この提案では全部表になってしまうつまらなさがあるのではないかと。それよりも奥行きが使われ方に变化があるのですか。

**前田** 奥行きは変えています。GLは大きく、上に行くにつれて内部に対して少しだけ開いていくようにして、自らの作業を拡張するようにしています。

**萩原** 表層が面白いというリサーチも考えられると思います。これだけ様式の異なるものが存在するのは珍しいし、表層を残しながら修繕することもあるのですか。建物の再利用をさらに再利用すれば、このアーチのようなファサードが残ったら古典主義のような印象が残るし、街の再利用としてこのような方法も考えられるのではないかと思います。

都市を穿ち、新たな公共性を付加する





●優秀賞



長谷川 舞  
Mai HASEGAWA

中井研究室  
NAKAIlab.

## UDAGAWA PASTIMISM

都市の街区におけるヴォイドと既存設備を利用した都市公共空間の提案

Proposal of new urban public space by using void in urbanblock with facility machines

**宮崎** プレゼンの平和さとアウトプットの過激さのギャップがすごい。

**長谷川** 派手なものを作ろうとしたのではなく、結果的に過激な外観の作品ができました。

**萩原** 都市の中にプロダクトを落とし込むというコンセプトでやるなら、建築はいらんんですよね。もっと徹底して模型に昇華するといい。建築でないポキャブラリーで都市を埋め尽くすといいと思う。

**萩原** 卒業設計は、設計しなくていいんですよ。批

評ができればいい。もっとこういう作品は批評に徹底すればいい。

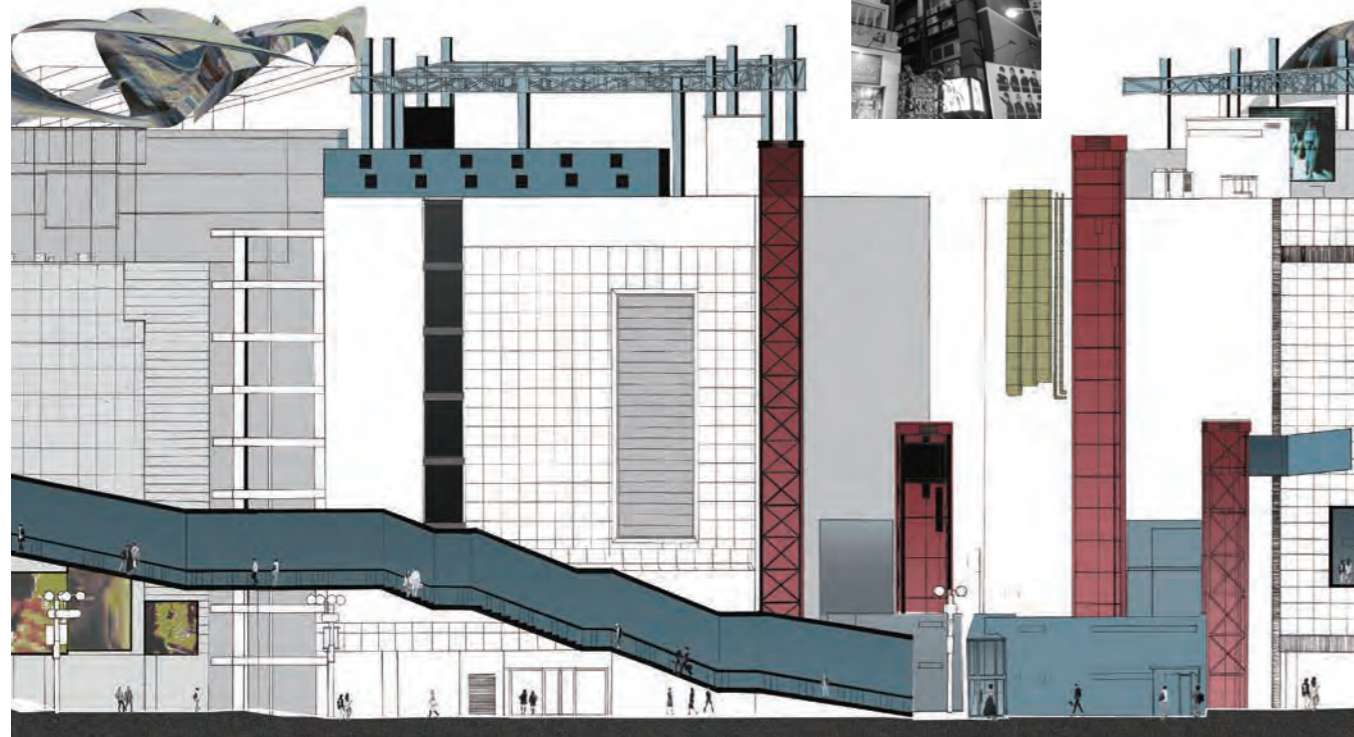
**宮崎** 渋谷でやるとやっぱりこういう映像的なものになるんだなと思いました。これが敷地内だけでなく、隣の敷地にも波及してくるような建築だとよかったと思う。

**長谷川** 批評性を持たせるということは考えていませんでした。想定外の可能性を生み出し、建築が他の敷地に成長していくような構成までやりきることができたらよかったです。

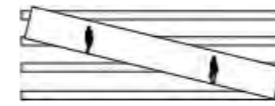
裏的なものの集積 (室外機・ダクト...)



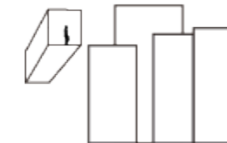
## 動線を差し込み、都市をギャラリー化する



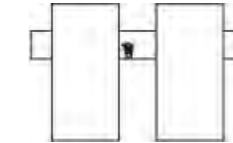
チューブの通り方



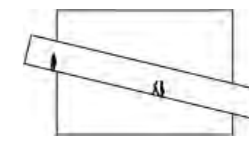
スラブを突き抜ける



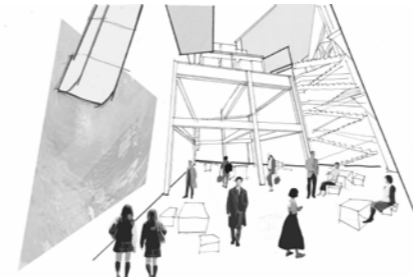
建物から離れ、浮く



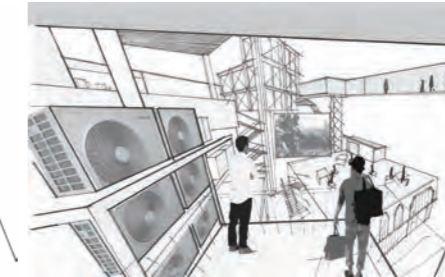
建物の内外を交互に通り返ける



建物のファサードに沿う



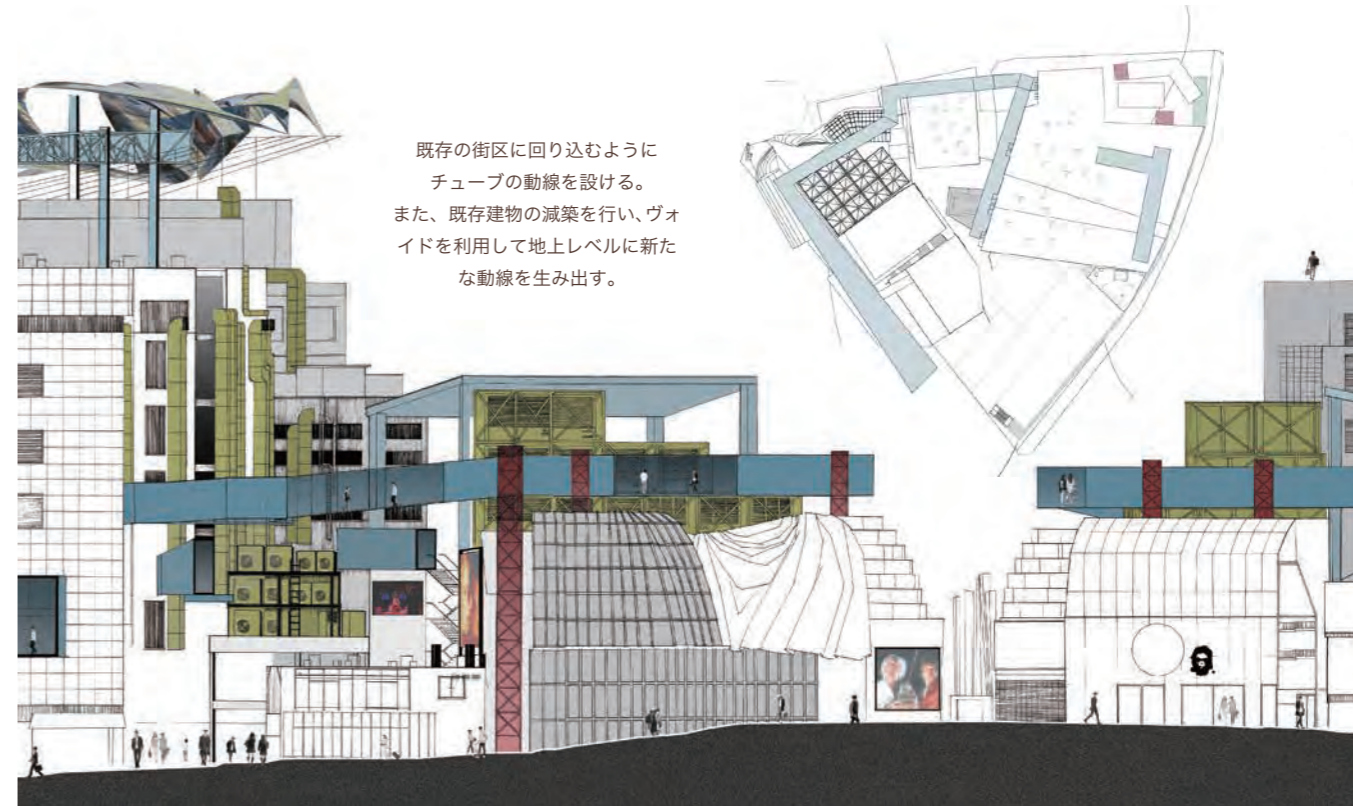
中央広場 (減築箇所)



既存建物に突き刺さるチューブから



中央広場 屋上映画



既存の街区に回り込むようにチューブの動線を設ける。また、既存建物の減築を行い、ヴォイドを利用して地上レベルに新たな動線を生み出す。

●優秀賞



齊藤 健太

Kenta SAITO

石田研究室  
ISHIDA lab.

混沌する聖域  
Asylum to chaos

インターフェイスの再考と豊洲移転に  
対する築地改修案  
Tsukiji renovation proposal for Toyosu transfer and  
reconsideration of the interface

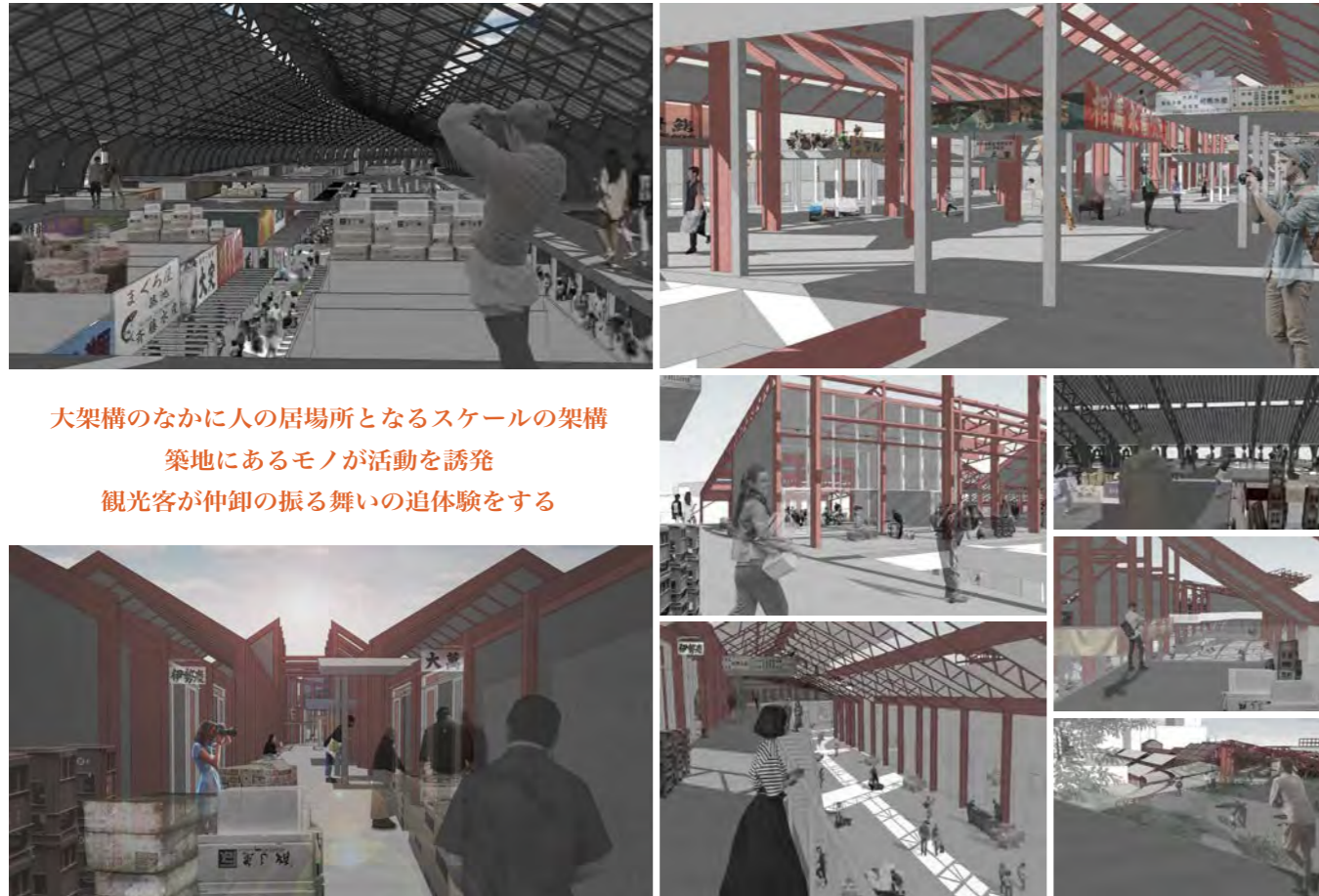
**宮崎** アプローチが全方位的で素晴らしいと思う。仲卸は重要であるが時代のトレンドは大企業がほとんどの割合を占め、仲卸が必要でなくなっている。時代の流れを完全に否定するのではなくオルタナティブな提案が必要だと思う。

**齊藤** 築地は衛生面・面積不足・動線の問題が挙げられます。衛生面は躯体冷房により外部でも一定の温度が保たれます。豊洲との面積比較で駐車場と冷蔵庫が不足しているのが分かり、それらを屋外駐車場に積層させ配置することで補えます。動線面は観光客と市場の動線を断面的に分けたり、場外

から来る観光客を配置計画により誘導させ事故を防ぎます。築地でもまだ機能させられることを証明し、豊洲に移転しようとする社会への批判となるような提案です。

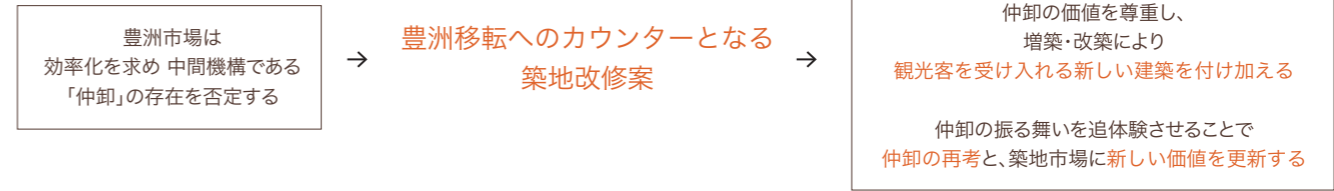
**宮崎** 豊洲に市場としてマストなものを任せ築地の残余空間に観光的なものをいれ、職に溢れる仲卸の活躍の場を設けるような案でもよかったと思う。

**秋野** ただのリノベーションだと思っていたが大胆な案でいいなと思った。ただ、できた建築が既存の建築に流されている気がする。

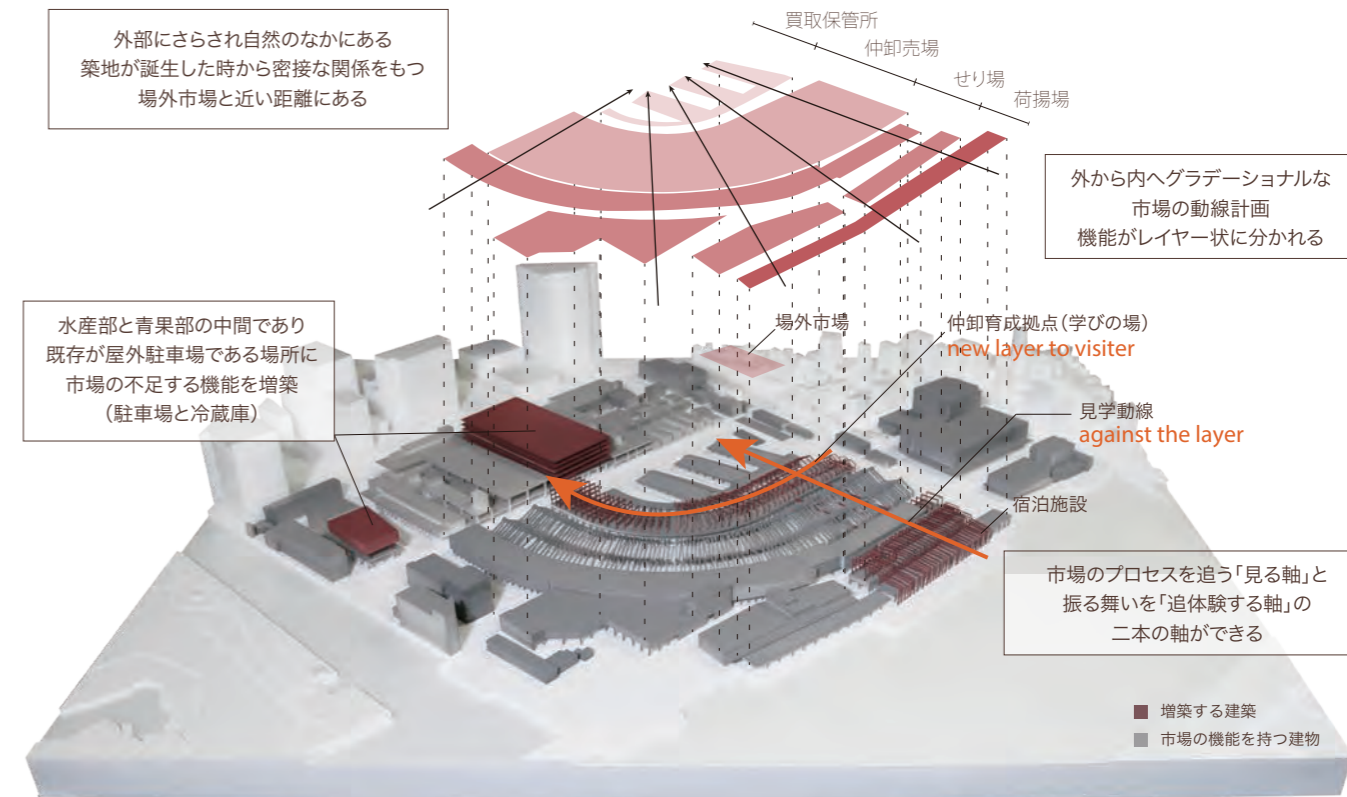


大架構のなかに人の居場所となるスケールの架構  
築地にあるモノが活動を誘発  
観光客が仲卸の振る舞いの追体験をする

■豊洲批判から提案へ



■既存ゾーニングを読み取り 増築する建築の配置計画を行う



増築する建築は 既存が駐車場として使われている場所に配置する  
既存のレイヤーに沿う新しいレイヤーとレイヤーをまたぐ軸 二本の軸を作り出す

●優秀賞



永盛 栞  
Shiori NAGAMORI

山家・上野研究室  
YAMAGA・UENO lab.

水面に添う  
Flow MINAMO

まちと水と人の関係性を再構築する  
集合住宅の提案

Collective housing to restructure the relationship  
among town, people and water

**宮崎** 水路をまちの共有財産として見直すというメッセージだと思うのですが商業的なものをいれる余地はないのですか。

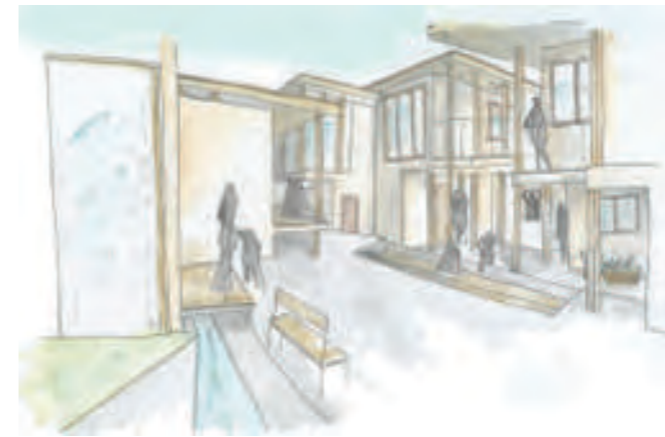
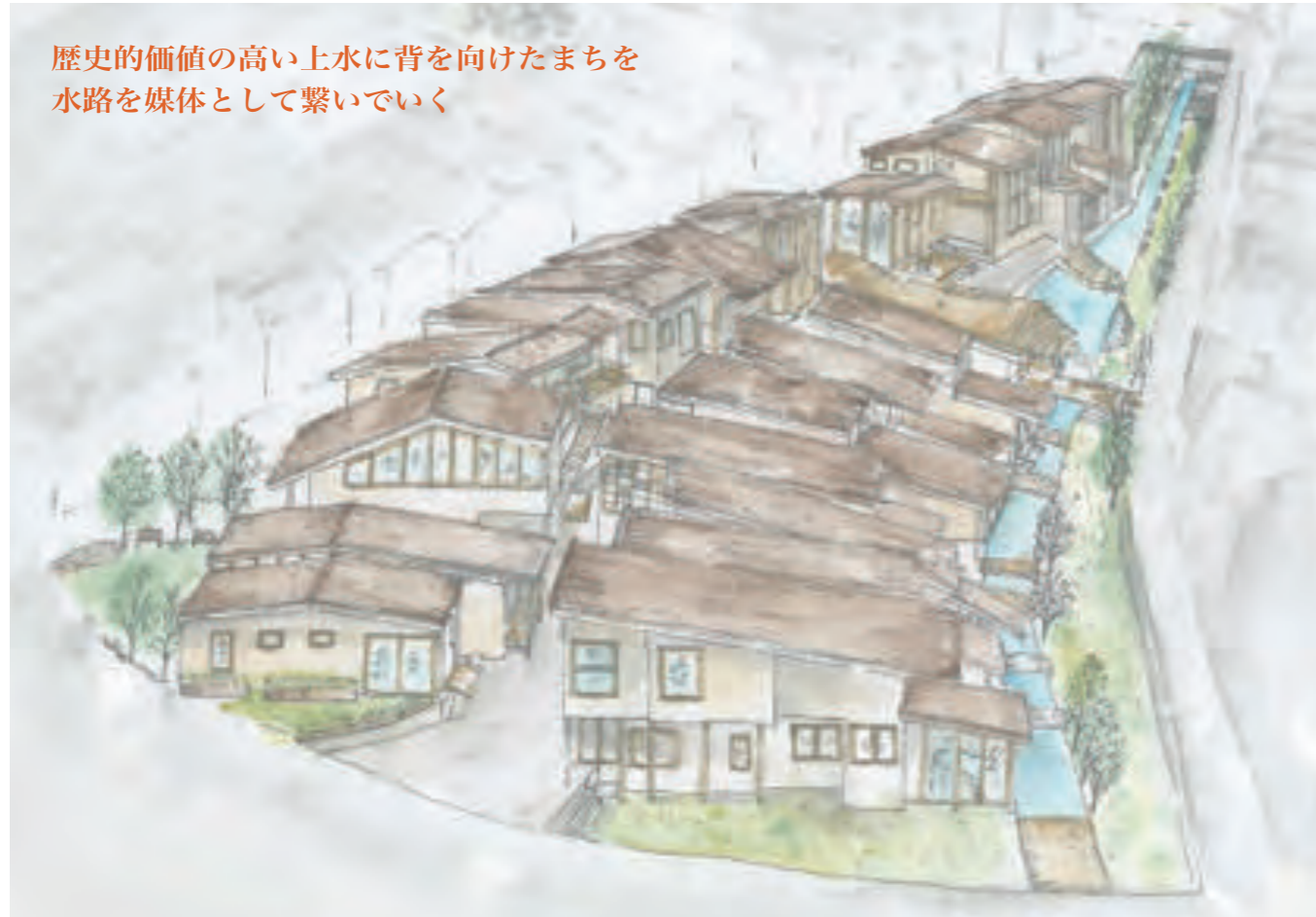
**永盛** 商業的なものは入れてませんが、住んでいない人も入れるようなシェアキッチンやワークショップスペースなどの施設はいくつか設計しました。

**宮崎** お金を払って居られるシステムがあってもよかったですと思います。入れるといっても住民が中心だと気が引けると思うのでそういった場

所が既存の水路沿いにいくつかあったらよかったですのかなと思いました。

**萩原** 窓がファッションではなく空間から考えられているのでただの正方形が並べられているのではなくオリジナリティーがあると感じました。

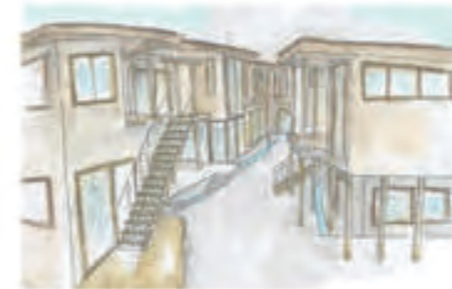
歴史的価値の高い上水に背を向けたまちを  
水路を媒体として繋いでいく



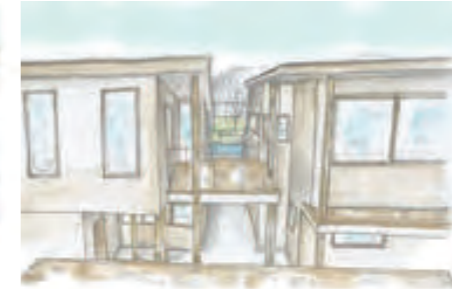
住戸の裏側に設けた水路の共用部 住民同士が生活の中で交流する



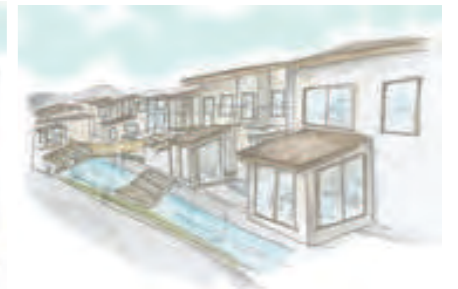
様々なアクティビティと動線が交わる広場



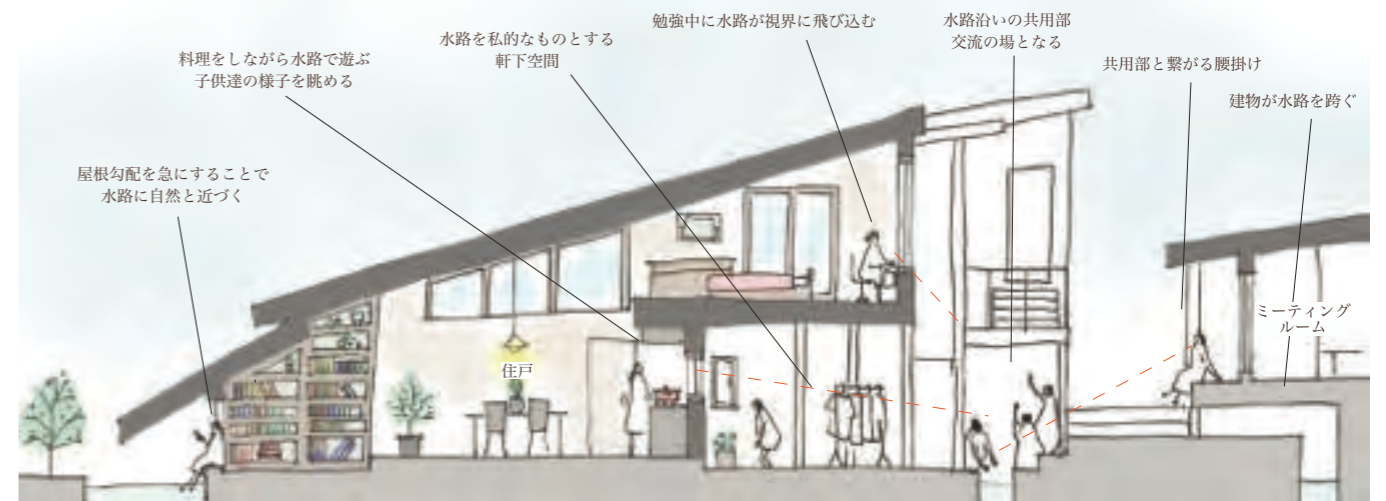
水路に沿う階段 向かう階段 跨ぐ階段



抜けた視線の先に水路



水路を跨ぐ住戸



屋根勾配を急にする事で  
水路に自然と近づく

料理をしながら水路で遊ぶ  
子供達の様子を眺める

水路を私的なものとする  
軒下空間

勉強中に水路が視界に飛び込む

水路沿いの共用部  
交流の場となる

共用部と繋がる腰掛け

建物が水路を跨ぐ

ミーティング  
ルーム

断面図

●優秀賞



掛川 真乃子  
Manoko KAKEGAWA

石田敏明研究室  
ISHIDA lab.

漣ノ再興

Restoration of fishily village

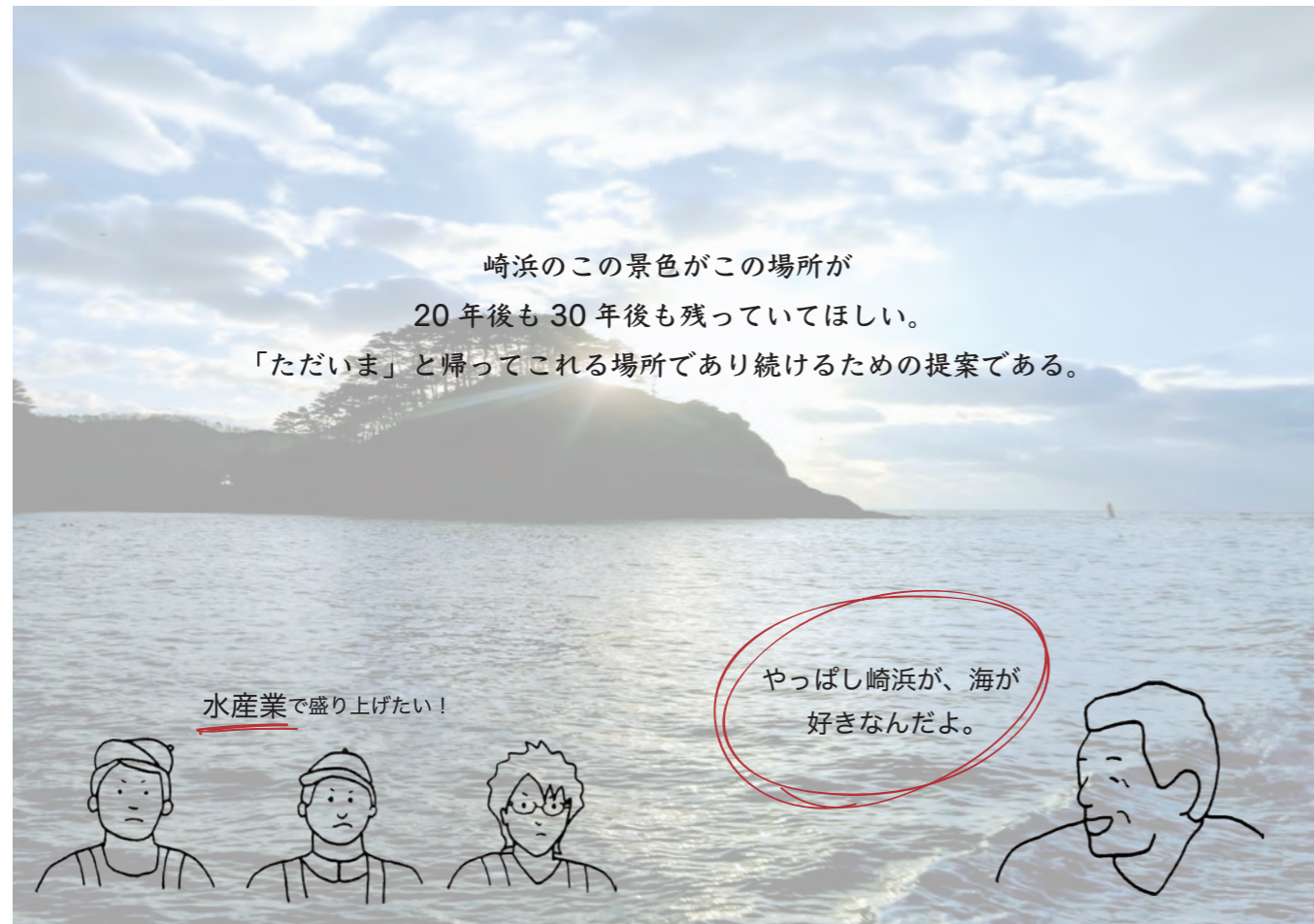
大船渡市三陸町「崎浜」における復興と  
その先を考える

Thinking about the future of SAKIHAMA

**宮崎** 防潮堤というのはどうしてもネガティブに捉えられるもので、それをインフラから読み替えて、今あるものを受け入れて新しい次の価値を見出すのも建築家の仕事だと思います。ここには船で来るって事です。

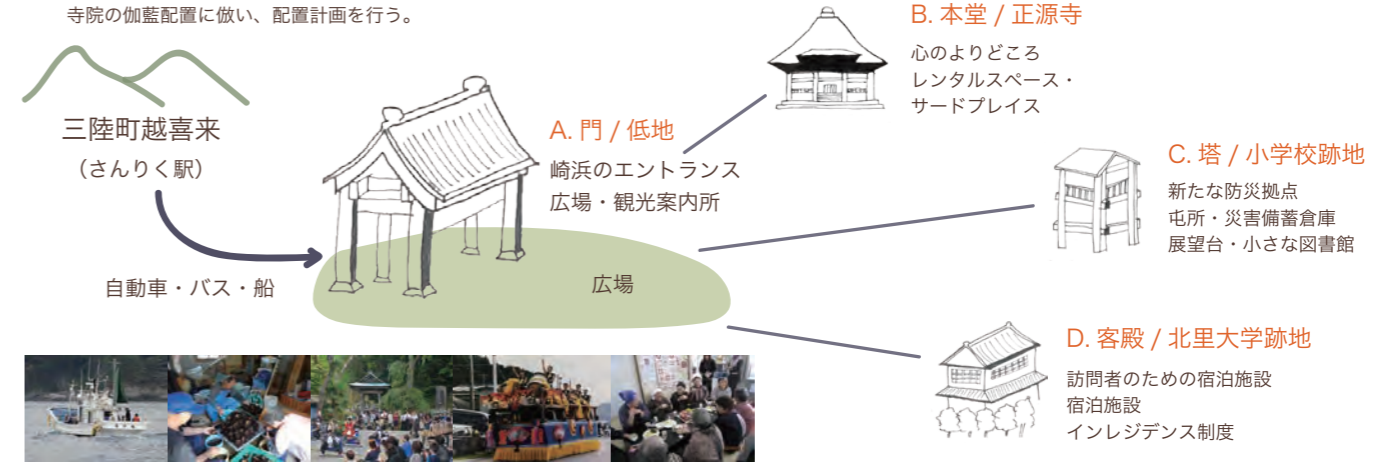
**掛川** はい。将来的にブルーツーリズムを想定しています。

**宮崎** それをメインにしたいと思う、そしてその演出に使うのはいいと思います。ツーリズムっていうのはもてなされるものから、その土地の歴史や文化を知りたいっていう人が増える中で、この歴史やたくましく人が生活している様子がツーリズムに絡んでいてもよかったですね。



□ マスタープランの提案

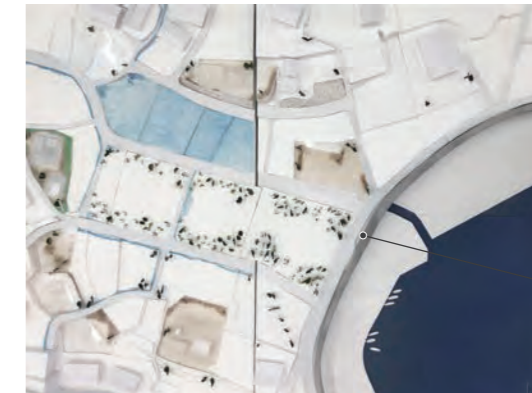
寺院の伽藍配置に倣い、配置計画を行う。



□ 広場のランドスケープ

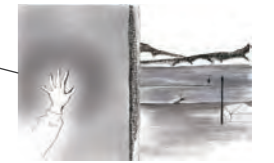
防潮堤から直線上に広場、集会場を配置した。その広場を囲むように、番屋などを配置した。

暗渠化された川を復活させ、海との距離を保つ。



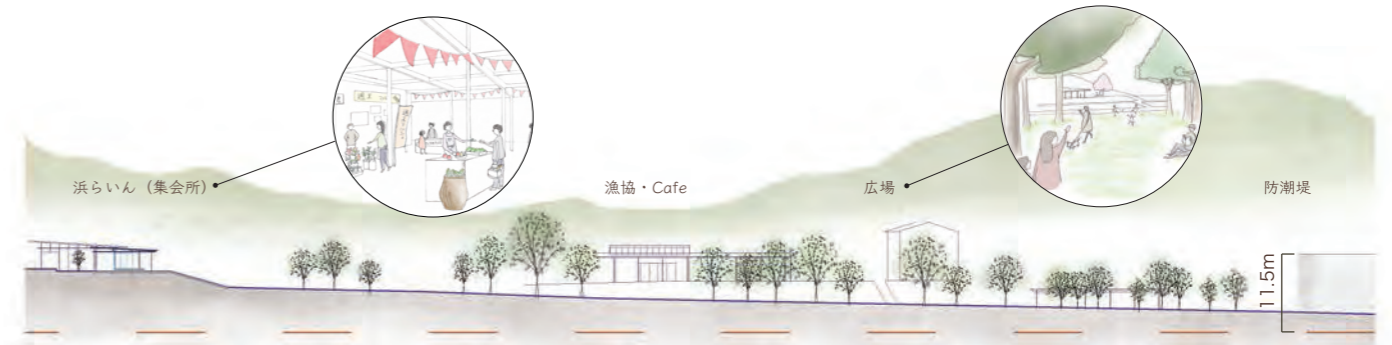
□ 防潮堤の定義

本提案では、既存の防潮堤を肯定し提案する。門を「くぐる」という行為から防潮堤を「門」と見立て、慰霊碑のように扱う。また、今後は海からの入り口となることを想定する。



□ 断面計画

広場を囲うように建物が向かい合って立ち、土地がもつ傾斜に馴染む。



● 優秀賞



明治期から大正中期の住宅にみるガラス建具使用の動向

The tendency of using glass fixture by analyzing of Japanese house plan books from Meiji to Taisho era

戦前期日本の住宅におけるガラス建具の普及過程について

On the diffusion of glass fixture of housing in prewar period

1. はじめに

文明開化による西欧文化の導入は、日本の建築に板ガラスという近代的な材料を取り入れる契機となり、改良を模索した明治期の住宅にも採用され始める。1910 年には本格的な板硝子の国産化が始まり、大正期以降には日本の板硝子産業が大きく前進し、大量生産が可能となった。

2. 研究目的・対象史料

本研究では、板ガラスの国産化が始まる以前の明治期から、国産板ガラスが普及し始める大正期までの過程を検討し、高価な輸入ガラスは住宅のどの箇所に積極的に用いられたのか、またガラスという新しい素材がわが国の住宅にどのような変化を与えたのかを明らかにするものである。分析範囲は明治期から 1923 年までを対象とする。関東大震災により国産板ガラスの需要が増える以前の限定された「ガラス建具」の使用箇所を確認する為である。対象資料として、言説での分析においては最も「ガラス建具」に関する議論が見られる『婦人衛生雑誌』<sup>2)</sup>を中心に言説を収集し、当時のガラスに関する議論を検討する。また、図面での分析においては明治期から 1923 年までの住宅図面集のうち、立面図、平面図や仕様書で建具種類が確認できるものを対象とし、特に「硝子入障子」のようにガラスが使用された箇所に注目する。

3. 言説から見たガラスの普及過程

『婦人衛生雑誌』の記事を確認すると、住宅におけるガラスの言説は主に「防寒対策としてのガラス建具の推奨」、「換気量減少によるガラス建具の批判」、「防寒生・換気量に配慮した縁側外回りのガラス建具」といった3つの傾向が認められた。

**曾我部** これまでの不透明なガラス障子から透明なガラスになるのは新しい価値であるのに、その点あまり語られていないことが単純に疑問です。例えば、ガラスが割れることによる防犯性能といったような、他の評価軸のようなものは出てこないのか。

**中井** 外側にガラス建具があって内側に障子がある、というように、ガラス建具と障子を組み合わせて使っていたのか、それとも置き換ってガラスだけになってしまうのか。

**長谷川** 図面を見るとおそらく単体で使われていたものと考えられるので、置き換っていたと思われる。

**長谷川** 今回用いた『婦人衛生雑誌』と『建築雑誌』では、主に防寒性による推奨と換気が悪いことで生じる被害に関する記述でした。

防寒性改善のために「ガラス建具」を導入すると、建具の密閉性が向上し、換気量が減少した結果、日本住宅に換気孔設備や縁側の外回りガラス障子など、新たな提案をもたらした。

表1 ガラスの言説に関する動向

| 発行年  | 話題性「ガラス建具」 | 国産板硝子の普及 | 換気減少「ガラス建具」 | 防寒対策の促進 | 縁側外回りガラス建具 |
|------|------------|----------|-------------|---------|------------|
| 1888 | ○          |          | ○           | ○       |            |
| 1889 | ○          |          | ○           |         |            |
| 1890 |            |          |             |         |            |
| 1891 |            |          |             | ○       |            |
| 1892 |            |          |             |         |            |
| 1893 | ○          |          | ○           | ○       |            |
| 1894 |            |          |             | ○       |            |
| 1895 |            |          |             | ○       |            |
| 1896 |            |          |             | ○       |            |
| 1897 | ○          | ○        | ○           | ○       |            |
| 1898 |            |          |             | ○       |            |
| 1899 |            | ○        |             | ○       |            |
| 1900 |            |          |             | ○       |            |
| 1901 |            |          |             | ○       |            |
| 1902 |            |          |             | ○       |            |
| 1903 | ○          | ○        |             | ○       |            |
| 1904 |            |          |             | ○       |            |
| 1905 |            | ○        |             | ○       |            |
| 1906 |            |          |             | ○       |            |
| 1907 |            |          | ○           | ○       |            |
| 1908 |            | ○        |             | ○       |            |
| 1909 |            |          |             | ○       |            |
| 1910 |            |          |             | ○       |            |
| 1911 |            | ○        |             | ○       |            |
| 1912 |            |          | ○           | ○       |            |
| 1913 |            |          |             | ○       |            |
| 1914 |            |          |             | ○       |            |
| 1915 |            | ○        |             | ○       |            |
| 1916 |            |          |             | ○       |            |
| 1917 | ○          | ○        | ○           | ○       |            |
| 1918 | ○          | ○        |             | ○       |            |
| 1919 | ○          | ○        | ○           | ○       | ○          |
| 1920 | ○          | ○        |             | ○       | ○          |
| 1921 | ○          | ○        |             | ○       | ○          |
| 1922 |            | ○        |             | ○       |            |
| 1923 |            |          |             | ○       | ○          |

4. 図面から見た「ガラス建具」の普及動向

平面図、立面図、仕様書より、「ガラス建具」をカウントした結果、集まった 491 例の図面の内「ガラス建具」を使用したものは、317 例あった。また、「ガラス建具」の使用箇所の合計は 1021 箇所となった。例として、図1 の場合は、平面図の記載より、1. 居間と縁側の堺 [ 南東側 ] 2. 客間と縁側の堺 [ 南東側 ] 3. 客間と縁側の堺 [ 南西側 ] 4. 女中部屋と廊下の間 [ 内障子 ] ( 本論では外気に触れない建具を「内障子」とした。図1 の4 と5 にあたる。 ) 5. 女中部屋と台所の間 [ 内障子 ] 6. 児童室側窓 [ 南西側 ] 7. 児童室側窓 [ 北西側 ] の7箇所「ガラス建具」が使われたとみなす。今回確認した図面集は、表2 の通りである。



図1 『報知懸賞住宅設計図案』<sup>3)</sup>

表2 図面集一覧

| 年代    | 題名                | 著者    | 出版社  | 「ガラス建具」確認図面数 |
|-------|-------------------|-------|------|--------------|
| 1907年 | 西洋住宅取調例集 全        | 越本長三郎 | 建築書院 | 24例          |
| 1910年 | 西洋住宅建築図案 附 家屋構造作図 | 吉澤米次郎 | 建築書院 | 13例          |
| 1913年 | 日本住宅建築図案百種        | 金子清吉  | 建築書院 | 56例          |
| 1916年 | 報知懸賞 住宅設計図案       | 佐藤功一  | 大倉書店 | 41例          |
| 1918年 | 千円以下で出来る理想の住宅     | 藤田賢三  | 大倉書店 | 13例          |
| 1919年 | かしまと小住宅 建築図案五十種全  | 吉澤米次郎 | 建築書院 | 24例          |
| 1919年 | 三千円以下で出来る理想の住宅    | 納谷松蔵  | 鈴木書店 | 7例           |
| 1919年 | 最新図説模範日本住宅        | 鈴木書店  | 鈴木書店 | 44例          |
| 1920年 | 日本住宅百圖            | 遠藤於菟  | 大倉書店 | 96例          |

表3 一戸あたりの「ガラス建具」の使用率の推移

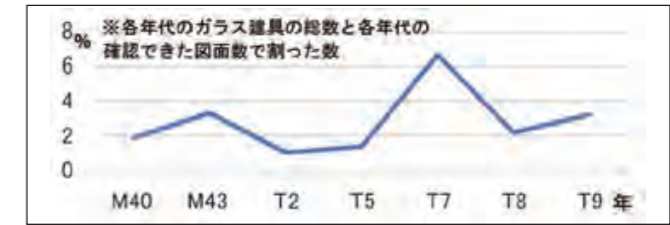


表3 から、一戸あたりの「ガラス建具」の使用率の推移は、ガラスの国産化に成功した 1910 年と、国内で板ガラスの機械による板ガラスの大量生産に成功した 1917 年の翌年の、1918 年に一度大きく使用率が伸びている事が確認できる。

表4 内障子としての「ガラス建具」の使用率推移



表4 から、内障子としての「ガラス建具」の使用率推移を見ると、1916 年から、その使用率が減っていくことが確認できる。ここから、「ガラス建具」は徐々に外側を中心に使われることになったと考えられる。

5. まとめ

『婦人衛生雑誌』の言説を基にした分析では、1888 年から大正中期まで、在来日本家屋の防寒性改善のための「ガラス建具」の導入とそれに伴う換気量減少が同時期に語られ、特に 1917 年以降に活発化した様子が確認できた。換気量減少は日本住宅に換気設備や縁側の外回りガラス障子など、新たな提案をもたらした様子が明らかとなった。また、図面による分析では、「ガラス建具」は、大正期以降徐々に内障子としての使用率が減り、徐々に外側を中心に使われることになったと考えられる。

註

- 『社史 旭硝子株式会社』旭硝子株式会社 .p.64.1967
- 雑誌名は 1 号から 40 号は『婦人衛生會雑誌』、41 号から 382 号までは雑誌名が改題され『婦人衛生雑誌』となっている。
- 『報知懸賞住宅設計図案』大倉書店 .p.91.1919

## 萩原 剛

*Takeshi HAGIWARA*

1961年 埼玉県生
1985年 早稲田大学大学院修了後 竹中工務店設計部、早稲田大学・日本女子大・東京藝術大学・東京工業大学等非常勤講師歴任
2017年～ 早稲田大学芸術学校教授

主な作品 / 受賞
「草津トリヴィラ」（東京建築賞・インテリアプランニング賞）
「ホテルオーク静岡」（中部建築賞）
「東京サンケイビル」（日本建築学会作品選奨・BCS賞）
「足立学園中等学校」（日本建築士会連合賞）
「苗栗文化園区・客家文化センター」（台湾建築奨）
「伊豆の家」、「HOUSE BH」、「軽井沢の家」
「Capital Plaza TAIPEI 国際コンペ」（最優秀賞）
「高雄オペラハウス国際コンペ」（入賞）
「台湾客家文化センター国際コンペ」（最優秀賞）

## 宮崎 晃吉

*Mitsuyoshi MIYAZAKI*

1982：群馬県生まれ
2006：東京藝術大学美術学部建築科 卒業
2008：東京藝術大学大学院美術研究科建築設計 六角研究室 修了

2008–2011：(株)磯崎新アトリエ 勤務
2013-: HAGISO代表、設計事務所 HAGI STUDIO 開設、京都造形大学非常勤講師
2015-: 東京藝術大学 建築科 非常勤講師
2016-: 株式会社 HAGI STUDIO 代表取締役
2017-: 株式会社 まちあかり舎 取締役、一般社団法人日本まちやど協会代表

先鋭的分離派運動の空想力と一連の茶室研究に没頭した探求力の対時的才覚をもった堀口捨己が教鞭をとったこの建築学科には、この2つの「才覚」はどのように受け継がれているのだろうか。発表があった上位案は地方再生も含めればほぼ都市をテーマとし、現代の社会問題を程よく織り込んでいる「上手さ」が共通していた。近年のディプロマが人工都市（近代都市）であろうが自然都市（伝統都市）であろうが同じ方法論でつくられるという等質化の傾向にあり、かつての定番だった自然に刻まれた建築や都市の中心に挑む野心的な造形派は希少種になっている。日本は本格的なリノベーションの時代に入り、スクラップ&ビルド的時間感覚で短期的改修を続けていけば建築の質は急速に低下する。この沈滞を突破するには白紙に描く空想力は欠かせない。磯部案のように言葉に潜む空間

神奈川大学の学部卒業設計の最終講評のクリティークをさせていただいた。全体の印象としては、アイデアだけに頼らず、建築的な試行錯誤の先に提案を落とし込む粘り強さと力量をどの案にも感じた。講評でも述べたように、その達成度は十分にレベルが高いと思う。

一方で、卒業設計という枠組みにとらわれているぎらいもあると感じた。既存の町の中に点在させて設計物を点在させ、小さい点をつなげて線・面とするという系統がそのひとつ。たしかに点一つでは卒業設計として見劣りするという意識が働くのだと思うが、そのせいでかえってメッセージが見えにくくなってしまっている例が多く見られた。点でも突破力をもった提案であれば思考の痕跡がデザインに現れてくるし、心に残る作品になる。面的なエリアに目を向ける

を紡いだ空想力や長谷川案の都市の空隙に言葉を発見し文学に仕立てた空想力は、完成度とは別に賞賛に値する。更には言えば磯部案の立体格子は超高層に、長谷川案の迷路はAIを駆使したプロダクトに造形されていたら批評性を兼ね備えた国際級の案になったに違いない。一方、永盛案や市毛案は空間構成力に優れ、歴史や地域への洞察と発見へのプロセスが透けて見える力作である。この地道な発見への努力（＝探求力）は必ず自らの血肉となる。入賞案は完成度が高い秀作ではあるが、世界には「空想力」と「探求力」がひとつになって易々と先頭を走って行くチームがあることを忘れないで欲しい。ディプロマは建築人生のスタートラインにすぎない。

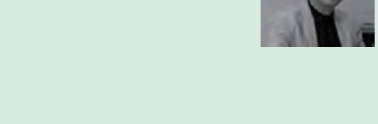
のは重要なことであるが、それであれば自分で予定調和的に作った点を連続されるのではなく、もっと「既にあるものの価値」を可視化させてつなげてほしい。

現実の世界にある事象は机上で想定する事柄よりもはるかに複雑だ。あまりに複雑すぎていつまでたってもその総体を把握するのは不可能だろう。しかしそれでもそこに自分たちの切り口を見つけだし、切断した断面が、月並みだと思っていた日常に瑞々しさを与えてくれることがある。これが面白い。

これからはシュミレーションではなく、現実の世界と対話していくことになる皆さんは、複雑にからまり硬直したように見える現状に辟易することも待っているかもしれないが、ぜひ自分の直感とビジョンを世界に切り込む楽しさを忘れずに生きていってもらえればと願っている。

## 石田 敏明

*Toshiaki ISHIDA*



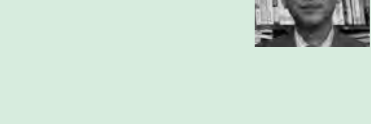
今年度の卒業研究は例年に比べ興味深いテーマが様々あり、総じて力作が多く審査していて楽しかった。内容的には災害復興計画、事前復興計画や日常的な都市の景観を形成する空間や雑多なモノや社会的な話題性のある事象への眼差し、ことばが喚起するナラティブな空間性などである。こうした着眼点からアウトプットとしての建築を構築して行こうとする真摯な姿勢は高く評価できた。また、プレゼンボードや模型による表現力などは高かったように思うが、考えたことを言語でプレゼンテーションする技術はまだ足りないように思った。今後、何度もそうした機会があると思うので、更なる飛躍を期待したい。

一方、修士論文（設計）では卒業研究に比べ、テーマを見つけアンケートやヒヤリング、文献調査から得られた基礎的資料の読み取りから表現力もさることながら、どのように展開し実現しようとしたか論理的構成力が求められる。地域や都市計画から建築単体までの計画を視野に入れた提案が主になっているが、様々な資料から一気に建築へと落とし込む力が弱いように思った。実務では建築を原寸でイメージする能力が求められるため、アウトプットは具体的な提案が求められるが、残念ながら建築としての新規性や力を感じることはできなかった。

また、論文は根気強く資料収集し、それらをテーマに沿って論理的に組み立て結論に導かなければならない。また発見的であることと社会的かつ歴史的な視座は当然であるが、発表を聞いていてフィールドワークではなく文献資料を主たる資料とした場合、デザイン同様に想像力がより必要とされるのではないかと考えた。

## 内田 青蔵

*Seizo UCHIDA*



2018年度の卒業設計・修士設計の発表を終えて感じた感想は、この数年感じていたこととおなじで、ほとんど変わらない。卒業設計に関しては、中には一生懸命頑張っているものもあり、好感がもてるものもあった。ただ、あえて言えば、そうした作品の中にも"昨年も同じような傾向のものがあったな－"、とか、よく描けているが基本となる図面が、“大まか過ぎて細部が見えない”、といったまだまだ完成に達していないのでは？と思えるものもあったように思う。その意味で、訴えるもの、心に響いてくるものが、殆んどなかったというのが率直な感想だ。誠に、残念である。

確かに、自分で課題を見つけ、その回答モデルを自ら示すというのは並大抵の作業ではないことは理解している。しかし、少なくとも、図面を見れば、問題意識の高さ、あるいは、建築への愛情の一端は見えてしまう。図面自体、その表現としての線が細くて力弱い余り、何を表現しようとしているのか、伝えようとしているのか、が読み取れないものさえある。

やはり、設計図面とともに設計前の問題の明確化、それに対するアプローチの仕方、設計のモデルの収集、問題への答え、こうした思考のプロセスを3・40枚程度の小論として提出してもらうことも必要ではないか？ そんなことも考えさせられた。

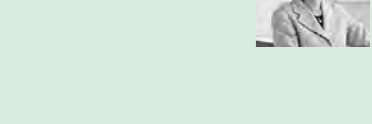
修士設計は、卒業設計と比べると、問題意識や何をしたいのかといった目的意識は理解できるし、表現も丁寧だ。しかしながら、今度は、そうした思考に縛られすぎて、迫力や面白さのないものとなっている。どこか、冒険しようという気持ちだけは忘れてはいけない気がするが、これも気になるところだ。

卒業論文も、迫力という点ではあまり、面白くない。500枚書いたといった強者が出てきてほしい。そんな迫力のなさという思いは、やはり共通して感じてしまう。

誰か、“出てこいや!”、最後にこの言葉を発して感想としたい。

## 山家 京子

*Kyoko YAMAGA*



今年度の卒業設計の感想は「見て回って楽しかった」である。どうにも薄い図面が多いのは相変わらず気がかりなのだが、テーマ、規模、用途、立地など多様性に富んでいたのはよかったと思う。都市型大規模高層複合建築もあれば、漁村にささやかで簡素な建築を分散配置したもの、歴史的背景をもつサイトを改修・増築により再生させる提案がある一方で、広場と一体化した駅を新たに計画した卒業設計らしい作品もある。近年の傾向に沿った、まちを読み解き、地域性をもつ建築を挿入する提案も多く見られたが、今年は海、川、用水など水辺の地区・街区が多かったように思う。そのほか、小説を建築化する手法や1960年代風のドローイングなど、懐かしさを感じさせる作品もあった。

一方、修士設計には物足りなさが残った。設計者の力量やセンスを感じさせるものもあるのだが、圧倒的な作業量のみが生み出せる迫力をもった作品には出会えなかった。

今年度は姜さんが博士論文を提出した。震災記念堂の建設プロセスから「日本趣味」の成立過程を明らかにしようとするもので、関連する図面をデータベース化するなど時間のかかる丁寧な作業を基に論を展開する意欲作であった。

卒業設計と修士論文（設計）の違いは、設計が上手くなることではなく、こうした時間のかけ方（その内容はテーマによって異なる）にある。修士論文（設計）においても、シャープな切り口やこねられたまとめ方だけではない、思考と作業にかけられた時間が透けて見えるような密実な成果を見てみたい。

## 曾我部 昌史

Masashi SOGABE



近年にも増して、特定の地域に根ざした社会的な課題への対応を手がかりとした提案が増えた。卒業設計、修士設計の両方に感じられる傾向である。高齢化対応、地域防災の推進、空き家対策、観光化推進、子育て支援、新ライフスタイル対応、地域コミュニティ再生などの定番的課題への対応が、それぞれになじみの深いエリアを対象地として展開する。この先、社会は多くの側面に変貌を重ねるだろうから、建築設計が対応すべきより多くの課題が顕在化するだろう。そういう意味では意義深いスタンスであることは間違いない。

一方で、そうした課題への対応をエクスキューズとしながら、見たこともないような建築提案となったものももっとたくさんあっていいと思う。向き合っている課題は新しく一筋縄ではいかないものばかりなのに、その回答として示される建築のようすは既視感のあるものにとどまっている。新しいものを創造することへの好奇心や野心をもつことが、何らかの社会的ムードが抑えているのかもしれない。既視感のある提案の範囲におさめることが、節度のある社会的に正しい提案だと考えているのかもかもしれない。より踏み込んで考えてほしい。より深く、より合理的に、諸課題への対応を検討したら、既視感のある建物のようすから大きく外れてしまうことがあってもいいではないか。もっといえば、そうっていないのは検討がそこまで踏み込めていなくて、設計者としての責任を十分に果たせていないものだといえないか。簡単では無いと思うけれど、そういうチャレンジングな提案に期待したい。

## 中井 邦夫

Kunio NAKAI



本編で詳しく紹介されているもの以外で個人的に印象に残った作品について触れておく。  
①卒業設計…向：まちに開かれた住宅のリサーチを踏まえ、既存住宅群を人々の住まいとしまま、まちの交流拠点とする意図や人間的なスケールには可能性を感じた。矢野：射水の漁師番屋に着目した視点は興味深く共感できたが、表現が追い付いていない印象。飯田：都市の寺院墓地を利用した学習施設のアイデアはユニークで模型も迫力があつたが、建物と基地の連携や具体的な活動内容の表現がやや足りなかったか。塚本：緑化された駅前広場の提案自体には可能性を感じたが、よくある人工地盤に頼りすぎず、もっと自然なかたちでの緑地と駅の融合を目指した方がいいと思えた。②卒業論文…いずれも興味深いテーマを含むものであった。なお例年同様の傾向だが、意匠系、計画系の論文が1編(設計B梗概を含めても5編)しかないのは若干寂しいと感じた。③修士論文…テーマはいずれも興味深くユニークであると感じた一方で、とくに制作的なものでは、目的とデザインとのつながりが理解できないものや、論理展開に無理や飛躍があるものが多いことが気になった。卒業設計であれ修士論文であれ、設計には多少なりとも詩的表現がないと、平板でつまらないものしかできないが、詩的表現と論理性は矛盾しないどころか、ある目的に対して徹底的に突き詰める論理がないところに、詩的表現が生まれるはずもない。だから大学では、とにかく徹底的に論理的につきつめることを学ぶべきと痛感した。

## 卒業論文

|  |        |
|--|--------|
| 横浜競馬場の変遷<br>J・H・モーガンの設計を中心に                                      | 金沢 拓弥  |
| 雑誌「住宅」からみた日本の民家に関する一考察<br>戦前から戦時中における民家と民芸運動の関連性について             | 松林 慶樹  |
| 2代目横浜税関（1885-1923）の建設経緯について                                      | 大平 佳奈  |
| RIA山口文象による神奈川大学総合計画に関する研究<br>〈庭園空間〉の分析を通して                       | 佐藤 正樹  |
| 辞書から見る「茶の間」の変遷<br>明治期～平成期刊行の辞書を主資料として                            | 朝長 恵   |
| ◎明治時代から大正時代中期のわが国の住宅における「ガラス建具」の普及について<br>「ガラス建具」が与えた日本住宅の変化を中心に | 長谷川 政平 |
| 長野県川上村の民家研究<br>林家住宅の生業による生活空間の変容                                 | 林 遼太郎  |
| 長屋形式防火帯建築における立面構成  | 渡辺 悠介  |
| 建築家アントニン・レーモンドの設計理念に関する一考察<br>自らの言説の分析を中心に                       | 下山 美月  |
| 上海で活躍した建築家平野勇造に関する研究<br>旧上海日本領事館を中心に                             | 森屋 壮平  |

## 卒業設計【設計A】

|  |          |
|--|----------|
| 湯編む<br>羽田空港隣接地における銭湯を軸とした交流拠点                | 鳴原 磨音    |
| 音楽のカタチ<br>曲の分析の仕方                            | 中村 憲翔    |
| ○文架創庫の搭乘口<br>都市におけるオフィスと大学施設の国際的交流の提案        | 宮本 彩加    |
| 家並み<br>子どもの第2の家としての保育園                       | 石渡 裕貴    |
| ○Les Misérables 悲慘の消去<br>小説の空間的性質と多角的視点の読み解き | 磯部 雅彦    |
| ○猫になる<br>猫の習性を利用した建築デザインの提案                  | 井手 遥奈    |
| 久里浜港フェリーターミナル再生<br>フェリーターミナルで生まれる交流          | 今泉 キャメロン |
| 岸根公園改修計画<br>地域に開放した、自然に寄り添える新しい公園の提案         | 小田部 ひとみ  |
| ◎漣ノ再興<br>大船渡市三陸町「崎浜」の復興とその先を考える              | 掛川 真乃子   |
| 時世の寄せ舞台<br>山間地域における集落コミュニティの再編               | 岸本 紗英    |
| 共存し合う福祉と商業<br>元気の維持・向上を目指す商店街福祉施設の提案         | 黒澤 知也    |
| ◎混沌する聖域<br>インターフェイスの再考と豊洲移転に対する築地改修案         | 齊藤 健太    |
| 大規模スケールからヒューマンスケールへ                          | 坂上 千紘    |
| ★日常をつなぐ架け橋<br>東南海地震を想定する事前復興計画               | 佐塚 将太    |

|  |        |
|--|--------|
| まゆ玉<br>富岡製糸場周辺の地域活性化と観光振興                                | 下田 真白  |
| 積み重ねる場所<br>ヒト・モノ・コトを繋ぐ場の提案                               | 杉山 陽愛  |
| 人が繋がり輪をなす道<br>プロムナードによる交流の場の提案                           | 高橋 愛朗  |
| ◎水面に添う<br>まちと水と人の関係性を再構築する集合住宅の提案                        | 永盛 栞   |
| 多世代をつなぐ家<br>土間をもつ集合住宅の提案                                 | 西野 早映  |
| ◎空隙の秋葉原<br>都市部における建築更新のあり方                               | 前田 沙希  |
| ○まちの番屋<br>漁業を通じて地域とつながる場の提案                              | 矢野 新   |
| 滞在と繋がり<br>駅前広場と美術館の提案                                    | 山口 雄也  |
| 保護動物と人を繋ぐ、新しい動物愛護センターの提案                                 | 山本 拓実  |
| ○移ろいゆく水景<br>河川舟運と生きるもうひとつの暮らしかた                          | 市毛 淳也  |
| よりみち<br>外で遊ぶきっかけをつくる遊び場の提案                               | 井上 弘貴  |
| 動物と人の共存するゲストハウス<br>猫を介した観光客と地元住民の交流空間の提案                 | 井上 梨緒  |
| 大口商店街改修計画<br>多世代が利用できる商店街に                               | 岩崎 雄太  |
| 世代を超えて<br>交流生む幼老複合施設                                     | 内田 優衣  |
| 間の在り処<br>発達障がい者のための支援施設の提案                               | 大塚 二葉  |
| 「粋」を宿す燈<br>日本橋の文化観光股賑宿場の提案                               | 大場 啓太  |
| 空間×世代の連続<br>社会との接点を持ち続けられるサービス付き高齢者向け住宅の提案               | 岡本 優   |
| 新たな感動を呼ぶスタジアムの提案<br>山梨県甲府フットボールパーク計画                     | 小尾 悟   |
| 自然と共に暮らす<br>鴨川市の豊かな自然を利用した暮らし方の提案                        | 岸 由香里  |
| Constitute pedestrian space<br>ウォーターフロントの商業建築における歩行空間の提案 | 久保田 治樹 |
| とおりみち<br>島全体を魅せる博物館の提案                                   | 小嶋 咲和  |
| 広げていく<br>人々のつながりを生み出すゲストハウスの提案                           | 佐々木 宏侖 |
| 第2の故郷<br>早期復興を目指す仮設住宅の提案                                 | 佐藤 梨奈  |
| 積層する都市の”滞在”空間<br>道玄坂における新たな交流拠点の提案                       | 鈴木 敦也  |
| まちの駅<br>人口減少抑制のための地域公民館のあり方                              | 鈴木 健留  |

★ディプロマ賞 ◎優秀賞 ○卒業設計優秀作品発表会発表者

卒業設計【設計A】

|  |         |
|--|---------|
| ○ まろうどの家<br>動物由来の建築用語を応用した神社付属施設の設計                      | 鈴木 啓生   |
| ○ The garden with a railway<br>住宅都市新小岩における緑ある駅の再構築       | 塚本 裕士   |
| 結道<br>沼津港の新しい居場所の提案                                      | 中山 実穂   |
| 祝福と承認<br>性的少数者に寄り添った結婚式場の提案                              | 成岡 拓哉   |
| 言語の共有化<br>福生市における集合住宅の提案                                 | 西田 建太   |
| ◎ UDAGAWA PASTIMISM<br>都市の街区内におけるヴォイドと既存設備を利用した都市公共空間の提案 | 長谷川 舞   |
| 追憶の表象<br>都市における火葬場墓地の提案                                  | 原 巧     |
| 木の学び舎<br>鎌倉で大工技術を継承する学び舎の提案                              | 広沢 拓人   |
| 鯨背の集積と骨格<br>準工業地域における新たな職住一体の提案                          | 福濱 準也   |
| 四季折々のよしみち<br>道の先から紡がれるもの                                 | 松尾 祐奈   |
| 商店街と繋がる<br>通りと連動した店舗複合型住宅の提案                             | 村岡 あんじん |
| 都市における高齢者の居場所の提案<br>地縁的つながりの形成                           | 横山 優莉菜  |
| 共生車廻<br>自動運転時代の到来による駅前空間の再編成                             | 吉川 陽樹   |

卒業設計【設計B】

|   |        |
|---|--------|
| ○ まちにひらかれた住まい<br>公開領域と構えからみる家びらきを行う住宅の空間構成              | 向 咲重   |
| エコミュージアムとしての福井野外恐竜博物館拡張計画<br>アソシアシオンの活動を踏まえたエコミュージアムの構成 | 目代 浩樹  |
| ○ 寺院を拠点とした学習施設の提案<br>都市の寺院墓地における接道と参道によるまちとの関係          | 飯田 康二郎 |
| 駅空間による音環境   | 小田 香緒里 |

設計A: 建築物あるいは都市計画など、各自の独自の視点による設計。テーマを各自が自由に設定。

設計B: 都市計画・開発計画などについての計画書、または建築や都市に関する特定のテーマについての調査分析報告、および設計図面の作成。

★ディプロマ賞 ◎優秀賞 ○卒業設計優秀作品発表会発表者



学部設計課題 優秀作品

建築デザインⅢ

建築デザインⅡ

建築デザインⅠ

設計製図Ⅱ

設計製図Ⅰ

非常勤講師



アリソン 理恵  
Rie ARISON

一級建築士事務所teco



井原 佳代  
Kayo IHARA

ihrmk一級建築士事務所



岡村 晶義  
Akiyoshi OKAMURA

一級建築士事務所アトリエ鯨



川辺 直哉  
Naoya KAWABE

川辺直哉建築設計事務所



木島 千嘉  
Chika KIJIMA

木島千嘉建築設計事務所



佐々木 龍郎  
Tatsuro SASAKI

佐々木設計事務所



鈴木 信弘  
Nobuhiro SUZUKI

鈴木アトリエ一級建築士事務所



八島 正年  
Masatoshi YASHIMA

八島建築設計事務所



渡瀬 正記  
Masanori WATASE

一級建築士事務所設計室



## 担当

曾我部 昌史（教授）、吉岡 寛之（助教）、岡村 晶義（非常勤講師、アトリエ鯨）、佐々木 龍郎（非常勤講師、佐々木設計事務所）、渡瀬 正記（非常勤講師、設計室）

Masashi SOGABE (Professor), Hiroyuki YOSHIOKA (Assistant Professor), Akiyoshi OKAMURA (Guest Lecturer, Atelier KUJIRA), Tatsuro SASAKI (Guest Lecturer, SASAKI ARCHITECTS & ASSOCIATES), Masanori WATASE (Guest Lecturer, an office)

馬鳥 夏美 (M1, TA)、諸橋 克哉 (M1, TA)、佐塚 将太 (B4, SA)、前田 沙希 (B4, SA)

Natsumi BATORI (M1, Teaching Assistant), Katuya MOROHASHI (M1, Teaching Assistant)  
Shota SAZUKA (B4, Student Assistant), Saki MAEDA (B4, Student Assistant)

## 総評

二つの複合建築の課題である。いずれも、プログラムを組み立てるところから手がけ、複雑な構成の検討をし、構造や動線を立体的に解く必要がある。粘り強くエスキスを重ねなければ正しく計画をまとめることはできない。

第一課題では、展示、待合所など多様な場の関係のつけ方が鍵となる。そのためには、地下鉄駅出入口、遊歩道のある水路、街のようすなどに広く目を向け検討を重ねる必要がある。坂本くんの提案では、そういった周辺の文脈に丁寧に対応をしながら、結果としてダイナミックな場の提案につながっている。トレミュロさんの提案では、おおらかな立体公園(人工地盤)のような空間にキューブ(仮設的な場)を配置することで有機的に周辺との関係がとられる。

第二課題では、各人がこの先の暮らし方の多様化に対して意識を開き、新たな建築空間の構想へとつなげる必要がある。良好な居住環境を考えることも重要である。この年度から、より積極的な提案に期待をして、敷地を各人が選定する方法をとった。三浦くんの提案で特徴的なのは林立する壁柱である。壁柱を手がかりにすることで暮らしの場のスケール感が調整される。山本さんの提案では開口部のデザインにより異なる場の関係が生み出される。建築の佇まいが暮らし方の印象を発信している。

授業回数の変更にも関連して、提出方式を変更した。優秀作品の多くがより検討の深まったものとなったようである。(曾我部)

## 非常勤講師 経歴

岡村 晶義  
Akiyoshi OKAMURA

1954年生まれ、早稲田大学産業技術専修学校(現早稲田大学芸術学校)卒業、teamzooアトリエモビル及び象設計集団を経て独立、アトリエ鯨を設立、東京理科大学非常勤講師及び法政大学兼任講師を経て現在に至る。日本建築学会作品選奨、土木学会デザイン賞など受賞

佐々木 龍郎  
Tatsuro SASAKI

1964年生まれ、1987年東京都立大学(現首都大学東京)工学部建築学科卒業、1989年同大学院修士課程修了、工学修士、1992年同博士課程満期退学、1992年(株)デザインスタジオ建築設計室、1994年株式会社佐々木設計事務所入社、現在同代表取締役

渡瀬 正記  
Masanori WATASE

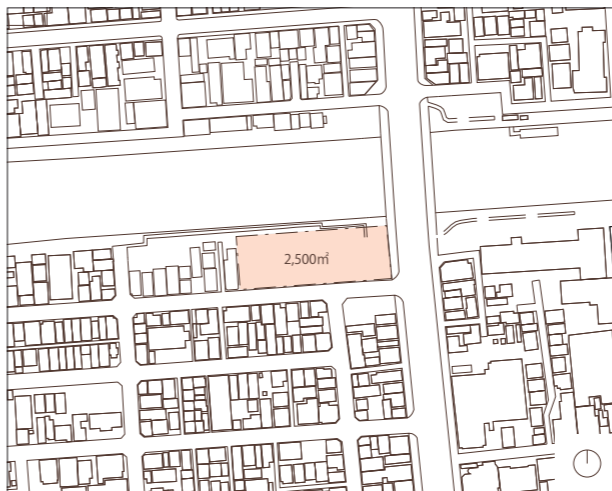
1968年生まれ、1992年東京工業大学工学部建築学科卒業、1992年妹島和世建築設計事務所勤務、1993年～1997年青木淳建築計画事務所勤務、1998年一級建築士事務所設計室設立

## 第一課題 街のインフォメーションセンター

地域に暮らす人たちの居場所(地域の居場所)と、観光などで訪れる人たちの拠点的な場(来訪者の拠点)のコンプレックスである。「地域の居場所」では、地域調査をもとに課題や需要を抽出した上で、どのような場をつくるかを各人が構想すること。この先の公民館のあるべき姿を考えることにもなるだろう。「来訪者の拠点」はいわば観光案内所だが、事例調査などをもとに今日的な役割を踏まえながら用途をまとめる必要がある。「地域の居場所」と「来訪者の拠点」が単に併設されているのではなく、相互補完的に計画することで、より多様で豊かな活動の受け皿となるよう検討し提案にまとめること。

敷地は、地下鉄駅、船着場、幹線道路に面する交通の結節点にある。それらとの関係を動線として解きながら、建物内のいろいろな場とのつながりかたを検討する。利用者、時間帯などにも意識をしながらまとめる必要がある。

【設計条件】 敷地：東京都江東区清澄3丁目  
用途地域：準工業地域、商業地域 敷地面積：2,500㎡  
地下階を設け地下鉄駅とつなぐこと。  
延床面積は4,000㎡～6,000㎡。地上部分は3層以上とする。



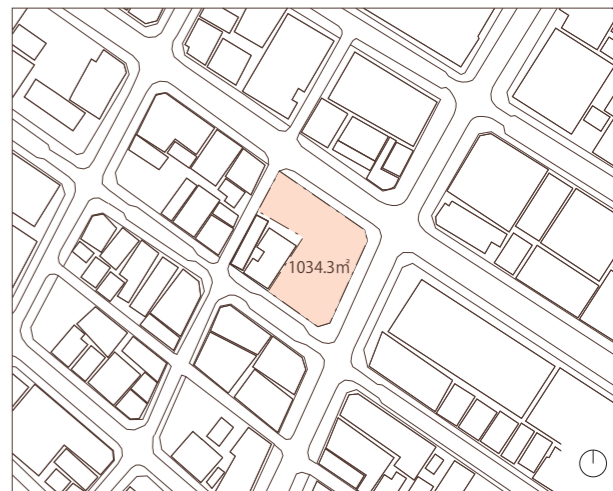
## 第二課題 50人が暮らし50人が泊まれる、この先の暮らしの場

共に暮らすことで自分の好みにあった豊かな時間が生み出される、そういう住空間を提案すること。

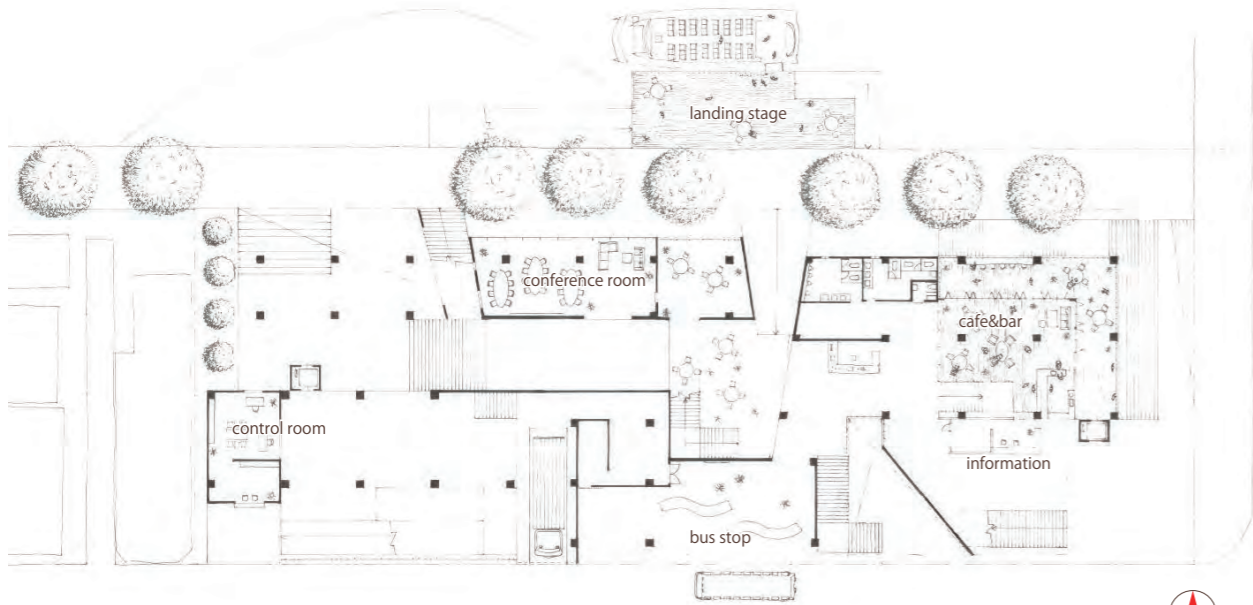
この建物は、住まいの場所とこの場所での暮らしを特徴付けるサービスの場所とで構成され、住まいの場所は、賃貸住宅部分と宿泊施設部分にわけられる。共通のライフスタイルや必要とするサービスにより特徴付けられる50人の住まいがあり、その暮らしに関連した共用スペースやサービス系施設が特有の雰囲気を生み出し、その雰囲気が宿泊客や地域の人たちにアピールする。単に、賃貸住宅、宿泊施設、サービス関連施設とが固まってあるものではなく、それぞれが有機的に関係を持つことで、何らかの特徴的な雰囲気を備えた居場所が生み出されるような計画を構想しなければならない。

敷地は関内地区の中央にある。歴史的背景や現状の周辺状況についての調査をもとに、計画に反映させること。

【設計条件】 ※参考敷地(敷地は関内エリアから自由に選定する)  
敷地：神奈川県横浜市中区太田町5丁目  
用途地域：商業地域 敷地面積：約1034.3㎡  
延床面積は4,500㎡～5,500㎡。地下を設ける場合は1層まで。道路斜線制限、高さ制限は厳守。



坂本 理久  
Riku SAKAMOTO  
下町の流れを味わう  
feeling the flow of Shitamachi



1F plan

トレミュロ 香炉 栄 雪  
Chloe Yuki TREMUREAU  
立体的公園  
three-dimensional park



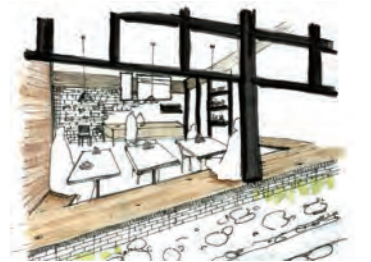
街全体が静かで流れが止まっているかのようだった。  
街がまた活気ができるような場を作りたい。  
観光という場があまりないが、イベントなど多く、江戸からの歴史もあるこの地域に  
新しい活気ある“流れ”を作るため川の流れを建物全体に入れる建物を提案したい。



内部のキューブ（屋台）の様子



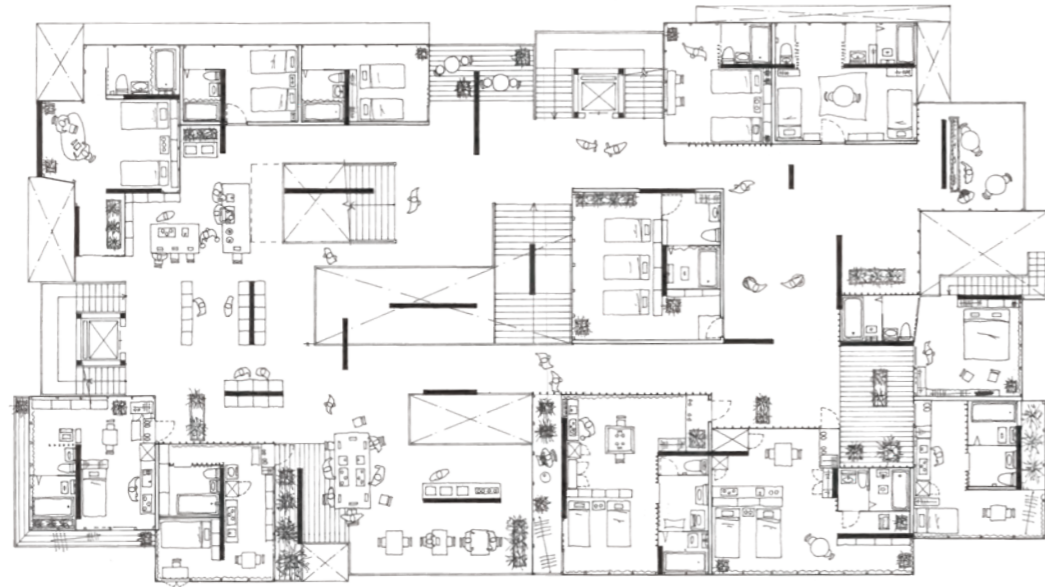
キューブ（屋台）以外は解放された空間



三浦 悠介  
Yusuke MIURA

ADD TO DAILY LIFE ~壁に絡みつくことで制限されない暮らしの提案~  
add to daily life ~proposal of life that is not limited by entangling on the wall~

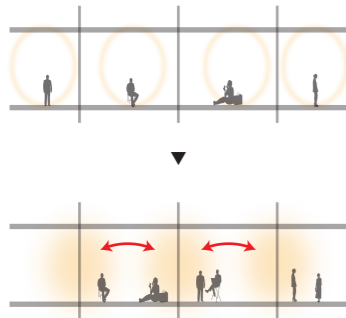
体験や感情の共有と選択できることが感性や思考を豊かにすることで人は豊かになる



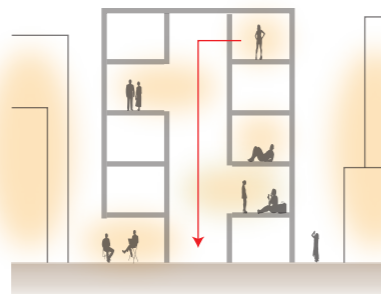
4F FloorPlan S=1/300

Diagram

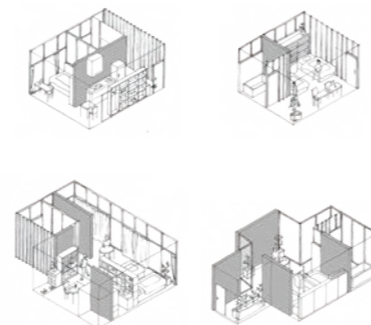
1 壁の位置どりで自室で完結しない暮らしへ



2 動線が豊かな空間になることで生活全体が豊かに



Proposal of room

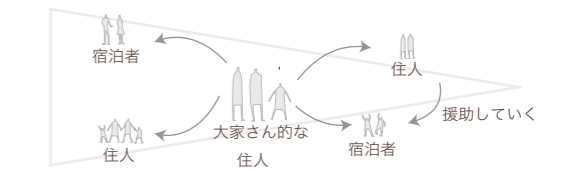


山本 麻貴  
Maki YAMAMOTO

地域をつなぐ窓たち  
Regions hold windows.

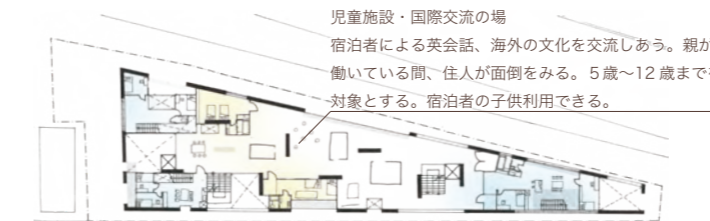


地域の人が使える公共施設が少ない吉田町に、  
誰でも使える公共的な施設をもちながら、  
各フロアーの住民による趣味から展開された共有ベースを持つ、  
住人を軸とした地域に溶け込む集合住宅兼宿泊施設を計画する。



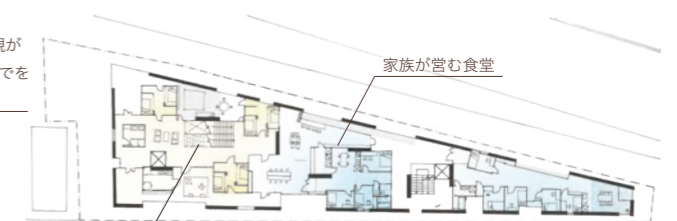
フロアーごとの用途

- |                      |                  |
|----------------------|------------------|
| 1F BOOK STORE        | 5F 子供関連施設・国際交流の場 |
| 2F カフェテリア・宿泊者用エントランス | 6F 食堂            |
| 3F カフェテリア・住人用エントランス  | 7F 子供関連施設        |
| 4F 子供関連施設・国際交流の場     | 8F ワインバー・陶芸教室    |



児童施設・国際交流の場  
宿泊者による英会話、海外の文化を交流しあう。親が働いている間、住人が面倒をみる。5歳~12歳までを対象とする。宿泊者の子供利用できる。

4階平面図 S=1/1000



家族が営む食堂

ゲストハウス 6階平面図 S=1/1000



断面図 S=1/500

## 担当

石田 敏明（教授）、曾我部 昌史（教授）、田野 耕平（助手）、木島 千嘉（非常勤講師、木島千嘉建築設計事務所）、八島 正年（非常勤講師、八島建築設計事務所）

*Toshiaki ISHIDA (Professor), Masashi SOGABE (Professor), Kohei TANO (Assistant Professor), Chika KIJIMA (Guest Lecturer, Kijima architect and associates), Masatoshi YASHIMA (Guest Lecturer, Yashima architect and associates)*

小田 凌大朗（M1、TA）、早川 史洋（M1、TA）、掛川 真乃子（B4、SA）、齋藤 健太（B4、SA）

*Ryotaro ODA (M1, Teaching Assistant), Fumihiko HAYAKAWA (M1, Teaching Assistant), Manoko KAKEGAWA (B4, Student Assistant), Kenta SAITO (B4, Student Assistant)*

## 総評

第一課題は「六角橋ミニシアターコンプレックスと広場」で白楽駅前のかつて白鳥座という映画館があった角地を敷地としている。この課題では限られた敷地の中で要求された機能を断面的に構成することと人の流れを読み取り、街に開かれた駅前活性化のための拠点としての施設を求めた。上位のいずれの案も積層された断面計画と複合用途との関係性、地域活性化のための発信拠点としての街への開き方の巧さが評価されたが、建築の部分と全体の関係性への視座がやや希薄であった思う。

第二課題の「地域に開かれた中学校」は横浜キャンパスに近い住宅地の中にあり、地形にかなりの高低差がある造成前の松本中学の敷地である。この課題では住宅地との関係性（境界のデザイン）、斜面地における施設配置（斜面と建築の擦り合わせ）、建築計画（教科教室型）、外構計画（環境デザイン）、アクティビティのデザインなど多岐にわたっている。生徒の居場所とアクティビティ、スケールの把握、移動を伴うシークエンスデザインと外構デザインなど空間秩序を保ちつつ総合的にデザインされた提案が上位に選ばれている。

二つの課題は規模や用途が異なる内容であるが、建築をオブジェクトとしてみるのではなく、如何に空間をイメージして提案するかが今後の課題であると思う。

（石田）

## 非常勤講師 経歴

木島 千嘉  
*Chika KIJIMA*

1966年生まれ、1989年早稲田大学理工学部建築学科卒業、1991年東京工業大学大学院修士課程修了、1991年(株)日建建設入社、1999年O.F.D.A associates所属、2001年木島千嘉建築設計事務所設立

八島 正年  
*Masatoshi YASHIMA*

1968年生まれ、1993年東京芸術大学美術学部建築科卒業、1995年東京芸術大学大学院美術研究科修士課程修了、1998年八島正年+高瀬夕子建築設計事務所共同設立、2002年八島建築設計事務所に改称

## 第一課題 六角橋ミニシアターコンプレックスと広場

白楽駅前に広場と一体となった積層型のシネマコンプレックスの計画である。渋谷のシネマライズ閉館に代表されるようにミニシアターは徐々にその姿を消しつつあり、映画を鑑賞する環境や映画鑑賞前後の空間体験は均質化しつつある。本課題では気持ちの高まりや余韻を受け止める空間を計画すること。駅前の場所性や商店街との補完関係を考慮し、計画する建築が地域にとってどのような役割を果たすことができるのかを広場を含めて積極的に提案すること。また周辺環境（計画地北側には集合住宅がある）にも十分に配慮すること。地域の核となる建築のデザインを要求している。

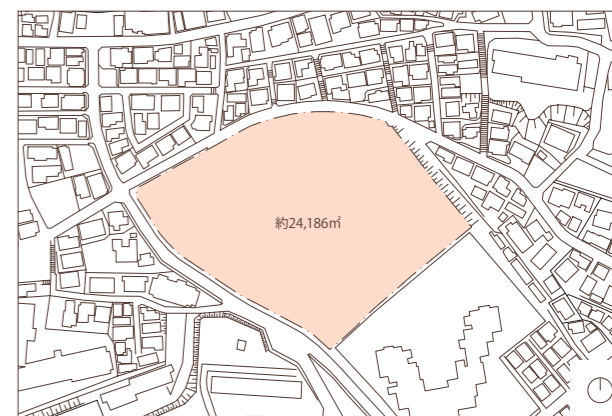
【設計条件】 敷地：神奈川県横浜市神奈川区白楽124  
面積：約855㎡  
建ぺい率：80% 容積率：400%



## 第二課題 地域に開かれた中学校

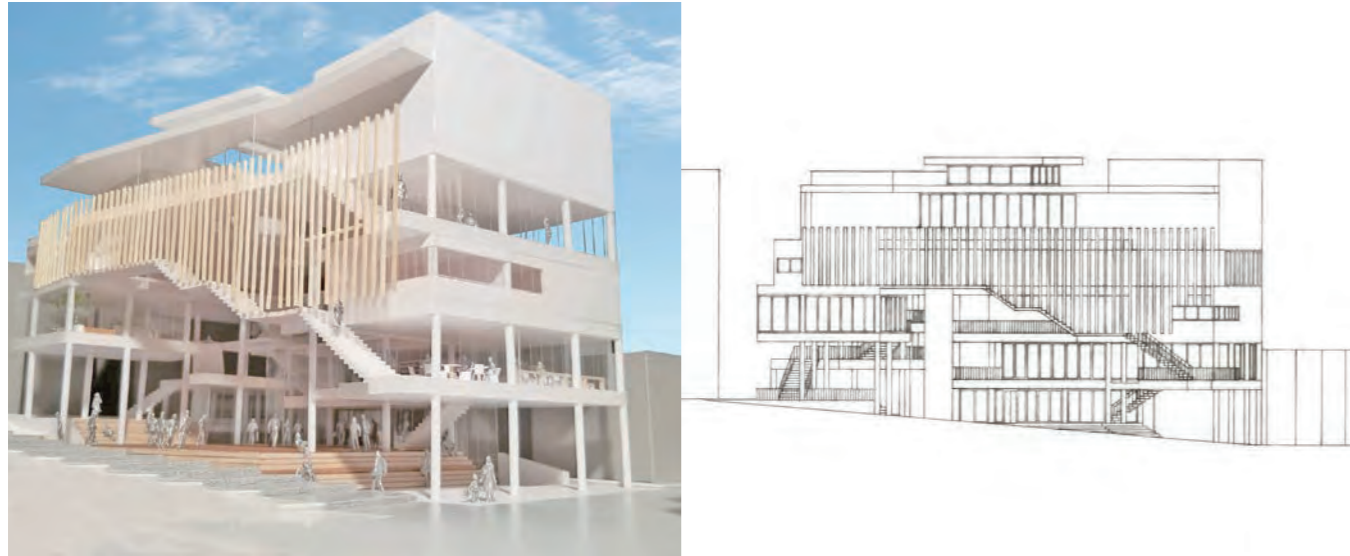
神奈川区の住宅地に隣接する中学校の計画である。地域支援施設を持つ中学校とし、生徒の見守りなど地域に開くことで生まれる地域住民と学生・教職員との関係性を積極的に取り入れた中学校計画とした。敷地は横浜の特徴的地形である高低差のある谷戸地形の中に位置し、周囲は戸建住宅、公団住宅、分譲マンションなどが取り囲んでいる。傾斜面の地形を積極的に取り込みつつ周辺状況に呼応した、場所性をよく読みだしたサイトプランニングと学生のアクティビティデザイン、環境デザインを心がけることが求められた。

【設計条件】 敷地：神奈川県横浜市神奈川区三ツ沢下町30-1  
三ツ沢下町30-1 面積：約24,186㎡  
建ぺい率：60% 容積率：150%



三浦 悠介  
Yusuke MIURA

SERENDIPITY ~偶然に素晴らしいものに出会う~  
SERENDIPITY ~Meet with those accidental nice~



加藤 佑規  
Yuki KATO

丘に芽生える  
Sprouts in the hill



金谷 優汰  
Yuta KANAYA

空中散歩 ~溜まり場達~  
Air walk ~gathering spots~



坂本 理久  
Riku SAKAMOTO

学び、ふれあい、そして忘れ得ぬ  
Learning, Meeting and Reminding



## 担当

山家 京子（教授）、石田 敏明（教授）、吉岡 寛之（助教）、 田野 耕平（助手）、アリソン 理恵（非常勤講師、teco）、川辺 直哉（非常勤講師、川辺直哉建築設計事務所）

*Kyoko YAMAGA (Professor), Toshiaki ISHIDA (Professor), Hiroyuki YOSHIOKA (Assistant Professor), Kohei TANO (Assistant Professor), Rie Arison (Guest Lecturer, Yashima architect and associates), Naoya KAWABE (Guest Lecturer, NAOYA KAWABE ARCHITECTS)*

金井 賢三（M1、TA）、竹島 大地（M1、TA）、永盛 栞（B4、SA）、宮本 彩加（B4、SA）

*Kenzo KANAI (M1, Teaching Assistant), Daichi Takeshima (M1, Teaching Assistant), Shiori NAGAMORI (B4, students Assistant), Ayaka MIYAMOTO (B4, students Assistant)*

## 総評

本科目は、小・中規模施設の設計課題を通して、建築を成立させる計画的な基礎を学ぶとともに、自らが設定したテーマを建築化する方法の修得を目標としている。本年度は2つの課題でいずれも建築のプログラム及び空間構成において、周辺環境との関わりを意識したデザインを促している。第二課題では、年内は図面のみを提出、年明けに模型とプレゼンテーションボード1枚を提出させ、それぞれ採点を行なった。

第一課題「関内に建つオフィス」は関内に8層程度の本社ビルを計画する課題である。林さんは不規則な斜めの柱により、不均質さが多様な空間を生み出すような建築を構想した。立田さんは3つのエリアを立体的に構成した精度の高いデザインを提案した。第二課題「公園の一角に建つ地域図書館」では、図書館の建築計画を丁寧に解きながら、かなりのヴォリュームを占める開架図書室をどう扱うかが鍵となる。鈴木さんはハコを敷地全体にバラバラに配置し折れ曲り屋根で包み込むデザインで、公園に新たな風景を創出した。谷本さんは公園のなだらかな地形を取り込むスロープを中心に構成し、微妙なバランス感覚で整えた建築を提案した。（山家）

## 非常勤講師 経歴

アリソン 理恵  
*Rie ARISON*

1982年生まれ、2005年東京工業大学工学部建築学科卒業、2009年NMBW(オーストラリア)にてインターンシップ、2011年東京工業大学大学院博士課程単位取得退学、2011年～2015年一級建築士事務所ルートエー勤務、2014年～2015年アトリエ・アンド・アイ坂本一成研究室勤務、2015年一級建築士事務所teco設立

川辺 直哉  
*Naoya KAWABE*

1970年神奈川県生まれ、1994年東京理科大学工学部建築学科卒業、1996年東京芸術大学大学院修士課程修了、1997 -2001年、石田敏明建築設計事務所、2002年川辺直哉建築設計事務所設立、現在 東京理科大学、法政大学、芝浦工業大学、東京電機大学にて非常勤講師

## 第一課題 関内に建つオフィス

横浜市関内地区にオフィスを計画せよ。

近年、まちに開く建築が話題となっています。住宅の一部を交流の場やまちかど図書室とする「住み開き」、集合住宅の共用施設を居住者だけでなく地域にも開放する、小学校に地域施設を併設する、など。これらはこれまでコミュニティ施設が担ってきた機能を、それ以外の施設が地域と部分的にシェアすることで、自らの機能をより充実させるものです。コミュニティ活性化を図るとともに、それぞれの生活の豊かさにもつながる方向性と言えます。一方、オフィスはセキュリティの観点から、入り口にゲートを設けるなど、どちらかというと閉じていく傾向にあります。しかし、オフィスもまた開くことによって、イノベーションを起こすことが期待されています。ここでは、空間的にもプログラムのにも、社会、地域に対して開かれたオフィスの提案を求めます。

【設計条件】 敷地：神奈川県横浜市中区住吉町3丁目  
面積：約565㎡  
建ぺい率：80% 容積率：700%



## 第二課題 公園の一角に建つ地域の図書館

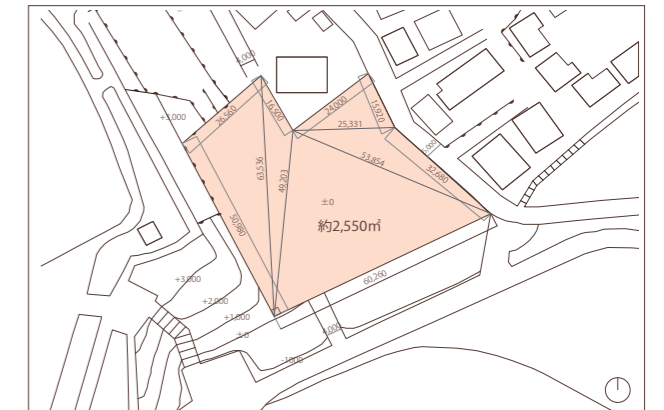
岸根公園に面する敷地に地域図書館を計画せよ。

図書館は「知識資源の管理と新しい知識創造の場」である。インターネットの普及を背景に本との関わりが変わりつつある現代において、書籍の保管・管理と閲覧という図書館の基本的機能を満たしつつ、図書館の今後の在り方について考えること。

一方、地域図書館は中央図書館等大規模図書館を縮小した施設ではなく、コミュニティ施設としての機能が求められている。コミュニティ施設は、住民が自発的な意思により行う地域独自の活動を支援するとともに、住民同士の交流を促進する場である。

周辺の都市空間構成を読みとり、岸根公園との空間的つながりを意識し、地域の人たちが本に親しみながら、地域交流を図る「地域の図書館」を計画しなさい。

【設計条件】 敷地：神奈川県横浜市中区住吉町7丁目  
面積：約2,550㎡  
建ぺい率：60% 容積率：100%



関内に建つオフィス

公園の一角に建つ地域の図書館

立田 大喜  
Daiki TATSUTA

コウサスル  
Kosasuru



檜原 杏奈  
Anna NARAHARA

まちのキッチン  
Kitchen of town



井口 翔太  
Shota IGUCHI

軒を連ねる  
Stand side by side



谷本 優斗  
Yuto TANIMOTO

山路を登りながら  
While climbing a mountain road



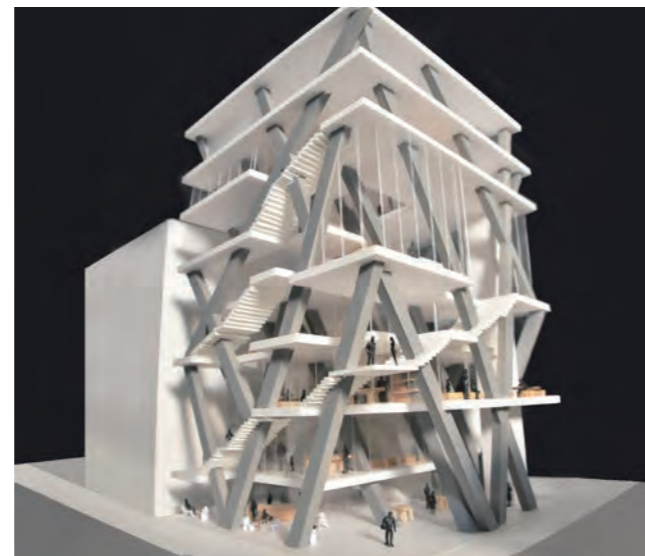
菅野 麻衣子  
MaiKO SUGANO

風を生む  
Create a wind



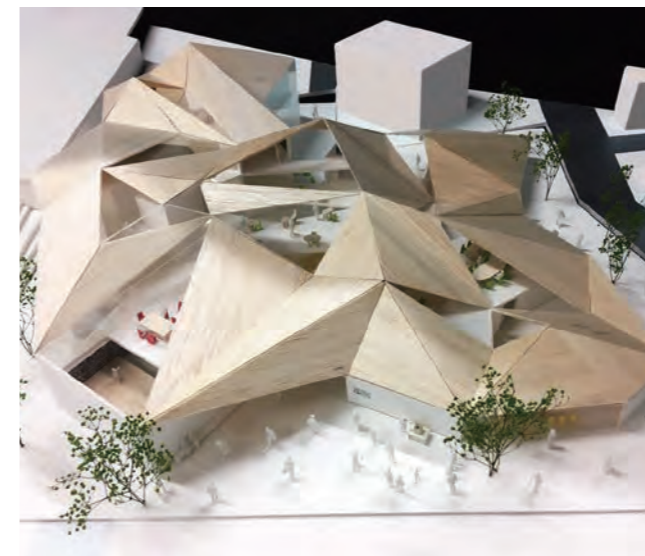
林 眞太郎  
Shintaro HAYASHI

交わる  
Intersect



鈴木 碧衣  
Aoi SUZUKI

soto-uchi library  
soto-uchi library



平 遼太  
Ryota TAIRA

居場所  
Place to stay



担当

中井 邦夫 (教授)、吉岡 寛之 (助教)、上野 正也 (助教)、  
須崎 文代 (助教)、鈴木 信弘 (非常勤講師、鈴木アトリエ)、  
井原 佳代 (非常勤講師、ihrmk一級建築士事務所)

Kunio NAKAI (Professor), Hiroyuki YOSHIOKA (Assistant Professor), Masaya UENO  
(Assistant Professor), Fumiyo SUZAKI (Research Associate), Nobuhiro SUZUKI (Guest  
Lecturer, Suzuki Atelier), Kayo IHARA (Guest Lecturer, ihrmk Architects)

担当TA,SA

枝川 和樹 (M2、TA)、須山 高志 (M2、TA)、丹羽 貴行 (M2、TA)、  
中村 圭那 (M1、TA)、飯田 康二郎 (B4、SA)、小田 香緒里 (B4、SA)

Kazuki EDAKAWA (M2, Teaching Assistant), Takashi SUYAMA (M2, Teaching  
Assistant), Takayuki NIWA (M2, Teaching Assistant), Keina NAKAMURA (M1, Teaching  
Assistant), Kojiro IIDA (B4, Student Assistant), Kaori ODA (B4, Student Assistant)

授業内容

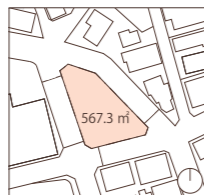
- 1) トレース課題 1「萩塚の長屋」 (設計: 藤野 高志) (鉛筆書き 1/100)
- 2) 模型製作課題 1「萩塚の長屋」 (模型 1/100)
- 3) 設計課題 1 (下記参照)
- 4) トレース課題 2 「神奈川大学 6 号館」 (設計: RIA)
- 5) 設計課題 2 (下記参照)

第一課題 提案型集合住宅

住宅地内の敷地に、老夫婦のオーナーが所有し様々な世代の居住者とともに住む集合住宅を計画する。敷地は、四周で道路に面する三角形の区画であり、公園のそばに立地で、商店街にも近い。敷地周辺の条件を最大限に活かしながら、この場所に住む様々なタイプの世帯それぞれの生活像を具体的にイメージすると同時に、そうした個性の異なる複数の居住者が住む集合住宅ならではの楽しい提案/空間を求める。

【設計条件】

敷地: 神奈川区西神奈川3-9-16  
構造形式: 鉄筋コンクリート・壁式構造  
地域・地区: 市街化区域、第1種住居地域  
防火地域: 準防火地域 敷地面積: 567.3㎡  
建ぺい率: 70% / 積率: 200%



第二課題 神大ミュージアム・パーク

神奈川大学 18 号館および 21 号館の敷地に、ホールと宮陵会 (神奈川大学OB会) 事務局を含むインフォメーション・センターを設計する。敷地は、大学と住宅地との境界部に位置する緩やかな傾斜をもった角地であり、大学キャンパス・マスタープランにおいて、16 号館と共に大学の「ゲート・ゾーン」と位置づけられており、大学の対外的な顔となる空間となることが期待されている。多様な活動を含み込む可能性を最大限引き出す提案を求める。

【設計条件】

敷地: 神奈川区六角橋3丁目 防火地域: 準防火地域  
地域・地区: 第二種中高層住居専用地域  
構造形式: 鉄筋コンクリート・ラーメン構造  
敷地面積: 1017.6㎡ 建ぺい率: 70% (法定は60%) 容積率: 150% (最大)



提案型集合住宅

酒井 優人

Yuto SAKAI



まがり  
Magari

林 淳平

Junpei HAYASHI



有機的な集合住宅  
Organic collective housing

山崎 優衣

Yui YAMASAKI



oasis  
Oasis

神大ミュージアム・パーク

遠藤 麻理奈

Marina ENDO



UNEVENNESS  
UNEVENNESS

日下 紗菜

Sana KUSAKA



繋がる  
Connect

谷本 優斗

Yuto TANIMOTO



巡る  
Meguru

中澤 実那

Mina NAKAZAWA



浮かぶ箱  
Floating box

榎原 杏奈

Anna NARAHARA



内と外+その間  
Inside and out + between them

福士 詩織

Shiori FUKUSHI



学びの風  
Wind of learning



担当

中井 邦夫 (教授)、上野 正也 (助教)、田野 耕平 (助手)、  
須崎 文代 (助教)、鈴木 信弘 (非常勤講師、鈴木アトリエ)、  
井原 佳代 (非常勤講師、ihrmk一級建築士事務所)

Kunio NAKAI (Professor), Masaya UENO (Assistant professor),  
Kohei TANO (Research Associate), Fumiyo SUZAKI (Research Associate),  
Nobuhiro SUZUKI (Guest Lecturer, Suzuki Atelier),  
Kayo IHARA (Guest Lecturer ihrmk Architects)

原山 雅也 (M2, TA)、下山 智加 (M2, TA)、東田 萌 (M2, TA)、  
中村 圭那 (M1, TA)、長谷川 舞 (B4, SA)、渡辺 悠介 (B4, SA)

Masaya HARAYAMA (M2, Teaching Assistant), Chika SHIMOYAMA (M2,  
Teaching Assistant), Moe HIGASHIDA (M2, Teaching Assistant),  
Keina NAKAMURA (M1, Teaching Assistant), Mai HASEGAWA (B4, Student  
Assistant), Yusuke WATANABE (B4, Student Assistant)

授業内容

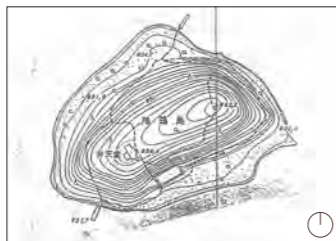
- |   |  |
|---|--|
| 1) トレース課題 I<br>「水道道の家」(設計: 鈴木アトリエ)<br>意匠図 (鉛筆描き、1/50、1/100) | 5) ウォーミングアップトレース<br>・線の描き方<br>・私の家 (設計: 清家 清)<br>・白の家 (設計: 篠原 一男)<br>・ひな壇基礎の家 (設計: ihrmk)<br>・身体スケール、植栽<br>・階段のスタディ<br>・塔の家 (設計: 東 孝光)<br>・ヒアンスハウス (設計: 立原 道造) |
| 2) 模型製作課題 I<br>「水道道の家」<br>(軸組模型、1/50)                       | 6) 春休み課題<br>浜田山の家 (軸組模型 1/50)  |
| 3) 空間演習<br>「光のスタディ」<br>(模型: 1/30)                           |  |
| 4) 設計課題 I<br>「セカンドハウス」(下記参照)                                |  |

第一課題 光・風・自然を感じるセカンドハウス

河口湖に浮かぶ「鶺鴒の島」に、セカンドハウスを設計してください。既成の  
考え方やスタイルにとらわれない、この島の環境を活かした、日常生活から  
離れたセカンドハウスならではの、自由な発想の空間による新鮮なライフス  
タイルの提案を期待します。

【設計条件】

- ・原則として木造とし、柱・梁の配置など、架構を具体的に表現すること。
- ・延床面積は、65㎡前後とし、外部空間は自由に設定してください。
- ・配置は島全体から好きな場所を  
選んでください。



【敷地情報】

計画敷地は、河口湖に浮かぶ、木々  
に覆われた高低差が激しい無人島  
「鶺鴒の島」。  
面積: 0.028km<sup>2</sup>  
標高: 859m

非常勤講師 経歴

鈴木 信弘  
Nobuhiro SUZUKI

1963年生まれ、1986年神奈川大学卒、1988年神奈川大学大学院修士  
課程修了、1988年-1996年東京工業大学工学部建築学科助手、1994  
年鈴木アトリエ一級建築士事務所開設  
—代表作—  
神奈川大学29号館 JAPAN WOOD DESIGN AWARD 2015ウッドデザイン賞 受賞

井原 佳代  
Kayo IHARA

1979年東京都生まれ、2002年神奈川大学工学部建築学科卒、2004年  
キングストン大学大学院美術・デザイン・建築学部卒、2009年-2016年  
シーラカンスアンドアソシエイツ、2016年ihrmk参加  
—代表作—  
ひな壇基礎の家 Fantastic Kitchen Competition グランプリ

安達 萌子 光・風・自然を感じるセカンドハウス 連なる空間



鎌田 芽萌 水面に浮かぶピアノ 水面に浮かぶピアノ



久保田 唯

Yui KUBOTA

深碧の景観と空間

Abyss landscape and space



野中 美奈

Mina NONAKA

木々と共に

With the trees

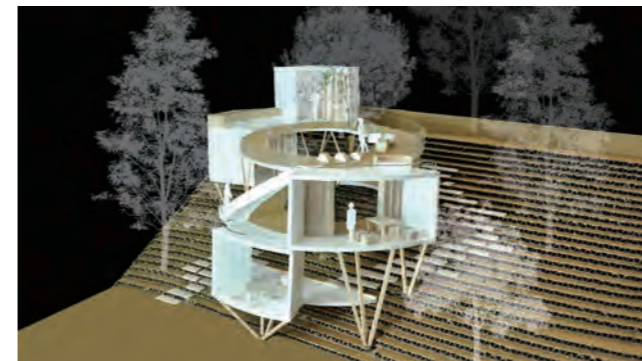


町山 李桜

Rio MACHIYAMA

自然と生きる家

House to live with nature

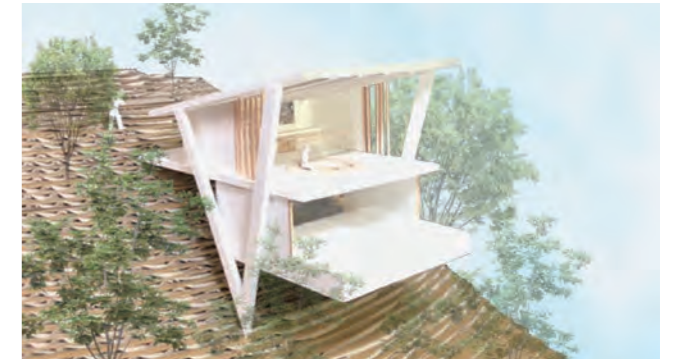


宮島 里帆

Riho MIYAJIMA

島の息吹を感じる家

A house that feels the breath of the island

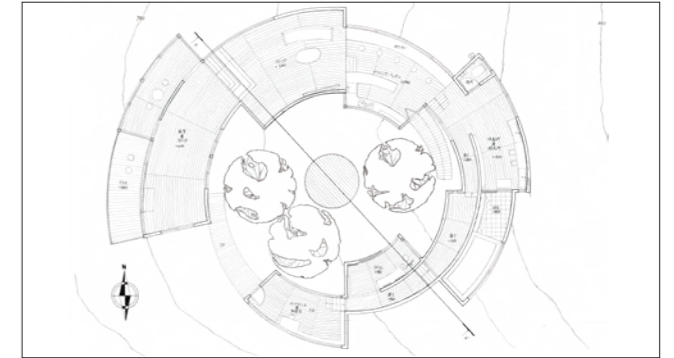


穂屋下 直輝

Naoki HOYASHITA

スキップハウス

Skip house



山内 悠斗

Yuto YAMAUCHI

VARIOUS SPACE

Various space





NEWS

課外活動ほか

学外コンペ

留学生レポート

### テクノサークル 建築をつくる会

#### 活動の目的

学部における建築デザイン教育では、建築物をリアルに作り出す機会は少ない。この経緯から立ち上げたのが「建築をつくる会」通称つくけんである。実際のスケールで作り、建築を構成すること・つくること・体験することの間にある連続性を体験することで、設計演習の中では得られない、素材に対する感覚・スケール感覚・実生活における観察力を育むことが期待できる。さらに共同制作に必要な能力の育成も目的とする。



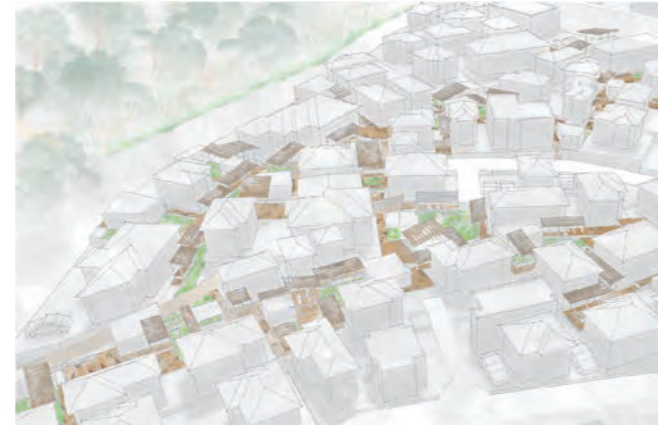
#### 具体的な活動

六角橋商店街の「食べくらナイト」と神大フェスタに焦点を合わせて休憩所の設営を行った。400×400×400の格子を角材で製作し、合板で面の部分を構造の補強材・装飾として様々なパターンを製作した。両イベントは子供から高齢の方まで参加される。利用者ごとの機能の違いを観察するには最適であった。内部に光源を設置することで光をデザインし、イベント空間の一体感を出すことに成功した。



### 2018年度支部共通事業日本建築学会 設計競技「住宅に住む、そしてそこで稼ぐ」

残余地で縫う 竹島 大地、米山 昂佑 [関東支部入選]



#### 空を貫く拡張都市

-コアのバトンタッチが作り出す新たな経済・防災システムの提案-  
金井 賢三、水上 翔太 [四国支部入選]



「2018年度支部共通事業日本建築学会設計競技住宅に住む、そしてそこで稼ぐ」において、竹島大地さん(当時山家研究室修士1年)、米山昂佑さん(当時山家研究室修士1年)が関東支部入選し、金井賢三さん(当時山家研究室修士1年)、水上翔太(当時石田研究室修士1年)が四国支部に入選しました。

### 木の家設計グランプリ2018 「もう一度、庭付き一戸建て」- 郊外での暮らしの再考 -

やぎと暮らす家  
-まちの立体的な庭、動植物の性質に寄り添う建築の提案-  
竹島 大地、千々松 海図 [最優秀賞]



#### まちの庭と立体的な庭



「木の家設計グランプリ 2018 もう一度、庭付き一戸建て - 郊外での暮らしの再考-」において竹島大地さん(当時山家研究室修士1年)が信州大学の千々松海図さんと共に最優秀賞を受賞しました。

### 木材を使った家具のデザインコンペ 2018

赤松スタッキングチェア 倒れた御神木の再生  
内山 大輝、田中 啓介、森島 駿平、城間 リカルド、  
原 巧、浜崎 隆一、上田 悠生 [入選]

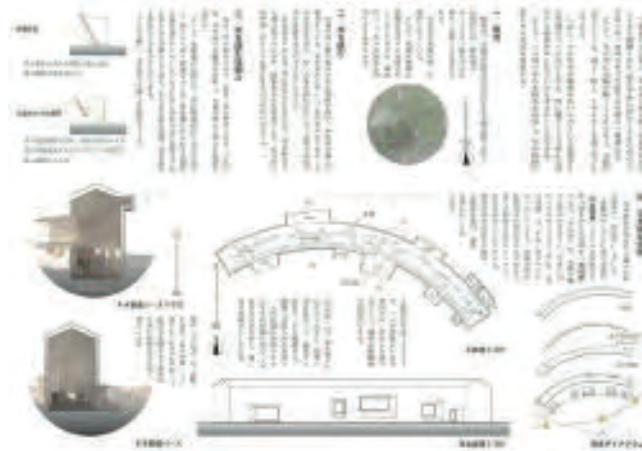


「木材を使った家具のデザインコンペ2018」において、内山大輝さん(当時曾我部研究室修士1年)、原巧さん(当時曾我部・吉岡研究室4年)、他曾我部研究室卒業生が入選しました。

第9回JIA・テスクチャレンジ設計コンペ  
冬の光と過ごす空間

光を読む

原山 雅也 [優秀賞]

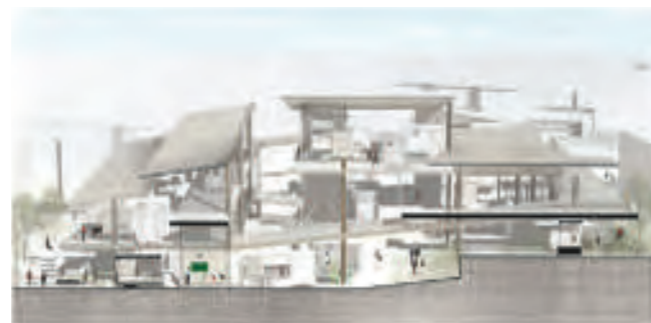


「第9回JIA・テスクチャレンジ設計コンペ 冬の光と過ごす空間」において、原山雅也さん(当期中井研究室修士2年)が優秀賞を受賞しました。第9回JIA・テスクチャレンジ設計コンペは公益社団法人日本建築家協会北海道支部と株式会社テスクの共催の北海道における建築に関するコンペティションです。

第12回長谷工住まいのデザインコンペティション  
働き方を変える集合住宅

家に帰る家

水上 翔太、門田 大希 [最優秀賞]



団地の編集 -部屋に住んで、部屋を移る-

内山 大輝、浜松 謙太 [佳作]

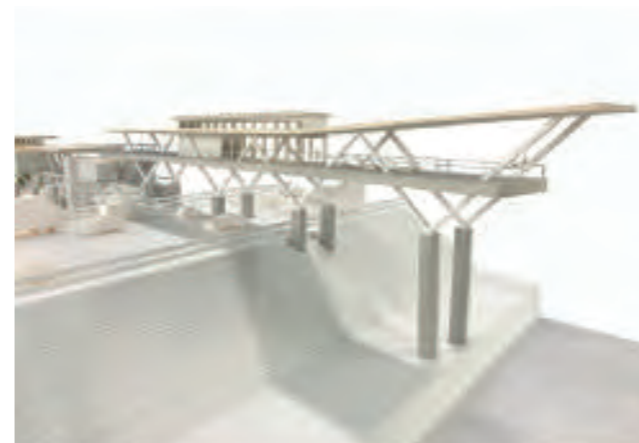


「第12回長谷工住まいのデザインコンペティション 働き方を変える集合住宅」において、水上翔太さん(当時石田研究室修士1年)、門田大希さん(当時石田研究室修士1年)が最優秀賞を受賞し、内山大輝さん(当時曾我部研究室修士1年)、浜松謙太さん(当時石田研究室修士1年)が佳作を受賞しました。

第30回JIA 神奈川建築 Week  
かながわ建築祭2018大学卒業設計コンクール

日常をつなぐ架け橋

佐塚 将太 [銅賞]



空隙の秋葉原 -都市部における建築の更新のあり方-

前田 紗希 [総合資格学院賞]



「第30回JIA神奈川建築Week かながわ建築祭2018大学卒業設計コンクール」にて、佐塚将太さん(当時曾我部・吉岡研究室4年)が銅賞を受賞し、前田紗希さん(当時曾我部・吉岡研究室4年)が総合資格学院賞を受賞しました。作品の詳細は42~45ページに記載されています。

第18回住宅課題賞2018入選作品展

消え入る境界の果てに

佐塚 将太 [優秀賞 3等]



「第18回住宅課題賞2018入選作品展」において、佐塚将太さん(当時曾我部・吉岡研究室4年)が優秀賞3等を受賞しました。

## フランス留学記事

中井研究室修士2年  
**丹羽 貴行**  
 Takayuki NIWA



## フランス留学記事

石田研究室修士2年  
**藤原 陽平**  
 Yohei FUJIWARA



私は、国立モンペリエ高等建築学校に留学しています。街は地中海性気候の近くもあつてか、日本と比べて温暖で、歩いても汗をかかないぐらい過ごしやすい地域です。そうした、暖かな地域もあつてか人々は、黄色な石造りの街並みに並べられたテラスに集まり、ご飯を食べていたり、コーヒーやお酒を飲みながら談笑していたり豊かな時間を過ごしていました。こうした外部のオープンスペースの使い方が広場や道に溢れ出すように使われていて、多くの人が外のテラスに集まる様子が見て取れました。そして、路地に入ればどこかで見たことのあるような絵画の風景に出会えます。

大学の授業では、すべてフランス語で行われます。フランス語が理解できないのと英語にもまだ自信がなかったので、最初の1、2ヶ月はかなり辛かったです。現在まで楽しく学校生活を送れているのは、同じスタジオで一緒に留学生や ENSAM の学生が色々助けてくれているおかげだと思います。スタジオでのエスキスチェックの際、図面・模型だけでなくコンセプトualなドローイングや詩の朗読など、毎週のエスキスが展示会のようになつてもすごく刺激を受けています。

ヨーロッパに留学している最大の利点は、休暇を利用して近隣の国々に簡単に行けることです。本やネットなどで見ていた建築を実際に自分の目や肌で感じる時、本当に実在していたのかと毎回興奮の連続でした。

昨年、ENSAM から留学していた学生との出会いが、留学をするキッカケでした。激しい都市開発が進み、アイデンティティを失つたと感じる日本は、フランス人の学生の眼には十分日本らしく見えていたようです。私は、彼女たちの感性に興味を持ち、留学を決意しました。

フランスに滞在し、現地の人達の暮らしから彼らの感性を学ぶことが目標でした。しかし、フランス語が話せない事が大きな障壁である事を留学期間中に改めて気づかされました。フランスも日本と同様に、英語圏の国では無いことから、英語が通じないことや英語での会話を拒まれることも多くあり、今でもフランス語を少しでも習得すべきであつたと反省しています。

一方で、言葉の壁はあつたものの、10ヶ月の留学生活で感じられたものも沢山あります。フランスは石造建築が昔から多く、何百年もの歴史を経た街並みが残っており、それに従つて彼らの生活は多様化していきました。流行や経済の発達とは日本と同様に変容しているものの、過去の建築物やその風景を残しながら、時を経て人々の暮らしは成長しているように感じられました。特にモンペリエには24時間営業のお店の様な、日本では当たり前前のもが無く、不便を感じる点は多くありましたが、彼らとの生活ではその環境下で日本とは異なる充実した日々を過ごせたと思います。合理性だけが生活を豊かにしていくものでは無い事を感じさせられる一面でした。

留学生活は慣れない毎日で悩むことが多くある一方、あらゆる事象について深く深く思考をする、そんな10ヶ月でした。



## 日本留学記事

曾我部・吉岡研究室  
**Gorka Valle de Lersundi**  
 バスク大学より



My exchange year in Japan started in September 2018. I came because I wanted to learn about Japan, Japanese architecture and its culture.

I joined Sogabe lab and I do not regret, because everyone in the lab was really kind and friendly and they always were willing to help. My home university doesn't have this concept of laboratories and I think it is really interesting and beneficial to work in real projects as they do here in Japan. At the time, there were two projects on going at Sogabe's laboratory. Unfortunately, I didn't have the opportunity to participate on them as much as I'd like, because I don't speak Japanese and that was a big obstacle. Even though there were some subjects in English, I feel that I would have learnt more if I could speak Japanese, because I wasn't able to follow some lessons and meetings. However, the environment in the laboratory was always perfect to work, so I spent a lot of time there reading about Japanese architecture and doing other projects by my own. I also made really good friends there!

I believe this whole experience has been really beneficial for my future career and myself, it has changed the way I see architecture and grown my knowledge.



## 日本留学記事

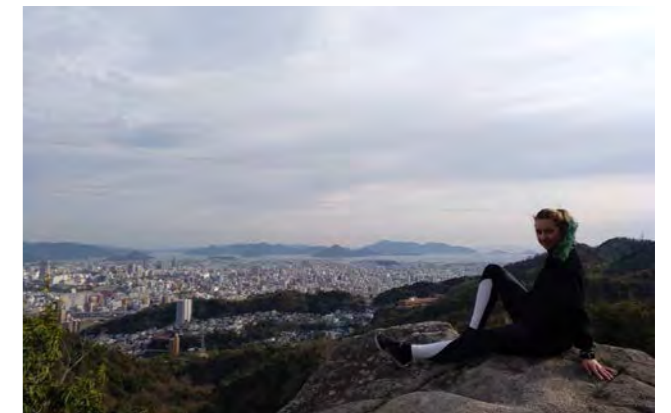
曾我部・吉岡研究室  
**Clem Mn**  
 国立モンペリエ高等建築学校より



When I arrived in Japan in September 2018, I was warmly welcomed in Kanagawa University by M. Sogabe's laboratory. I was amazed that even with the language barrier they were all so kind and helpful to me and made everything to make my arrival and setting up easy. I was thankful to get to integrate this laboratory because I heard a lot about it before, and how the projects created there were of high quality and of course real-life projects. It was fascinating for me to see how the way of working was so different since the goals and stakes were not the same as in my school in France. I even got to participate a little in one of the project!

I also discovered another way of working in Japan: an attention to all details, a will to do a good job (even if it means working long hours), and working as a big team: here, everyone's help is needed. Although it was a little hard to do everything because I couldn't speak Japanese, I learned a lot of theoretical and practical knowledge at the university and I made good memories. Thanks to M. Sogabe, I got an internship at Tezuka Architects, and saw yet another way of working in architecture, with a lot of people working together, and a lot of models.

Finally, this year in Yokohama was a wonderful occasion to learn a lot about architecture in Japan, but also to get to know a very different culture, some amazing people, and, in a sense, myself.



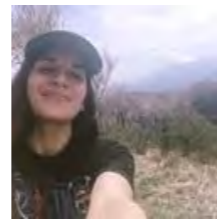
日本留学記事

曾我部・吉岡研究室  
Mikel Marin  
バスク大学より



日本留学記事

曾我部・吉岡研究室  
Tess Bourgenot  
国立モンペリエ高等建築学校より



Every architecture student at one point thinks about travelling to Japan. The way architecture is made in this country is so unique, from traditional architecture to modern architecture. When I got the chance to do my exchange program with Kanagawa University I was looking forward to learning a new way of making architecture and getting a different point of view from the one I had back in Spain.

I chose Sogabe's laboratory because I got interested in the real projects that this laboratory was undertaking at the moment. Communication was the biggest problem at first. But with patience and persistence I could get to communicate and exchange ideas with the Japanese students. The ones that are more fluent in English are very helpful, they are always trying to help you as much as they can with anything you ask. From information about architecture to guidance with subjects and projects. I am so grateful to all the people from the laboratory for making my adaptation process so easy.

For me It has been the year I believe I have grown more as an architect. I have learnt very different design and drawing methods.

Coming in Japan was a dream since my childhood. I've always been fascinated by this culture. When my request for being part of the exchange student program of Kanagawa university had been accepted for 2018, the dream came true. Especially because I was not only here to visit, but also to share about architecture. I would never thank both Kanagawa University and Montpellier National School of Architecture enough.

We had been warmly welcomed and helped anytime. The communication can be hard sometimes but it was really interesting to work within Sogabe's laboratory where the methods of conception and the projects are so different from France. The laboratory atmosphere gives the sense of being a family. There is such a sensitive approach of projects by modeling and giving importance to details. Because the projects are actual, there is also a pragmatic approach in terms of construction and process from the conception to the way people inhabit the projects. I also did three months of internship at Tezuka's office which was a real enrichment in continuity of laboratory's work, especially about wood structure, a Japanese particularity.

It will be, I'm sure, a wonderful enrichment for several aspects of my future as an architect.



建築デザイン研究室

石田敏明 | ISHIDA Toshiaki  
建築デザインコース 教授  
[担当授業] 建築設計論、  
建築デザインI・II 他  
[部屋番号] 8-68A

田野耕平 | TANO Kohei  
建築デザインコース 特別助手  
[担当分野]  
建築デザインI・II、設計製図I  
[部屋番号] 8-68A



集合住宅「Soil」



廃品を利用したアートワークショップ

建築史研究室

内田青蔵 | UCHIDA Seizo  
建築デザインコース 教授  
[担当授業] 建築グラフィックス、西洋  
建築史、建築のデザイン、造形デザイン、  
建築史フィールドワーク他  
[部屋番号] 8-510

須崎文代 | SUZAKI Fumiyo  
建築デザインコース 特別助教授  
[担当授業] 建築グラフィックス、設計  
製図I・II、建築史フィールドワーク他  
[部屋番号] 8-510



建築史Bの講義内容より、辰野金吾設計の日本銀行本館(左)とベルギー銀行(右)の比較



上海の街歩きの様子

都市デザイン研究室

曾我部昌史 | SOGABE Masashi  
建築デザインコース 教授  
[担当授業]  
建築デザインII・III、  
都市デザイン論 他  
[部屋番号] 8-63

吉岡寛之 | YOSHIOKA Hiroyuki  
建築デザインコース特別助教  
[担当授業]  
設計製図II、  
建築デザインI・III他  
[部屋番号] 8-63



宮城気仙沼大島で竹のシェルターを製作

建築計画研究室

中井邦夫 | NAKAI Kunio  
建築デザインコース 教授  
[担当授業] 設計製図I・II、  
建築計画A 他  
[部屋番号] 8-67A



2009年、台東区浅草文化観光センターコンペ入選案



2013年、「富久町の家」

都市計画研究室

山家京子 | YAMAGA Kyoko  
建築デザインコース 教授  
[担当授業] 都市計画、  
建築デザインI、建築計画B 他  
[部屋番号] 8-66A

上野正也 | UENO Masaya  
建築デザインコース 特別助教  
[担当授業] 設計製図I・II 他  
[部屋番号] 8-66A



十日市場 たからものマップ

## 神奈川大学工学部建築学科・大学院工学研究科建築学専攻 沿革

- 1928 米田吉盛が「横浜学院」創設(旧横浜市中区桜木町)
- 1929 専門学校令により「横浜専門学校」設立認可
- 1930 六角橋に移転、横浜キャンパス開設(5月15日 創立記念日)
- 1949 学制改革により「神奈川大学」設置
- 1952 神奈川大学整備拡張計画(設計:山口文象/RIA)
- 1965 神奈川大学工学部建築学科創設(初代学科長:谷口忠教授、定員80名)  
8号館(建築学科研究室、製図室)竣工
- 1967 12号館(建築学科総合実験棟)竣工
- 1971 大学院工学研究科建築学専攻博士前期(修士)課程設置
- 1973 かな会(建築学科同窓会)設立
- 1985 建築学科創設20周年 記念誌発刊
- 1990 大学院工学研究科建築学専攻博士後期課程設置
- 1994 建築学科にシステムコースとデザインコースの2コース制導入
- 1998 横浜キャンパス再開発開始(2002年完了)
- 2005 RAKU(デザインコース年鑑)vol.1発刊
- 2006 建築学科に建築環境コース、建築構造コース、建築デザインコースの3コース制導入  
第1回東アジア大学建築学術交流セミナー(以後毎年開催)  
日本建築学会120周年記念大会を神奈川大学で開催
- 2008 神奈川大学創設80周年、「学校法人神奈川大学将来構想」公表
- 2015 建築学科創設50周年 記念誌発刊



8号館

### 建築学科・専攻関連の主な学術交流協定校 \*派遣交換留学有り(U:全学 E:部局間)

- アジア:同済大学(中国、1982~)、武漢理工大学(中国、1982~)、成均館大学校(韓国、2002~)、  
国立台湾科技大学(台湾、\*E 2005~)、モンクット王工科大学トンブリー校(タイ、\*E 2019~)
- 欧州:デンマーク王立芸術アカデミー建築大学(デンマーク、\*E 2010~)、国立モンペリエ高等建築大学(フランス、\*E 2013~)、  
バスク大学(スペイン、\*U 2017~)、ルツェルン応用科学芸術大学工学・建築学部(スイス、\*U 2017~)、  
チェコ工科大学(チェコ、\*U 2018~)、カールスルーエ応用科学大学(ドイツ、\*U 2018~)、  
ケルン工科大学(ドイツ、\*U 2018~)
- その他:タスマニア大学(オーストラリア、\*U 2011~)

## RAKU バックナンバー

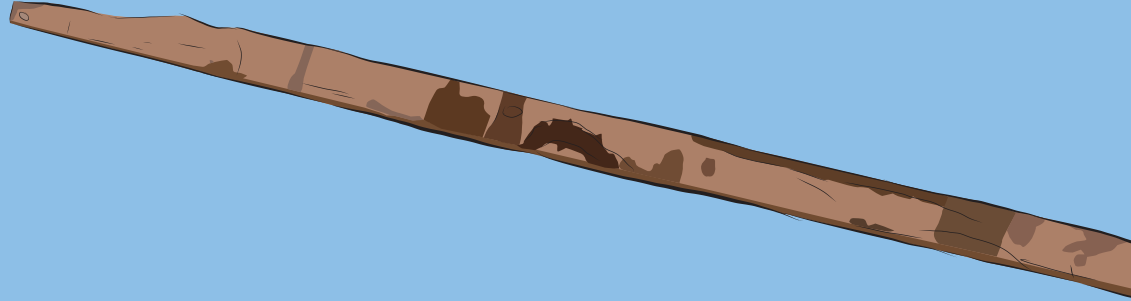


RAKUは、神奈川大学工学部建築学科建築デザインコースで2005年から発行しています。第6号以降は、毎月多彩なテーマの特集を組み、大学院生主体の取材と制作により、単なる学生作品紹介誌を超えた建築誌としても楽しめるように企画しています。今号からは新たに学外から編集者の二階さちえ氏(編集事務所 階ラボ)を起用し、第12号からご担当頂いているデザイナーのqp氏とともに、さらにパワーアップしました。読んで眺めてお楽しみください。(建築デザインコース主任 中井邦夫)

編集/岡本晴美、小田凌大朗、門田大希、濱松謙太、早川史洋、水上翔太、  
中村圭那、内山大輝、太田朗人、王天浩、馬島夏美、諸橋克哉、楊思航、  
金井賢三、竹島大地、米山昂佑、野々村明佳里、李林軒、劉洪君、  
烏達木、掛川真乃子、齋藤健太、塚本祐士、横山優莉奈、飯田康二郎、  
長谷川舞、向咲重、渡辺悠介、佐塚将太、鈴木啓生、白露、原巧、  
古本将大、前田沙希、梁汎、永盛栗、下山美月

監修/中井邦夫、田野耕平、吉岡寛之、  
上野正也、須崎文代  
特集ページ編集/二階さちえ  
デザイン/qp

「RAKU Vol.15」 発行/神奈川大学工学部建築学科建築デザインコース  
発行日/2019年7月31日 [横浜キャンパス] 横浜市神奈川区六角橋3-27-1



*REVIEW OF ARCHITECTURAL DESIGN COURSE,  
KANAGAWA UNIVERSITY*